

吹田市

吹田操車場遺跡11

吹田市新市民病院移転建替事業に伴う吹田操車場遺跡発掘調査報告書

2015年12月

公益財団法人 大阪府文化財センター

吹田市

吹田操車場遺跡11

吹田市新市民病院移転建替事業に伴う吹田操車場遺跡発掘調査報告書



調査地遠景（北東から）

序 文

吹田操車場遺跡は昭和 42 年に発見された遺跡で、大阪府の北部、吹田市に所在します。遺跡が所在する場所は、旧国鉄吹田操車場跡地にあたります。吹田市と摂津市に跨って建設された旧国鉄吹田操車場は総面積 76 万㎡もの広さを誇り、大正 12 年に操業を開始して以降 60 余年にもわたり「東洋一の操車場」と称されるほど物流の大動脈として日本経済を支えきましたが、モータリゼーションの波に押され、昭和 59 年に操車場としての幕を閉じました。

その後、J R 貨物吹田信号場駅として機能してきましたが、平成 10 年に J R 梅田貨物駅の機能の一部を移管する計画が持ち上がり、それとともに J R 貨物ヤードに使用される以外の操車場跡地について吹田市と摂津市は「緑と水につつまれた健康・教育創世拠点の創出」を目指したまちづくり計画を策定し、平成 21 年から本格的に事業が始まりました。

今回の調査は、市立吹田市民病院の移転建替えに先立ち実施したもので、古代から中世の掘立柱建物や井戸、さらに木棺墓などがみつき、流路状の谷を挟んで集落域が広がっていることが確認されました。遺物も後期難波宮に供給するため、近隣で操業されていた七尾瓦窯で焼成された瓦も出土したことから、将来的に瓦の供給を考えていくうえで必要な資料が蓄積されたといえます。

最後になりましたが、発掘調査および遺物整理作業の実施にあたり、多大のご協力をいただきました地方独立行政法人市立吹田市民病院、独立行政法人都市再生機構西日本支社北大阪都市再生事務所、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構国鉄清算事業西日本支社、日本貨物鉄道株式会社、吹田市教育委員会、大阪府教育委員会をはじめとする関係各位には、心より感謝申し上げます。

今後とも、当センターの事業により一層のご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 27 年 12 月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理 事 長 田 邊 征 夫

例 言

1. 本書は、大阪府吹田市芝田町に所在する吹田操車場遺跡（14－3）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、北部大阪都市計画事業吹田操車場跡地土地区画整理事業施行地区内の4街区で計画されている吹田市新市民病院移転建替事業に伴い、地方独立行政法人市立吹田市民病院より委託を受け、大阪府教育委員会及び吹田市教育委員会の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地調査は平成26年10月1日から平成27年4月30日まで行った。引き続き遺物整理は平成27年5月1日から同年9月30日まで行い、平成27年12月28日に本書の刊行を以って完了した。
3. 調査および整理に関する調査体制は以下の通りである。

現地調査

[平成26年度]

事務局次長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、調査第一課長補佐 三好孝一、主査 後藤信義、副主査 奥村茂輝

[平成27年度]

事務局次長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、主査 後藤信義、副主査 奥村茂輝

整理作業

[平成27年度]

事務局次長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、主査 後藤信義、専門員 片山彰一（写真室）、山口誠一（保存室）
4. 遺物写真撮影は中部調査事務所写真室が行った。
5. 発掘調査および整理作業の過程で、以下の諸氏ならびに諸機関にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい（順不同・所属は当時のもの）。

網 伸也（近畿大学）、岡本敏行（大阪府教育委員会）、増田真木・賀納章雄・西本安秀（吹田市教育委員会）、地方独立行政法人市立吹田市民病院、独立行政法人都市再生機構西日本支社北大阪都市再生事務所、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構国鉄清算事業西日本支社、日本貨物鉄道株式会社
6. 本書の作成は後藤が担当し、奥村が補佐した。第2章および第4章の一部を奥村が執筆したが、第2章に関しては、これまでの調査成果と大きく変わるものではないことから、当センター発行の吹田操車場遺跡に関する既刊の発掘調査報告書から引用し、一部加筆・修正したものである。上記以外の章については後藤が執筆し、編集は後藤が行った。
7. 本書に関わる写真・実測図などの記録類および出土遺物は吹田市教育委員会において保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構図および断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。図中の標高は、すべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値であり、T.P.+は省略した。
2. 座標値は世界測地系（測地成果 2000）による平面直角座標系第Ⅵ系に基づき表示し、単位はすべてmである。
3. 全体図および遺構実測図の方位は、いずれも国土座標軸第Ⅵ系の座標北を示す。
4. 現地調査および遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010 に準拠した。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006 年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。
6. 遺構番号は、通しで遺構ごとに付した。遺構番号—遺構名とし、複数の遺構の集合体である掘立柱建物は、それとは別に遺構番号を付した。整理作業では、基本的に調査時の遺構番号をそのまま使用した。（例：「1 溝」・「356 井戸」、「掘立柱建物 1」）
7. 遺構面の呼称は、第 2 層を除去して検出した遺構面については「第 2 層下面」といったように、基本的には遺構面の直上に堆積する層位の下面として呼称するが、最終遺構面については、上層に堆積する層位に関係なく「第 4 層下面」と呼称する。
8. 遺構図における断面位置は、図面上に「ㄣ」で示した。なお、遺構が密集している箇所では図面が煩雑になるため、「ㄣ」は示さず、断面図に方位を記入している。
9. 遺物実測図の縮尺は、4 分の 1 を基本とするが、石製品・金属製品などで小型のものは 3 分の 2 で掲載するなど、遺物の大きさに即した縮尺としたため、一部はこの限りではない。各図面にはスケールを付しているので参照されたい。また、写真図版の遺物は縮尺を統一していない。
10. 遺物実測図のうち、須恵器は断面を黒塗りで表現した。それ以外の土器は断面白抜きである。
11. 掲載遺物は、通し番号を付し、本文・挿図・写真図版ともに一致する。
12. 本書を作成するにあたり、以下のものを引用および参照した。

アサヒビール株式会社 1990 『Asahi 100』

足利健亮 1985 『日本古代地理研究』 大明堂

足利健亮 1990 「摂津古道の原形—三嶋路と長尾の直道—」『西国・丹波街道 歴史の道調査報告書』 第 6 集大阪府教育委員会

関西大学考古学研究室編 1973a 『吉志部古墳発掘調査報告』 吹田市史

関西大学考古学研究室編 1973b 『吹田 2 号須恵器窯跡発掘調査報告』

関西大学考古学研究室編 1975 『垂水遺跡第 1 次発掘調査概報』 吹田市史編纂室

九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会 10 周年記念』

古代の土器研究会編 1992 『古代の土器 1 都城の土器集成』

古代の土器研究会編 1993 『古代の土器 2 都城の土器集成Ⅱ』

古代の土器研究会編 1994 『古代の土器 3 都城の土器集成Ⅲ』

古代の土器研究会編 1996 『古代の土器 4 煮炊具（近畿編）』

小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究—日本律令の土器様式の成立と展開、7 世紀～19 世紀—』 真陽社

吹田市教育委員会 1975 『佐井寺須恵器窯跡発掘調査概報』

吹田市教育委員会 1977 『垂水南遺跡発掘調査概報』

吹田市教育委員会 1978 『垂水南遺跡発掘調査概報Ⅱ』

吹田市教育委員会 1979 『垂水南遺跡発掘調査概報Ⅲ』

吹田市教育委員会編 1979 『佐井寺東地区土地区画整理事業にともなう埋蔵文化財試掘調査概要報告書』吹田市都市開発部区画整理課

吹田市教育委員会編 1980 『佐井寺東地区土地区画整理事業にともなう埋蔵文化財試掘調査概要報告書』吹田市都市開発部区画整理課

吹田市教育委員会 1982 『昭和 56 年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報 垂水南遺跡 吉志部遺跡 32 号須恵器窯跡』

吹田市教育委員会 1983 『昭和 57 年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報 吉志部 2・3 号墳 吹田 29 号須恵器窯跡 垂水南遺跡』

吹田市教育委員会 1984 『昭和 58 年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報 七尾瓦窯跡 垂水南遺跡』

吹田市教育委員会 1985 『昭和 59 年度 埋蔵文化財発掘調査概報 垂水南遺跡 七尾瓦窯跡』

吹田市教育委員会 1986 『昭和 60 年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報 蔵人遺跡 七尾瓦窯跡 垂水南遺跡吹田 32 号須恵器窯跡』

吹田市教育委員会 1987 『昭和 61 年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報 吉志部瓦窯跡』

吹田市教育委員会 1987 『吉志部瓦窯跡（府営岸辺住宅建替に伴う発掘調査報告書）』

吹田市教育委員会 1988 『昭和 62 年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報 吉志部瓦窯跡 垂水遺跡』

吹田市教育委員会 1990 『平成元年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報 吹田 53 号須恵器窯跡 吹田城推定地 垂水遺跡』

吹田市教育委員会 1992 『平成 3 年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報 吹田城跡推定地 垂水遺跡 垂水西原古墳』

吹田市教育委員会 1992 『史跡七尾瓦窯跡環境整備報告書』

吹田市教育委員会 1994 『佐井寺南土地区画整理事業にともなう埋蔵文化財調査報告書』

吹田市教育委員会 1996 『平成 7 年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報 垂水遺跡 垂水南遺跡』

吹田市教育委員会 1998 『吉志部瓦窯跡（工房跡）一都市計画道路千里丘豊津線工事に伴う発掘調査報告書 1 一』

吹田市教育委員会 1999 『七尾瓦窯跡（工房跡）一都市計画道路千里丘豊津線工事に伴う発掘調査報告書 2 一』

吹田市教育委員会 1999 『目俵遺跡一目俵市民体育館建設工事に伴う発掘調査報告書一』

吹田市教育委員会 2001 『吹田の石器時代一旧石器時代～縄文時代草創期を中心に一』

吹田市教育委員会 2002 『七尾東遺跡発掘調査報告書一第 1 次・第 2 次・第 3 次一』

吹田市教育委員会 2005 『垂水遺跡発掘調査報告書 I 一垂水遺跡第 24 次発掘調査一』

吹田市教育委員会 2008 『垂水南遺跡発掘調査報告書 I 一垂水南遺跡第 55 次発掘調査一』

吹田市教育委員会 2008 『吹田操車場遺跡確認調査報告書』

吹田市教育委員会 2011 『吉志部瓦窯跡一出土瓦整理報告書一図版編』

吹田市教育委員会 2012 『吉志部瓦窯跡一出土瓦整理報告書一』

吹田市史編さん委員会 編 1975 『吹田市史』第 2 巻 吹田市役所

吹田市史編さん委員会 編 1981 『吹田市史』第 8 巻 吹田市役所

吹田市史編さん委員会 編 1990 『吹田市史』第 1 巻 吹田市役所

吹田市立博物館 1996 『平成 8 年度特別展 鉄道沿線物語一鉄道の発達と吹田一』

吹田市立博物館 2008 『平成 20 年度（2008 年度）秋季特別展 ビールが村にやってきた！』

吹田市立博物館 2009 『わかりやすい吹田の歴史 本文編』

- 鋤柄俊夫 1988 「畿内における古代末から中世の土器－模倣系土器生産の展開－」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 日本中世土器研究会
- 鋤柄俊夫 1988 「大阪府南部の瓦質土器生産（2）」『中近世土器の基礎的研究』Ⅴ日本中世土器研究会
- 中世土器研究会編 1998 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 鍋島敏也・藤原学 1974 『千里古窯跡群』藤原童心社
- 西 弘海 1986 『土器様式の成立とその背景』真陽社
- 服部昌之 1983 『律令国家の歴史地理学的研究－古代の空間構造－』大明堂
- 山田邦和編 1994 『平安京出土土器の研究』古代學研究所研究報告第4輯（財）古代學協會・古代學研究所
- 西口陽一他編 1999 『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第42集 吹田操車場遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 阪田育功他編 2001 『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第66集 吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 山元 建編 2006 『(財)大阪府文化財センター調査報告書 第145集 片山荒池遺跡』(財)大阪府文化財センター
- 中岡 勝編 2008 『(財)大阪府文化財センター調査報告書 第180集 吹田操車場遺跡Ⅲ』(財)大阪府文化財センター
- 岡本圭司他編 2010 『(財)大阪府文化財センター調査報告書 第201集 吹田操車場遺跡Ⅳ』(財)大阪府文化財センター
- 辻本 武編 2011 『(財)大阪府文化財センター調査報告書 第216集 吹田操車場遺跡Ⅴ』(財)大阪府文化財センター
- 新海正博編 2011 『(財)大阪府文化財センター調査報告書 第217集 吹田操車場遺跡Ⅵ』(財)大阪府文化財センター
- 奥村茂輝編 2011 『(公財)大阪府文化財センター調査報告書 第220集 吹田操車場遺跡Ⅶ』
(公財)大阪府文化財センター
- 新海正博編 2012 『(公財)大阪府文化財センター調査報告書 第232集 明和池遺跡1 吹田操車場遺跡8 西の庄東遺跡』
(公財)大阪府文化財センター
- 奥村茂輝他編 2012 『(公財)大阪府文化財センター調査報告書 第226集 明和池遺跡2』(公財)大阪府文化財センター
- 岡本圭司編 2013 『(公財)大阪府文化財センター調査報告書 第240集 吹田操車場遺跡9』
(公財)大阪府文化財センター
- 鹿野 壘編 2014 『(公財)大阪府文化財センター調査報告書 第248集 吹田操車場遺跡10・明和池遺跡3』
(公財)大阪府文化財センター

目 次

巻頭カラー図版

序 文

例 言

凡 例

目 次

第1章	調査に至る経緯と経過、調査・整理の方法	1
第1節	調査に至る経緯と経過	1
第2節	調査・整理の方法	2
第2章	遺跡の立地と歴史的環境	5
第1節	遺跡の立地	5
第2節	歴史的環境—周辺の遺跡—	5
第3節	吹田操車場遺跡および近隣の遺跡における既往の調査	9
第3章	遺構と遺物	10
第1節	1～4区	10
1.	概要	10
2.	基本層序	10
3.	古代の遺構と遺物	17
4.	古代末から中世の遺構	48
第2節	5区	64
1.	概要	64
2.	基本層序	64
3.	調査成果	64
第3節	6区	66
1.	概要	66
2.	基本層序	66
3.	調査成果	68
第4章	まとめ	72

插图目次

図1 調査地位置図……………	1	図35 掘立柱建物7 平・断面図……………	37
図2 地区割図……………	3	図36 掘立柱建物14 平・断面図……………	38
図3 調査区割・地区割図……………	3	図37 509柱穴 出土遺物……………	39
図4 遺跡分布図……………	6	図38 掘立柱建物15 平・断面図……………	39
図5 1～4区 平面図……………	11～12	図39 掘立柱建物16 平・断面図……………	40
図6 1～4区 断面図(1)……………	13～14	図40 152・163土坑、117・118・124・127・	
図7 1～4区 断面図(2)……………	15～16	151・529溝、498落込み 平・断面図 ……	41
図8 集落域1 平面図……………	18	図41 152・163土坑、118・151溝・498落込み	
図9 掘立柱建物1 平・断面図……………	19	出土遺物……………	41
図10 掘立柱建物2 平・断面図……………	20	図42 487・489木棺墓、490土壇墓 平・断面図	42
図11 掘立柱建物3 平・断面図……………	21	図43 487木棺墓 出土遺物……………	42
図12 掘立柱建物8 平・断面図……………	22	図44 2区 南東壁 断面図……………	43
図13 掘立柱建物13 平・断面図……………	22	図45 谷部 第2層 出土遺物……………	45
図14 75土坑、356・357井戸 平・断面図 ……	23	図46 谷部 第3層 出土遺物(1)……………	47
図15 75土坑、356・357井戸 出土遺物 ……	24	図47 谷部 第3層 出土遺物(2)……………	48
図16 358・485井戸 平・断面図……………	25	図48 谷部 第3層 出土遺物(3)……………	49
図17 358井戸 出土遺物……………	25	図49 谷部 第3層 出土遺物(4)……………	50
図18 486井戸 平・断面図……………	26	図50 谷部 第4層 出土遺物……………	50
図19 486井戸 出土遺物……………	26	図51 集落域1(古代末～中世)平面図……………	51
図20 67・74・354・380溝 断面図……………	27	図52 集落域1(古代末～中世)平・断面図(1) ……	52
図21 67・354・380溝 出土遺物……………	27	図53 集落域1(古代末～中世)出土遺物(1) ……	53
図22 集落域2 平面図……………	28	図54 集落域1(古代末～中世)平・断面図(2) ……	54
図23 掘立柱建物11 平・断面図……………	29	図55 集落域1(古代末～中世)平・断面図(3) ……	55
図24 422ピット、90・414・441土坑、413井戸、		図56 集落域1(古代末～中世)出土遺物(2) ……	55
462溝 平・断面図……………	30	図57 集落域1(古代末～中世)包含層 出土遺物	56
図25 422ピット、414土坑 出土遺物……………	30	図58 集落域2(古代末～中世)平面図……………	58
図26 445木棺墓 平・断面図……………	31	図59 416柱穴 出土遺物……………	59
図27 437・469落込み 断面図……………	31	図60 掘立柱建物9 平・断面図……………	59
図28 437・469落込み 出土遺物……………	31	図61 掘立柱建物10 平・断面図……………	60
図29 集落域3 平面図……………	33	図62 掘立柱建物12 平・断面図……………	61
図30 掘立柱建物4 平・断面図……………	34	図63 440土坑、472土壇墓 平・断面図……………	61
図31 掘立柱建物5 平・断面図……………	35	図64 472土壇墓 出土遺物……………	61
図32 掘立柱建物6 平・断面図……………	36	図65 412溝 断面図……………	62
図33 掘立柱建物6 出土遺物……………	36	図66 412溝 出土遺物……………	62
図34 178柱穴 出土遺物……………	37	図67 集落域2(古代末～中世)包含層 出土遺物	62

図 68	116 池 平面図	63	図 75	5 区 出土遺物	65
図 69	116 池 断面図	63	図 76	6 区北西壁 断面図	66
図 70	116 池 出土遺物	63	図 77	6 区 平面図	67
図 71	集落域 3 (古代末~中世) 包含層 出土遺物	63	図 78	1・5 溝、3 土坑 平・断面図	68
図 72	5 区東壁 断面図	65	図 79	3 土坑 出土遺物	69
図 73	5 区 平面図	65	図 80	6 区包含層 出土遺物	70
図 74	6 溝 断面図	65	図 81	全体平面図	75 ~ 76

写真図版目次

巻頭カラー図版	1. 調査地遠景 (北東から)	断面 (西から)
図版 1	1・2 区 北西壁断面	4. 2 区 第 4 層下面 掘立柱建物 1 110 柱穴
1. 1 区	北西壁断面東半部 (南から)	断面 (東から)
2. 1 区	北西壁断面西半部 (南から)	5. 2 区 第 4 層下面 掘立柱建物 1 112 柱穴
3. 2 区	北西壁断面 (南東から)	断面 (東から)
図版 2	3 区 北西壁断面・1 区 北東壁断面	図版 8 古代 集落域 1 (3)
1. 3 区	北西壁断面 (東から)	1. 2 区 第 4 層下面 掘立柱建物 2 (西から)
2. 1 区	北東壁断面中央部 (南から)	2. 2 区 第 4 層下面 掘立柱建物 2 94 柱穴
3. 1 区	北東壁断面南半部 (西から)	断面 (東から)
図版 3	2・4 区 北西壁断面	3. 2 区 第 4 層下面 掘立柱建物 2 96 柱穴断面
1. 2 区	南西壁断面中央部 (北東から)	(南から)
2. 2 区	南西壁断面南半部 (北東から)	4. 2 区 第 4 層下面 掘立柱建物 2 100 柱穴
3. 4 区	南西壁断面 (北から)	断面 (西から)
図版 4	1・2 区 第 4 層下面全景	5. 2 区 第 4 層下面 掘立柱建物 2 101 柱穴
1. 1 区	第 4 層下面 全景 (南東から)	断面 (西から)
2. 2 区	第 4 層下面 全景 (北西から)	図版 9 古代 集落域 1 (4)
図版 5	3・4 区 第 4 層下面全景	1. 1 区 第 4 層下面 掘立柱建物 3 (東から)
1. 3 区	第 4 層下面 全景 (東から)	2. 1 区 第 4 層下面 掘立柱建物 8 (北から)
2. 4 区	第 4 層下面 全景 (南東から)	図版 10 古代 集落域 1 (5)
図版 6 古代 集落域 1 (1)		1. 1 区 第 4 層下面 掘立柱建物 13 (北から)
1. 1 区	第 4 層下面 集落域 1 (南から)	2. 2 区 第 4 層下面 75 土坑 遺物出土状況
2. 2 区	第 4 層下面 掘立柱建物 1・2 (北から)	(南から)
図版 7 古代 集落域 1 (2)		図版 11 古代 集落域 1 (6)
1. 2 区	第 4 層下面 掘立柱建物 1 (西から)	1. 1 区 第 4 層下面 356 井戸 断面 (南から)
2. 2 区	第 4 層下面 掘立柱建物 1 106 柱穴	2. 1 区 第 4 層下面 358 井戸 断面 (南から)
断面 (西から)		3. 1 区 第 4 層下面 358 井戸 完掘状況
3. 2 区	第 4 層下面 掘立柱建物 1 107 柱穴	(北から)

図版 12 古代 集落域 1 (7)

1. 1 区 第 4 層下面 357 井戸 中層遺物
出土状況 (南から)

2. 1 区 第 4 層下面 357 井戸 下層遺物
出土状況 (北から)

3. 1 区 第 4 層下面 357 井戸 断面 (南から)

図版 13 古代 集落域 1 (8)・谷・集落域 3

1. 3 区 第 4 層下面 集落域 1・3 と谷 (北から)

2. 3 区北東端部 第 4 層下面 集落域 1 (東から)

図版 14 古代 集落域 1 (9)

1. 3 区 第 4 層下面 486 井戸 断面 (南から)

2. 3 区 第 4 層下面 486 井戸 井戸枠・遺物
出土状況 (南から)

3. 3 区 第 4 層下面 486 井戸 完掘状況
(南から)

図版 15 古代 集落域 2 (1)

1. 1 区 第 4 層下面 集落域 2 全景 (西から)

2. 2 区 第 4 層下面 90 土坑 断面 (北西から)

3. 1 区 第 4 層下面 413 土坑・412 溝 断面
(南東から)

4. 1 区 第 4 層下面 441 土坑 断面 (南西から)

図版 16 古代 集落域 2 (2)

1. 1 区 第 4 層下面 445 木棺墓 検出状況
(北東から)

2. 1 区 第 4 層下面 445 木棺墓 棺内埋土
除去状況 (北東から)

図版 17 古代 集落域 2 (3)

1. 1 区 第 4 層下面 445 木棺墓 完掘状況
(北東から)

2. 1 区 第 4 層下面 445 木棺墓 断面 (東から)

図版 18 古代 集落域 2 (4)

1. 1 区 第 4 層下面 437 落込み 土器出土状況
(西から)

2. 1 区 第 4 層下面 469 落込み・462 溝 断面
(南から)

3. 1 区 第 4 層下面 469 落込み 土器出土状況
(南から)

図版 19 古代 集落域 3 (1)

1. 4 区 第 4 層下面 集落域 3 西半部 全景
(北から)

2. 4 区 第 4 層下面 集落域 3 西半部 掘立柱
建物 4~7 (北東から)

図版 20 古代 集落域 3 (2)

1. 4 区 第 4 層下面 掘立柱建物 4 188 柱穴
断面 (北から)

2. 4 区 第 4 層下面 掘立柱建物 4 189 柱穴
断面 (北から)

3. 4 区 第 4 層下面 掘立柱建物 4 192 柱穴
断面 (南から)

4. 4 区 第 4 層下面 掘立柱建物 4 194 柱穴
断面 (南から)

5. 4 区 第 4 層下面 掘立柱建物 5 200 柱穴
断面 (東から)

6. 4 区 第 4 層下面 掘立柱建物 5 201 柱穴
断面 (東から)

7. 4 区 第 4 層下面 掘立柱建物 5 202 柱穴
断面 (東から)

8. 4 区 第 4 層下面 掘立柱建物 5 204 柱穴
断面 (南から)

図版 21 古代 集落域 3 (3)

1. 4 区 第 4 層下面 掘立柱建物 6 172 柱穴
断面 (南から)

2. 4 区 第 4 層下面 掘立柱建物 6 173 柱穴
断面 (西から)

3. 4 区 第 4 層下面 掘立柱建物 6 176 柱穴
断面 (西から)

4. 4 区 第 4 層下面 掘立柱建物 6 177 柱穴
断面 (北から)

5. 4 区 第 4 層下面 掘立柱建物 7 178 柱穴
断面 (東から)

6. 4 区 第 4 層下面 掘立柱建物 7 181 柱穴
断面 (東から)

7. 4 区 第 4 層下面 掘立柱建物 7 183 柱穴
断面 (西から)

8. 4 区 第 4 層下面 掘立柱建物 7 185 柱穴
断面 (西から)

図版 22 古代 集落域 3 (4)

1. 3区 第4層下面 集落域3東半部 全景
(北から)

2. 3区 第4層下面 集落域3東半部 掘立柱
建物 14・15・529 溝 (北から)

図版 23 古代 集落域 3 (5)

1. 3区 第4層下面 掘立柱建物 14 519 柱穴
断面 (南から)

2. 3区 第4層下面 掘立柱建物 14 521 柱穴
断面 (北から)

3. 3区 第4層下面 掘立柱建物 14 522 柱穴
断面 (南から)

4. 3区 第4層下面 掘立柱建物 14 523 柱穴
断面 (南から)

5. 3区 第4層下面 掘立柱建物 15 505 柱穴
断面 (南から)

6. 3区 第4層下面 掘立柱建物 15 509 柱穴
断面 (北から)

7. 3区 第4層下面 掘立柱建物 15 512 柱穴
断面 (北から)

8. 3区 第4層下面 掘立柱建物 15 513 柱穴
断面 (東から)

図版 24 古代 集落域 3 (6)

1. 3区 第4層下面 掘立柱建物 16 (東から)

2. 3区 第4層下面 掘立柱建物 16 525 柱穴
断面 (西から)

3. 3区 第4層下面 掘立柱建物 16 526 柱穴
断面 (北から)

4. 3区 第4層下面 掘立柱建物 16 527 柱穴
断面 (北から)

5. 3区 第4層下面 掘立柱建物 16 528 柱穴
断面 (北から)

図版 25 古代 集落域 3 (7)

1. 4区 第4層下面 152 土坑 遺物出土状況
(西から)

2. 4区 第4層下面 117 溝 断面 (南西から)

3. 4区 第4層下面 118 溝 断面 (南西から)

図版 26 古代 集落域 3 (8)

1. 4区 第4層下面 124 溝 断面 (南西から)

2. 4区 第4層下面 127 溝 断面 (南西から)

3. 4区 第4層下面 151 溝 断面 (南東から)

図版 27 古代 集落域 3 (9)

1. 3区 第4層下面 487 木棺墓 完掘状況
(東から)

2. 3区 第4層下面 487 木棺墓 断面 (東から)

図版 28 古代 集落域 3 (10)

1. 3区 第4層下面 489 木棺墓 完掘状況
(西から)

2. 3区 第4層下面 489 木棺墓 断面 (東から)

図版 29 古代 集落域 3 (11)

1. 3区 第4層下面 490 木棺墓 完掘状況 (東
から)

2. 3区 第4層下面 490 木棺墓 断面 (東から)

図版 30 古代 谷

1. 2区 第4層下面 谷 完掘状況 (西から)

2. 2区 第4層下面 谷 完掘状況 (南から)

図版 31 古代 谷断面・古代末～中世 集落域 1 (1)

1. 2区 第4層下面 谷 断面 (西から)

2. 2区 第2層下面 集落域 1 ピット群
(北東から)

図版 32 古代末～中世 集落域 1 (2)

1. 1区 第2層下面 243 ピット 断面 (南から)

2. 2区 第2層下面 49 土坑 断面 (南から)

3. 2区 第2層下面 52 土坑 断面 (西から)

図版 33 古代末～中世 集落域 1 (3)

1. 2区 第2層下面 55 土坑 断面 (南西から)

2. 2区 第2層下面 65 土坑 断面 (南から)

3. 2区 第2層下面 70 土坑 断面 (南から)

図版 34 古代末～中世 集落域 2 (1)

1. 1区 第2層下面 集落域 2 掘立柱建物 9・
10 検出状況 (南西から)

2. 1区 第2層下面 掘立柱建物 12 (南東から)

図版 35 古代末～中世 集落域 2 (2)

1. 1区 第2層下面 472 土壇墓 検出状況
(南東から)

2. 1区 第2層下面 472 土壇墓 遺物出土状況

(南東から)

3.1区 第4層下面 440土坑 断面(東から)

図版36 古代末~中世 集落域2(3)・集落域3・

5区 北西壁断面

1.1区 第2層下面 412溝 遺物出土状況

(南から)

2.4区 第2層下面 116池 断面(北東から)

3.5区 北東壁断面(南西から)

図版37 5区 第4層下面 全景・6区 北西壁断面

1.5区 第4層下面 全景(南東から)

2.6区 北西壁断面東半部(南東から)

3.6区 北西壁断面西半部(南東から)

図版38 6区 第1層下面・第2層下面 全景

1.6区 第1層下面 全景(北東から)

2.6区 第2層下面 全景(北東から)

図版39 6区 第4層下面 全景

1.6区 第4層下面 全景(東から)

2.6区 第4層下面 全景(南から)

図版40 6区 検出遺構

1.6区 第2層下面 1溝 断面(南西から)

2.6区 第4層下面 3土坑 瓦片出土状況

(南から)

3.6区 第4層下面 5溝 断面(南西から)

図版41 出土遺物(1)

図版42 出土遺物(2)

図版43 出土遺物(3)

図版44 出土遺物(4)

図版45 出土遺物(5)

図版46 出土遺物(6)

第1章 調査に至る経緯と経過、調査・整理の方法

第1節 調査に至る経緯と経過

本調査は、吹田市新市民病院移転建替事業に伴うもので、調査地は吹田市芝田町地内にあたる（図1）。

吹田市片山町に所在する市立吹田市民病院は、昭和28（1953）年に吹田市出口町に設立されたが、昭和57（1982）年に移転新築されたものである。

市立吹田市民病院は、設立時より今日まで吹田市の中核病院として、市民のための病院としての役割を果たしてきた。しかし、現病院は建設後30年余が経過し、施設の老朽化が顕著となってきた。また、耐震性能についても不十分で、災害時に防災拠点としての病院機能を維持することが困難なことが予想された。

そこで、平成23（2011）年12月、将来に向けた基本的な方針・方向性として「吹田市新市民病院基本構想[暫定版]（素案）」が策定された。その後、国立循環器病研究センターの建設が予定されてい

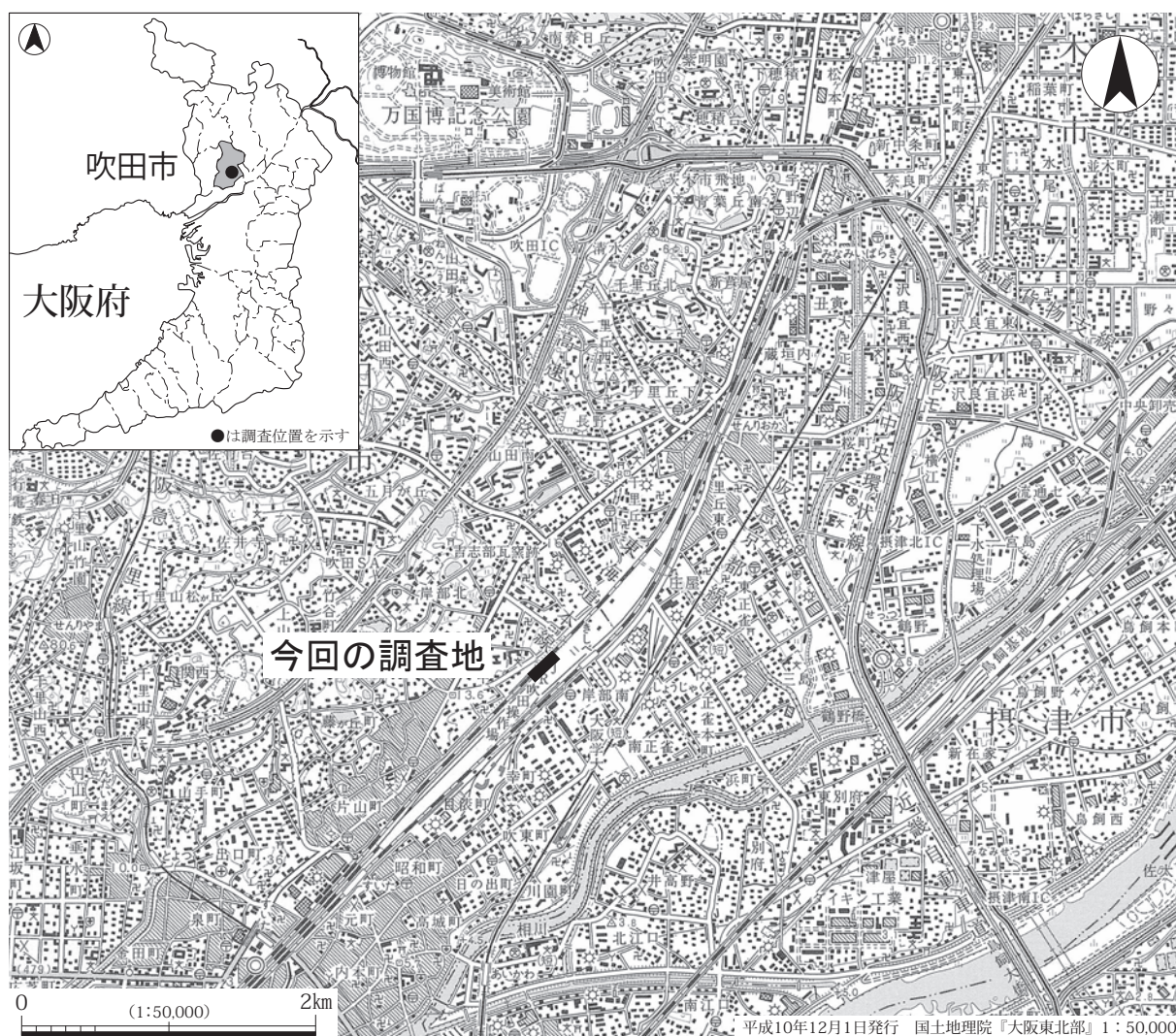


図1 調査地位置図

る吹田操車場跡地への移転が決定され、医療クラスターを形成するべく、平成 30（2018）年開院を目指すこととなった。

移転先となった吹田操車場跡地は、大正 12（1923）年に「東洋一の操車場」として操業を開始し、昭和 59（1984）年にその役割を終えた旧国鉄吹田操車場の敷地にあたる。この吹田操車場跡地は平成 10（1998）年に当時の日本国有鉄道清算事業団近畿支社により、J R 貨物梅田駅の機能を吹田操車場跡地（現：J R 貨物 吹田貨物ターミナル駅、平成 25 年 3 月 4 日開業）と百済駅（現：百済貨物ターミナル駅、平成 25 年 3 月 10 日開業）へ移管する計画が持ち上がった。同用地内に周知の遺跡である「吹田操車場遺跡」があることから、取り扱いについて同社と大阪府教育委員会が協議を行い、移転用地内全域を対象として遺跡の確認調査を実施した。その結果、操車場跡地のほぼ全域にわたって旧石器時代から中世に至る広範な複合遺跡であることが判明した。その後、吹田貨物ターミナル駅基盤整備工事の計画に伴い、平成 12（2000）年から継続的に調査が進められた。

一方、貨物ヤードに使用される以外の操車場跡地について、吹田市と摂津市が「緑と水につつまれた健康・教育創生拠点の創出」を目指したまちづくり計画の策定を進めてきた。この計画を進めていく上で埋蔵文化財の状況を把握するため、独立行政法人鉄道建設・運輸施設支援機構と吹田市・摂津市が協議し、平成 19・20（2007・2008）年に遺跡確認調査が実施された。

平成 21（2009）年にまちづくり用地の土地区画整理事業の事業計画および施工規程の認可が告示され、本格的な区画整理事業が始められたことに伴い、当センターが独立行政法人都市再生機構西日本支社より委託を受けて、平成 21（2009）年 10 月～平成 25（2013）年まで吹田市教育委員会・摂津市教育委員会の協力を得ながら発掘調査を実施した。

今回、地方独立行政法人 市立吹田市民病院の委託を受けて、吹田市教育委員会と大阪府教育委員会の指導のもと、平成 26（2014）年 10 月～平成 27（2015）年 4 月まで発掘調査を実施した。調査は、病院棟、立体駐車場、防火水槽、および外構部分について行い、調査面積は合計 8,948 m²であった。

さらに、発掘調査に引き続き、平成 27（2015）年 12 月 28 日まで遺物整理作業および報告書作成作業を行い、本書の刊行をもって事業を終了した。

第 2 節 調査・整理の方法

発掘調査および整理作業は、当センター「遺跡調査基本マニュアル」2010 に準じて実施した。

まず、調査名であるが、遺跡名に調査開始年度（西暦）と年度内における調査数を付した「吹田操車場遺跡 14－3」とした。

調査地の地区割は、世界測地系に基づいた国土座標軸を使用しており、本調査においても平面直角座標系第 VI 系を基準とし、I～VI 段階の区画を設定しているが（図 2）、今回の調査では第 IV 区画までを用いた。設定された地区割を平面実測図作成時や平板測量時の基準としたほか、遺物の取り上げ単位として用いた。ただし、遺物取り上げ作業は基本的に第 IV 区画である 10 m 区画を単位として行ったが、煩雑さを避けるため遺物取り上げラベルへは、第 III・第 IV 区画のみを記入した。なお、本調査区域の第 I・第 II 区画は「J 5－7」である。

調査は開発による掘削深度が遺構面にまで達する「病院棟＋外構（7,689 m²）」「防火水槽（104 m²）」「立体駐車場（1,155 m²）」建設予定地の 3 箇所について行われた。

調査区名は、調査面積が 7,689 m²を測る「病院棟+外構」部分は、ラフタークレーンを使用した航空測量における撮影可能範囲や、残土置き場の確保等を考慮して短冊形に 4 分割し、1～4 区と付した。以下、「防火水槽」部分を 5 区、「立体駐車場」部分を 6 区として調査を行い、実測や写真撮影、遺物の取り上げ時にもそれぞれの調査区名を付して作業を行った（図 3）。なお、調査は作業の効率化等を考慮し、6 区、5 区、2 区、4 区、1 区、3 区の順で実施した。

遺構番号は、遺構の種類にかかわらず通し番号を付し、遺構の種類は番号の後ろに付した。例えば「1

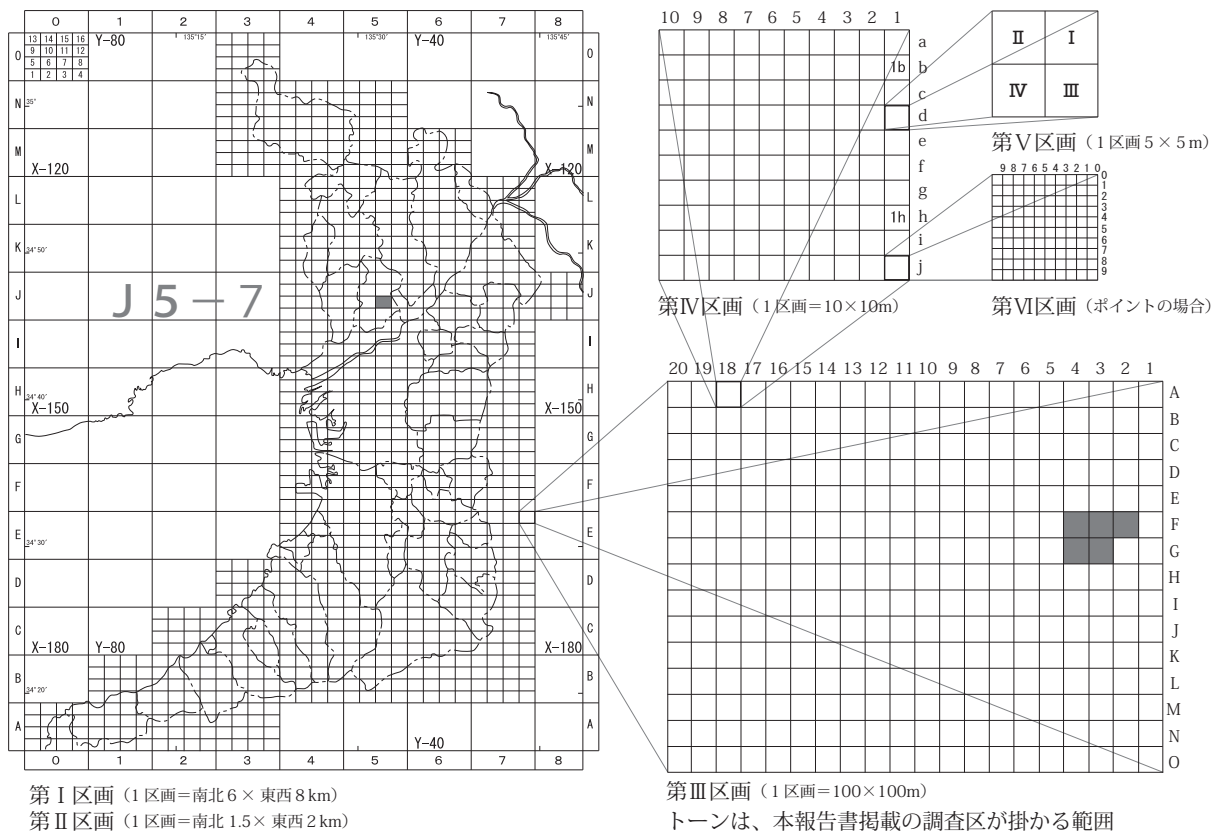


図 2 地区割図

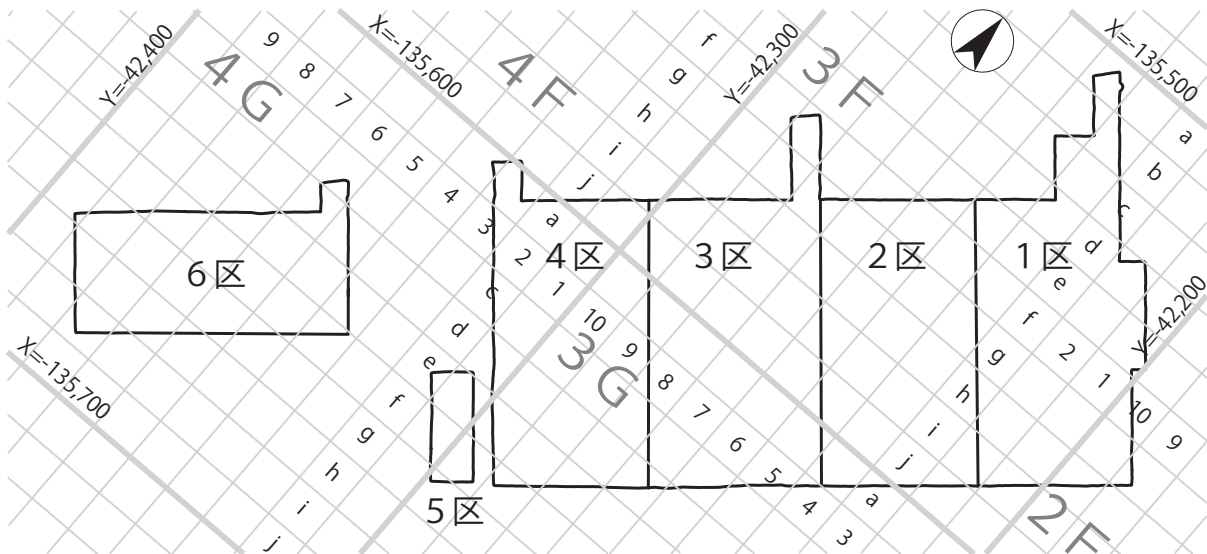


図 3 調査区割・地区割図

土坑」「2井戸」「3溝」といった具合である。ただし、複数の遺構で構成される掘立柱建物については「掘立柱建物1」といった具合に遺構種類の後に番号を付した。

調査を進めるに際し、3級基準点2点と4級基準点5点の設置、並びに4級水準点測量（距離0.6km）を業務委託によって実施した。あわせて、各調査区における最終遺構面の測量に関しては、効率的な測量を行うため、ラフタークレーンを使用した空中写真測量を業務委託で5回（合計8,090㎡）実施した。調査は、現況測量を行った後、旧吹田操車場造営時の盛土と造営前の旧耕作土層、さらに近世に属する地層について、重機を用いて掘削を行った。なお、機械掘削中に地中障害物が検出された際、必要に応じて市立吹田市民病院、UR、鉄道運輸機構、JR貨物の立会を受け、対応を協議した。

機械掘削後、ベルトコンベアや排水ポンプを設置して、人力掘削を開始した。人力掘削では、包含層の掘削とともに遺構面を精査、検出し、遺構を検出、掘削した。必要に応じて遺構面の平板測量、遺構の平・断・立面の実測等を行った。

現地での写真撮影は、6×7カメラ、35mmカメラを使用し、それぞれ黑白フィルム、リバーサルフィルムを用いて行った。さらに、台帳作成に使用するためデジタルカメラによる撮影も行った。

また、空中写真測量時に高所作業車を使用して、調査区全体を俯瞰した撮影を行った。

発掘調査期間中、各調査区の最終遺構面検出前後に、吹田市教育委員会と大阪府教育委員会による立会を受け、適宜調査指導を受けた。

さらに、現場作業の合間に、出土した遺物の洗浄と注記、実測した遺構図面や撮影した写真の整理、台帳作成等の基礎整理事業を随時実施した。なお、遺物への注記は「スイタソウシャ14-3-登録番号」としたが、破片が小さく注記ができないものは袋にまとめ、他の遺物とともに封入した。

整理事業についても、前述の当センターマニュアルに準拠して平成27年5月から行った。

基礎整理事業を終えた出土遺物の中から、遺跡や遺構の時期・性格等の判断材料となる特徴をもった遺物を抽出した後、必要に応じて接合作業を行い、一部については石膏による復原作業を行った。

これらの抽出した遺物については、実測作業を行い、瓦等の遺物に関しては必要に応じて拓本を採った。これらの遺物実測図は遺構面や層位、遺構ごとに編集して挿図を作成した。

現地にて手測りで作成した遺構実測図および航空測量によって作成した遺構実測図に、修正・加工を加えて挿図を作成した。

挿図の浄書は、遺構図に関しては、すでにデジタル化された全体図と個別遺構図を除いて、原図をスキャナーで取り込んだのち、Adobe社製IllustratorCS5を用いてデジタルトレースを行った。一方、遺物実測図についても、遺構図と同様に原図をスキャニングした後、デジタルトレースを行った。また、拓本については縮小して複写したものを貼り込んだ。

現地で撮影した遺構面や個別遺構の写真は報告書に掲載するものを選別し、焼付け作業を行った後、写真図版として編集した。また、抽出した遺物の一部は必要に応じて写真撮影、現像、焼付け作業を行った後、写真図版として編集を行った。これら一連の撮影、現像、焼付け作業については中部調査事務所の写真室において行った。

以上の作業と並行して報告文を作成し、挿図図版と写真図版とあわせて編集作業を行った。また、出土遺物については報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類して収納した。さらに、現地および整理事業の中で作成した実測図面や現地で撮影した写真についても台帳を作成したのち収納した。

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

吹田操車場遺跡が位置する吹田市は淀川の北岸に位置し、南は大阪市、東は摂津市、西は豊中市、北は茨木市と箕面市に接する。大阪平野の北側には、地質学上の年代でいうところの新第三紀から第四紀、すなわち今から約2300万年前から約260万年前にかけて形成された大阪層群が丘陵地として露頭している。千里丘陵もそういった丘陵地の一つで、吹田操車場遺跡は千里山丘陵の南裾に位置する。そのため遺跡の周辺には、丘陵上に源を発する山田川や安威川、正雀川などの河川が淀川河口に向けて流れている。このように遺跡周辺の地形は、北東から南西に向けて流れる大河川淀川に、千里丘陵に端を発する複数の小河川が河口付近で流れ込むというものである。

吹田市域のみならず周辺における遺跡の分布を概観すると、千里丘陵などの丘陵地上でかつ小河川に近接する場所に立地する遺跡と、丘陵の裾すなわち平野部でかつ小河川に近接する場所に立地する遺跡、以上の二者に分かれる。吹田操車場遺跡は後者に該当する。遺跡の位置する場所は大河川と小河川に近い平野部という地形的特質から、農業生産や物資運搬に適した土地であった。

第2節 歴史的環境—周辺の遺跡—

以下では調査地周辺の遺跡について時代ごとに述べる（図4）。なお一部図4に記載した範囲を超える遺跡についてもふれる。

（1）旧石器時代

調査地周辺の主な旧石器時代の遺跡としては、吉志部遺跡、吉志部瓦窯跡、垂水遺跡が挙げられる。吉志部遺跡では、採集資料のほかに第7次調査において旧石器類とともに礫群が検出されており、吉志部瓦窯の工房跡でも礫群が検出されている。垂水遺跡では、採集や発掘調査によりナイフ形石器などのサヌカイト製の旧石器類が確認されている。

このほか、高城遺跡で小形のナイフ形石器が、目俵遺跡ではナイフ形石器や角錐状石器や翼状剥片などが出土しており、従来知られていた吉志部遺跡や垂水遺跡のような千里丘陵の縁辺部だけではなく、平野部においても旧石器時代の遺物が確認されている。なお、上述の目俵遺跡では、落込み内の埋土から鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、7300年前）の堆積が検出されている。

（2）縄文時代

調査地周辺の遺跡では、縄文時代に該当する建物跡や墓などの遺構検出例はない。以下の遺跡で、石器あるいは土器の採集・出土資料がみられる程度である。

縄文時代の石器の出土例としては、吉志部遺跡での縄文時代草創期に属する有舌尖頭器、同時期の石鏃などの採集・出土例が挙げられる。また、七尾瓦窯の工房跡においても縄文時代草創期のものとされる尖頭器が1点出土している。このほか、中ノ坪遺跡においてチャート製の有舌尖頭器が1点出土しており、片山公園遺跡では木葉形尖頭器の基部とみられる石器片が1点採集されている。

縄文土器の出土事例としては、高浜遺跡出土の縄文時代中期前半の船元式土器の破片や、豊嶋郡条里



平成 12 年国土地理院発行 1/50,000 「大阪東北部」をベースに、大阪府地図情報提供システムの埋蔵文化財に基づき作成

- | | | | | |
|-----------------|---------------|-----------------|------------------|-------------------|
| 1. 吹田操車場遺跡 | 13. 浜の堂遺跡 | 25. 昭和町遺跡 B 地点 | 37. 岸部東遺跡 | 49. 千里丘東 3 丁目所在遺跡 |
| 2. 明和池遺跡 | 14. 都呂須遺跡 | 26. 片山遺跡 | 38. 吉志部瓦窯跡 | 50. 千里丘東 4 丁目遺跡 |
| 3. 吹田操車場遺跡 B 地点 | 15. 東正雀第 2 地点 | 27. 片山荒池遺跡 | 39. 吉志部 1 号墳 | 51. 庄屋 1 丁目所在遺跡 |
| 4. 吹田操車場遺跡 C 地点 | 16. 宮之前遺跡 | 28. 目俣遺跡 | 40. 七尾瓦窯跡 | 52. 庄屋 2 丁目所在遺跡 |
| 5. 吹田須恵器窯跡群 | 17. 高浜遺跡 | 29. 円塚古墳 | 41. 七尾東遺跡 | 53. 東正雀所在遺跡 |
| 6. 東奈良遺跡 | 18. 神境町遺跡 | 30. 片山芝田遺跡 | 42. 似禅寺山遺跡 | 54. 千里丘東 4 丁目所在遺跡 |
| 7. 片山前遺跡 | 19. 朝日町遺跡 | 31. 天道遺跡 | 43. 西の庄東遺跡 | 55. 千里丘 7 丁目所在遺跡 |
| 8. 常楽寺跡 | 20. 昭和町遺跡 | 32. 片山芝田遺跡 B 地点 | 44. 蜂前寺跡 | 56. 千里丘 6 丁目所在遺跡 |
| 9. 三宅城跡 | 21. 高城 B 遺跡 | 33. 中ノ坪遺跡 | 45. 千里丘遺跡 | 57. 千里丘東 1 丁目遺跡 |
| 10. 正雀 1 丁目遺跡 | 22. 吹田城跡推定地 | 34. 原東遺跡 | 46. 千里丘 2 丁目所在遺跡 | |
| 11. 東正雀遺跡 | 23. 高城遺跡 | 35. 吉志部遺跡 | 47. 千里丘 3 丁目所在遺跡 | |
| 12. 元町遺跡 | 24. 高畑遺跡 | 36. 岸部中遺跡 | 48. 千里丘東 2 丁目遺跡 | |

図 4 遺跡分布図

遺跡出土の縄文時代後期の土器、七尾瓦窯、七尾東遺跡、目俵遺跡で出土した縄文時代晩期の土器などが挙げられる。

以上のように、少ないながらも縄文時代を通して人間の活動痕跡が確認できる。

(3) 弥生時代

弥生時代の遺跡としては、建物跡などが検出されている以下の遺跡が挙げられる。

垂水遺跡は、千里丘陵南端の標高約 55 m の丘陵部から南側の平野部にかけて広がる、弥生時代の集落を中心とする複合遺跡（旧石器～中世）である。弥生時代の集落は、出土土器からみる限り、弥生時代前期に始まり後期に最も盛行する。これまでの発掘調査により、丘陵の平坦面において弥生時代後期の竪穴建物 4 棟、掘立柱建物 1 棟が検出されている（関西大学考古学研究室編 1975・吹田市史編さん委員会編 1981）。

吹田操車場遺跡北側の七尾東遺跡では、弥生時代中期後半の竪穴建物 1 棟などが検出されている。

吹田操車場遺跡の南側では、標高 5.0 m 前後の平野部に位置する目俵遺跡で、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての掘立柱建物が 8 棟検出されている。掘立柱建物が検出された南側には、湿地状であったと思われる落込みがあり、建物はこの湿地状部分の際に建てられていたようである。

平成 22（2010）年には、吹田操車場遺跡の北東側に隣接する摂津市明和池遺跡において、弥生時代後期後半の竪穴建物 7 棟が検出され、今後の調査によって集落の様相がさらに明らかになることが期待される。

このほか、中ノ坪遺跡では、弥生時代後期の方形周溝墓の可能性のある溝が検出されている。また、北泉遺跡では弥生時代前期と、弥生時代後期から古墳時代前期までの土器などがまとめて出土しているほか、その他周辺の遺跡においても弥生時代の遺物が出土している。

(4) 古墳時代

弥生時代後期の集落が発見された垂水遺跡では、古墳時代の建物は検出されていないものの、古墳時代前期の遺構や溶解途中の倣製鏡片や土器などの遺物が確認されており、この時期まで集落は継続するものと思われる。中期になると韓式系土器などが少量出土しているのみで、遺構・遺物ともに減少し、集落は衰退したようである。

これに対して、垂水遺跡南側丘陵下の平野に位置する垂水南遺跡は、古墳時代前期に盛行する集落で、竪穴建物や掘立柱建物などが検出されている。この遺跡が位置する場所は、現在の標高が標高約 2～3 m と低く、また、湿地性と思われる植物遺体が確認されていることから、集落が営まれていた時期には概ね湿地状であったようである。建物跡は、この中の微高地上で検出されている。

吹田市域に分布する古墳の中で、前期古墳と推定されるものは垂水西原古墳のみである。標高 77 m 付近の丘陵尾根上に築かれており、石室材と思われる石材が発見されているが、詳細については明らかでない。

その後、5 世紀末から 6 世紀初頭には吉志部古墳 2・3 号墳や、大正 2（1913）年頃に土取工事により消滅してしまった出口古墳が築かれた。7 世紀初めには、横穴式石室を主体部とする吉志部 1 号墳や、木室墳である新芦屋古墳が築造された。

このほか、古墳時代における調査地周辺の状況として特筆すべきことは、丘陵部で多くの須恵器窯が築かれたことである。千里丘陵には、吹田市域だけで 50 基以上の須恵器窯（吹田須恵器窯跡群）が築かれており、豊中市域の桜井谷窯跡群と合わせると、窯の数は現在確認できているものだけで 120 基

以上にのぼる。吹田市域の窯については、吹田 32 号窯が最も古く、5 世紀初頭のものとする。5 世紀前半には吹田 54 号窯が操業されるものの、その後、吹田市域では須恵器窯はあまりみられなくなる。5 世紀末には、豊中市域の桜井谷窯跡群において築窯が始まるが、吹田市域で窯が多く築かれるのは 6 世紀前半になってからである。千里丘陵での須恵器生産は、桜井谷窯跡群で一部 8 世紀まで続けられる以外は、吹田市域においては 7 世紀中頃にはほぼ終焉する。

既述のように、吹田市域には古墳が比較的少なく、良好な資料がきわめて少ないが、一方で陶棺片が 15 箇所確認されている。これらは、土師質と須恵質のものがあるが、須恵器製作時に用いられるものと同様の調整具の痕跡がみられることや、須恵器窯跡でも陶棺片が確認されていることなどから、これらの陶棺が千里丘陵の須恵器生産に関わった人々によって製作されたと考えられる。

(5) 古代・中世

古墳時代には、須恵器生産が盛んであった千里丘陵では、古代になると須恵器にかわり瓦生産が盛んになる。7 世紀末には白頭瓦窯で瓦生産が始まり、8 世紀前半には難波宮の所用瓦窯である七尾瓦窯が操業し、これから約 50 年後には平安宮の所用瓦窯である吉志部瓦窯が操業する。

古代には、各地で道路の整備や、条里地割が施行される。吹田市域を通る古代道路としては、嶋上郡・嶋下郡・豊嶋郡の三郡を通る三嶋路がある。三嶋路のルートについては、高槻市の芥川町付近から茨木市耳原にかけて今城塚古墳と太田茶白山古墳の南端付近を直線的に通る、耳原で南に折れ、千里丘陵の東辺を南下して垂水付近に至るルートが、足利健亮氏により推定されている。芥川町から耳原にかけての直線道は、近世の山城から西宮を結ぶ西国街道に受け継がれる道であり、その創設時期について足利氏は和銅 4 (711) 年から天平 16 (744) 年の間としている。

条里地割については、吹田市域には、市域西側から豊中市・池田市域にかけての旧豊嶋郡域に広がる豊嶋郡条里と、市域東側から摂津市域にかけての旧嶋下郡域にみられる嶋下南部条里が存在する。嶋下郡と豊嶋郡の境界については不明な点もあるが、今回の調査地は旧嶋下郡と嶋下南部条里の西端付近にあたりと推定される。

嶋下郡の条里については、服部昌之氏が淀川右岸地域の条里についてまとめる中で詳しく述べられている。嶋下郡とその東側の嶋上郡の主要部にあたる、現在の高槻市域から茨木市域にかけては、ほぼ正方位の条里が確認できる（主条里）。嶋下郡の南西部にあたる部分、現在の摂津市域から吹田市域にかけての部分には、西側に 33 度傾いた条里地割が存在し、これが嶋下南部条里である。この嶋下南部条里は、西は吹田の砂堆の東端付近まであり、砂堆上には条里地割はみられない。砂堆を境に西側には豊嶋郡条里が存在する。

また、延暦 4 (785) 年には、淀川・神崎川間で摂津市の一津屋と別府付近を結ぶ運河が開削された。これは、淀川を分流して洪水を防ぐ目的とともに、前年から始まった長岡京造営にかかわる資材運搬のために水路を整備する目的があった。長岡京完成後も、この運河によって難波津を経ずに京と西国を結ぶルートができたため、物資輸送や人の移動手段として盛んに利用され、吹田は水運の要衝として発展していった。

土地支配については、天平 15 (743) 年に墾田永年私財法が施行され、土地の占有化が認められた。この後、律令制の衰退に伴い、平安時代になると社寺や貴族による土地の私有化が進み、各地で荘園が増加した。吹田市域においても、平安時代前期には東寺領垂水荘や摂関家領垂水牧、醍醐寺領吹田荘が成立し、後期には荘園化がさらに進み、新たな荘園が次々に成立した。

室町時代には、在地の有力者として成長した国人領主が各地で現れ、吹田市域では吹田氏が勢力をもっていた。吹田城が史料に初めてみえるのは、建武3(1336)年である。吹田城のあった場所については、明治時代の初期に城跡の伝承を集めてつくられた、『東摂城址図誌』に茨木街道筋に面した字城ヶ前に接する地に吹田城址があったと記されており、この場所は現在の吹田市高城町付近である。またこのほかに、吹田重通が本拠とした吹田城が、西の庄町アサヒビール吹田工場西端から、J R 京都線の路線敷にあったとする説もある。今回の調査地は後者の吹田城推定地の東側にあたる。

第3節 吹田操車場遺跡および近隣の遺跡における既往の調査

吹田操車場遺跡ではこれまでに、吹田市教育委員会や当センターによって数次にわたる調査が行われている。ここでは既往の調査成果について時代を追って記述する。

旧石器時代の遺構は確認されていないが、谷地形の埋土最下層で鬼界アカホヤ火山灰の堆積が確認されている。一方、複数の調査地の包含層からは当該期のサヌカイト製の石器が出土している。

縄文時代においても、建物跡や墓などの遺構は検出されていないが、谷や溝から晩期の土器や石器が出土している。

弥生時代は遺跡の東端部で弥生時代末に属する竪穴建物跡やそれに伴う遺構が検出されている。また、遺跡の西端部の調査でも弥生時代に属する土坑が複数検出されている。遺物は谷や溝から弥生土器をはじめ石鏃や石庖丁などが出土しているが、特に弥生時代後期から古墳時代前期の遺物は多く出土しており、当該期における活動が活発化したことが顧みられる。

古墳時代は弥生時代後期に引き続き遺物の出土は多く、活発な活動の痕跡が確認されている。その中でも流路内から山陰系土師器が出土したことは、地域交流を考慮するために必要な資料といえる。また、それとは別に、後期から飛鳥時代の遺構、遺物が目立つようになる。まず、特筆すべき遺構として中期から古代に属する群集土坑が挙げられる。この群集土坑は、遺跡の背後に千里古窯跡群や古代の瓦窯跡を抱える立地から、粘土採掘坑であると考えられる。さらに谷部にはしる流路内からは、焼け歪み品を含んだ多量の須恵器が投棄された状態で出土しており、当該地が須恵器の選別場所をも担っていたことが推察できる。

古代になると、群集土坑の周辺の微高地上を中心に集落が営まれ、掘立柱建物や井戸などの遺構が検出される。その時期は飛鳥時代から平安時代に跨っており、須恵器生産や瓦生産と深い繋がりがあることを予見させる。

中世には、一部で集落が営まれていたことを示す掘立柱建物や井戸などの遺構も検出されたが、その他は耕作地として利用されるようになり、中世以降はほぼ全域に耕作地が広がっていたことがわかっている。

さらに直近の調査例としては、土地区画整理事業に伴い操車場跡地内の道路予定地が調査され、JR 岸辺駅の東側で弥生時代の土坑や溝、岸辺駅の北側で古墳時代中期の粘土採掘坑や、奈良時代から平安時代の掘立柱建物が検出されている。この区画整理事業では東に隣接する摂津市明和池遺跡でも発掘調査が行われ、弥生時代後期の複数の竪穴建物跡からなる集落と同時期の流路などが検出されたほか、古墳時代後期の須恵器が大量に投棄された流路、奈良時代の掘立柱建物群や同時期の流路などが検出されている。

第3章 遺構と遺物

第1節 1～4区

1. 概要

病院棟および外構部についての調査は作業効率などを考慮し、調査区を4分割して行った(図5、図版4・5)。操車場造営時の盛土を除去した旧耕作土層上面での地形は、調査区の北端部が標高8.1mと最も高いが、棚田状に南に向かって低くなる。概ね標高7.5～7.8mを測るが、2区の南端部は標高7.2mと最も低かった。これは下層面で検出した谷部の影響と考えられる。旧耕作土層の直下は中世以降の耕作土層が認められ、耕作地として利用されていた。

それ以前の状況については後述するが、「Y」字状にはしる谷部とその周囲に広がる3箇所の微高地上にそれぞれ集落域が展開する。集落域1は調査地の北端部に位置し、調査地の中で最高地に位置し、標高7.9mを測る。遺構面は第2層下面の古代末から中世の面と、第4層下面の奈良時代を中心とする古代の遺構面の2時期に分けられ、掘立柱建物、井戸、土坑、溝、ピットなどの遺構を検出した。集落域2は谷の東岸部に位置する標高6.8～7.5mを測る微高地上にあたるが、第3層の堆積がなく、2時期の遺構が第4層下面で検出された。検出された遺構は掘立柱建物、土坑、木棺墓、溝、ピットなどであるが、さらに弥生時代に属すると考えられる溝や落込みを検出した。集落域3は谷の南に位置する微高地で、標高7.1～7.3mを測る。当該域も第3層の堆積がなく、第1・2層を除去して第4層下面を検出した。検出した遺構は古代に属する遺構のみで、掘立柱建物、井戸、土坑、木棺墓、溝、ピット、落込みなどである。一方、谷部には古代の包含層である第3・4層の堆積が認められた。

そこで、今報告においては古代の遺構面と、古代末から中世の遺構面で検出した各集落域と谷部に分けて報告を行うこととする。

2. 基本層序

微高地は後世の耕作による削平が著しく、第1層(近世)もしくは第2層(中世)の堆積が認められた。古代の堆積層である第3・4層は谷部にのみ堆積が認められた(図6・7、図版1～3)。

第1層 旧耕作土層直下に堆積するシルト層を基本とする中世以降の耕作土層である。微高地上では1～2層に細分されるが、一部では旧耕作土層の攪拌によって失われる。また、谷の最深部では第1～2層直下に細砂層を基調とする堆積が3層堆積する。

第2層 第1層の直下に堆積する中世の耕作土層で、中砂混シルト層である。谷部を中心に堆積するが、一部微高地上にも堆積が認められる。谷の最深部では2層に細分される。1・2区の微高地部では当該層を除去して古代末から中世の遺構を検出した。

第3層 谷部を中心に堆積する粗砂混シルト層で、古墳時代から古代の遺物を多く含む。谷の最深部では3層に細分され、その最下層は粗砂～中砂の自然堆積層が堆積する。

第4層 谷底部に堆積する極細砂混シルト層とその下層の粗砂～極細砂層の自然堆積層である。下層の自然堆積層は洪水砂が流路状にはしった痕跡と考えられる。

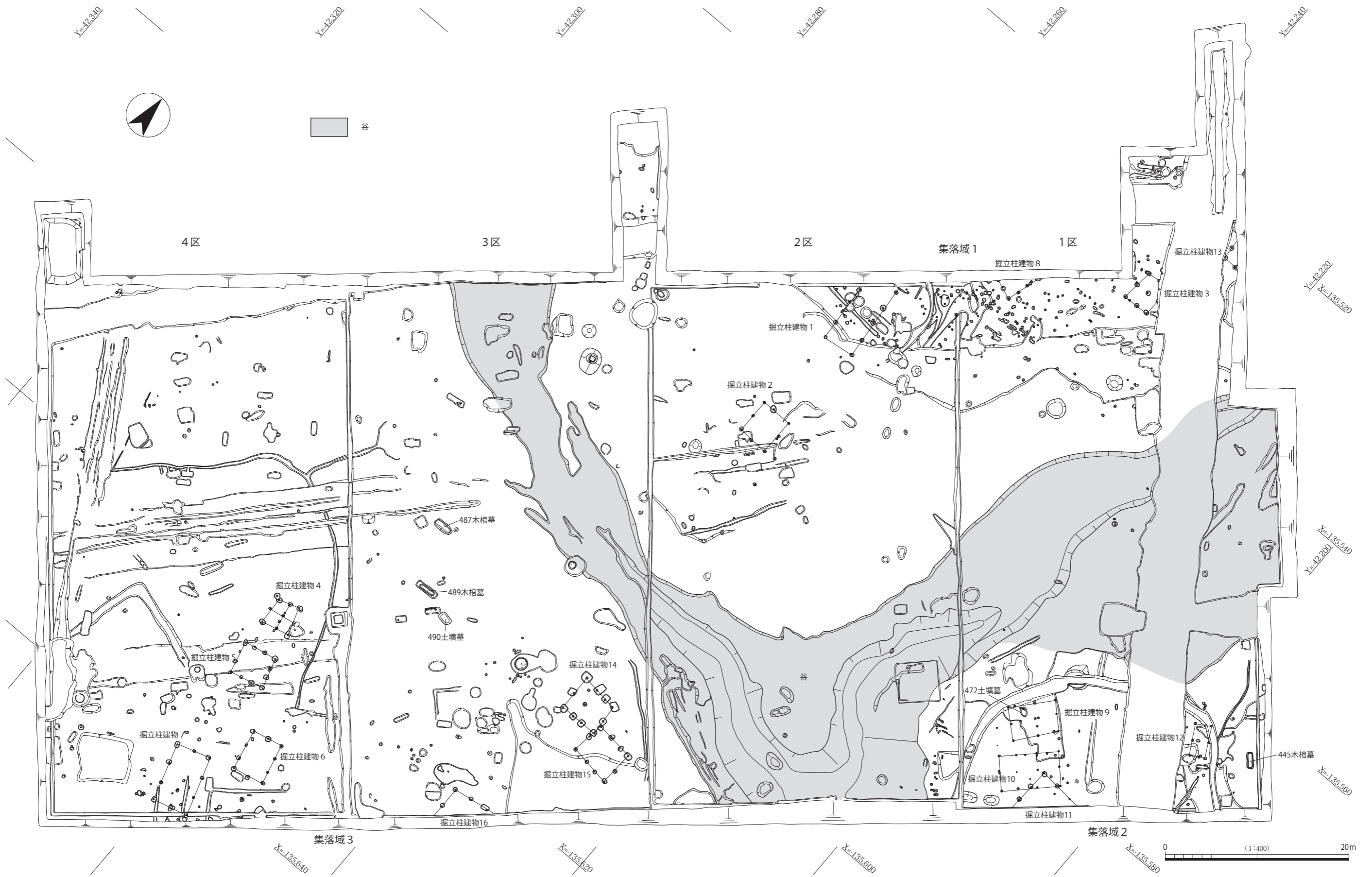


图5 1~4区 平面图

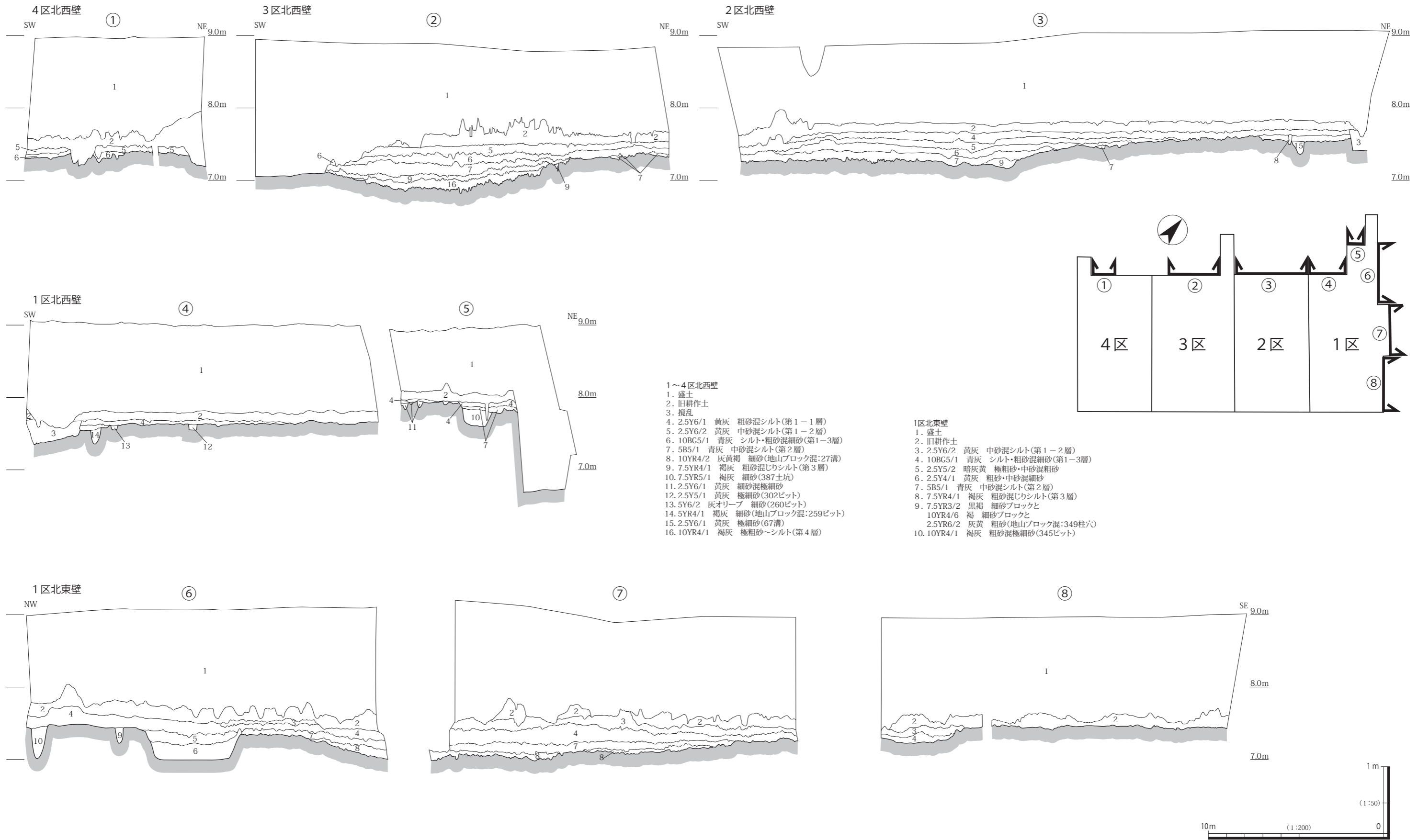


図6 1～4区 断面図(1)

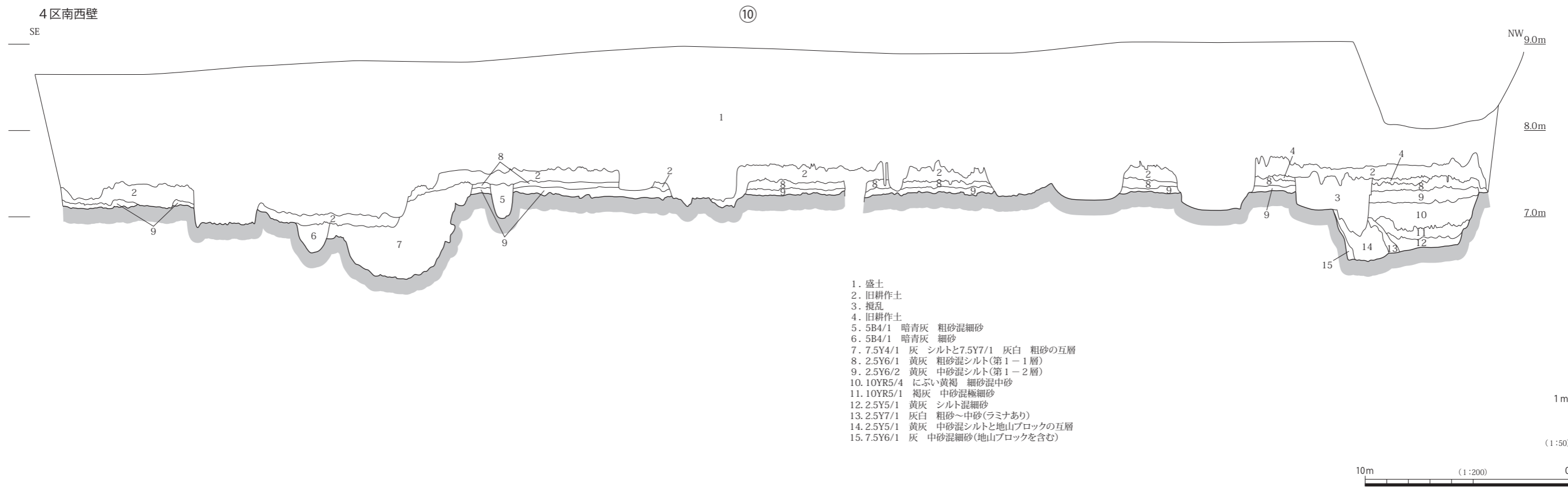
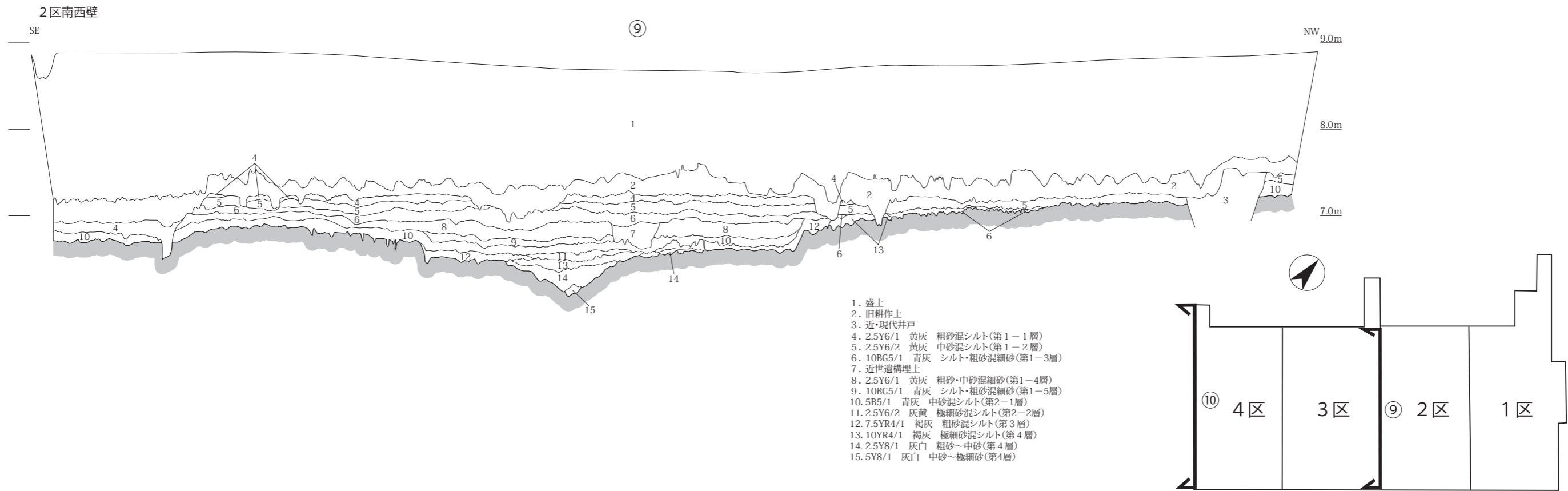


図7 1~4区 断面図(2)

3. 古代の遺構と遺物

(1) 集落域1 (図8、図版6～14)

集落域1は1・2区の西半部と、一部3区の北側に展開する微高地にあたる。この集落域の南側と東側にはしる2本の谷が、集落域の南限および東限となる。地形的には北から南へと傾斜しており、遺構面の標高は6.5～7.5 mを測る。ただし、集落域の南半部は中世以降に耕作地として利用された際に削平を受けており、段差を伴う平坦面が形成されたことから、旧地形を留めていなかった。しかし、遺構の分布状況などから微高地が南に向かって舌状に延びていたことが推定される。検出された遺構は掘立柱建物5棟、井戸5基、土坑、ピット、溝などであった。掘立柱建物はいずれも正方位を意識して建てられていた。また、井戸は掘立柱建物2の東側と掘立柱建物3の南側で検出されたが、これは推定される微高地の頂部からやや下がった場所で、集落域の縁辺にあたる。また、掘立柱建物2の南東側で検出した74溝は集落域の南限を区画する溝と考えられる。この74溝と同様の溝は集落域3でも検出されている。

なお、「4. 古代末から中世の遺構」で述べるが、集落域1では古代末から中世のピットや土坑が検出されており、耕地化されるまで、集落域として利用されてきたことが看取できた。

掘立柱建物1 (図5・8・9、図版7) 調査区の北端、集落域の南西寄りで検出した。桁行4間(8.5 m)以上×梁間1間(3.5 m)を測り、建物の北端は調査区外に延びる。建物の南北軸はN-6°-Wで、正方位よりやや西寄りを指向する。柱の掘方は隅丸方形に近い不整円形で直径0.3～0.6 m、柱痕跡の直径は0.2 m前後を測る。107・111・112柱穴から古代に属する土師器・須恵器の甕体部の細片が出土した。

掘立柱建物2 (図5・8・10、図版8) 掘立柱建物1の南約10 mに位置する、桁行2間(3.8 m)×梁間1間もしくは2間(3.3～3.6 m)の建物である。梁間の96・97柱穴については建物の軸線上に位置するものの柱間の中間地点にないことから、建物と無関係の遺構である可能性も残る。柱の掘方は隅丸方形に近い不整円形で直径0.3～0.6 m、柱痕跡の直径は0.15～0.2 mを測る。建物の南北軸はN-0°-Wで、正方位を指向する。建物の軸は掘立柱建物1とやや異なるが、桁行の面がほぼ揃っていることや、梁間の規模も近いことから、同時に存在した可能性がある。103柱穴から土師器の細片が出土した。

掘立柱建物3 (図5・8・11、図版9) 調査区の北端で、掘立柱建物1の北東約25 mに位置する。桁行2間(3.6 m)×梁間2間(2.8 m)の総柱建物であるが、北東隅柱は操車場建設時の攪乱によって失われる。建物の南北軸はN-6°-Eで、正方位よりやや東寄りに指向する。柱穴掘方の平面形は隅丸方形ないしは円形で、直径0.4～0.6 m、柱痕跡の直径は0.15～0.2 mを測る。柱の抜き取り痕跡はなく、すべての柱穴で柱痕跡を確認した。220柱穴から8世紀代に属する杯蓋の細片が出土した。

掘立柱建物8 (図5・8・12、図版9) 調査区の北端、掘立柱建物3の南西約10 mの地点で検出した、桁行3間(3.8 m)以上×梁間2間(2.3 m)以上の建物であるが、建物の半分以上は調査区外にあるため、正確な規模は不明である。建物の南北軸はN-16°-Eで、正方位より東に指向する。柱の掘方は隅丸方形に近い不整円形で直径0.3～0.4 mを測るが、検出した限りでは302柱穴が最も大きいと推測されるため、302柱穴は隅柱となる可能性がある。

261柱穴から須恵器・土師器の細片とともに黒色土器の細片が出土した。

掘立柱建物13 (図5・8・13、図版10) 調査区の北東端、掘立柱建物3の北約8 mの地点で検出し

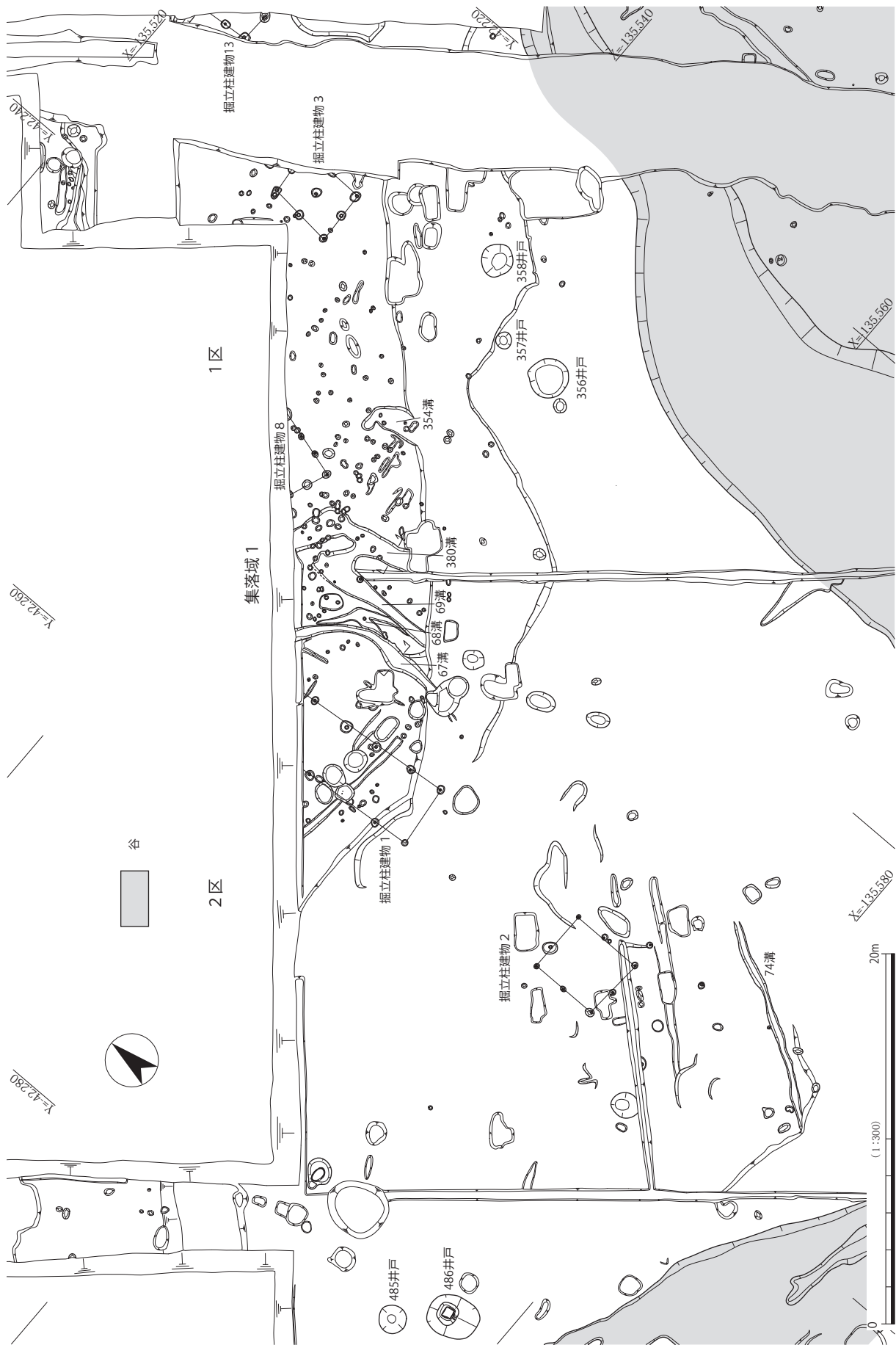
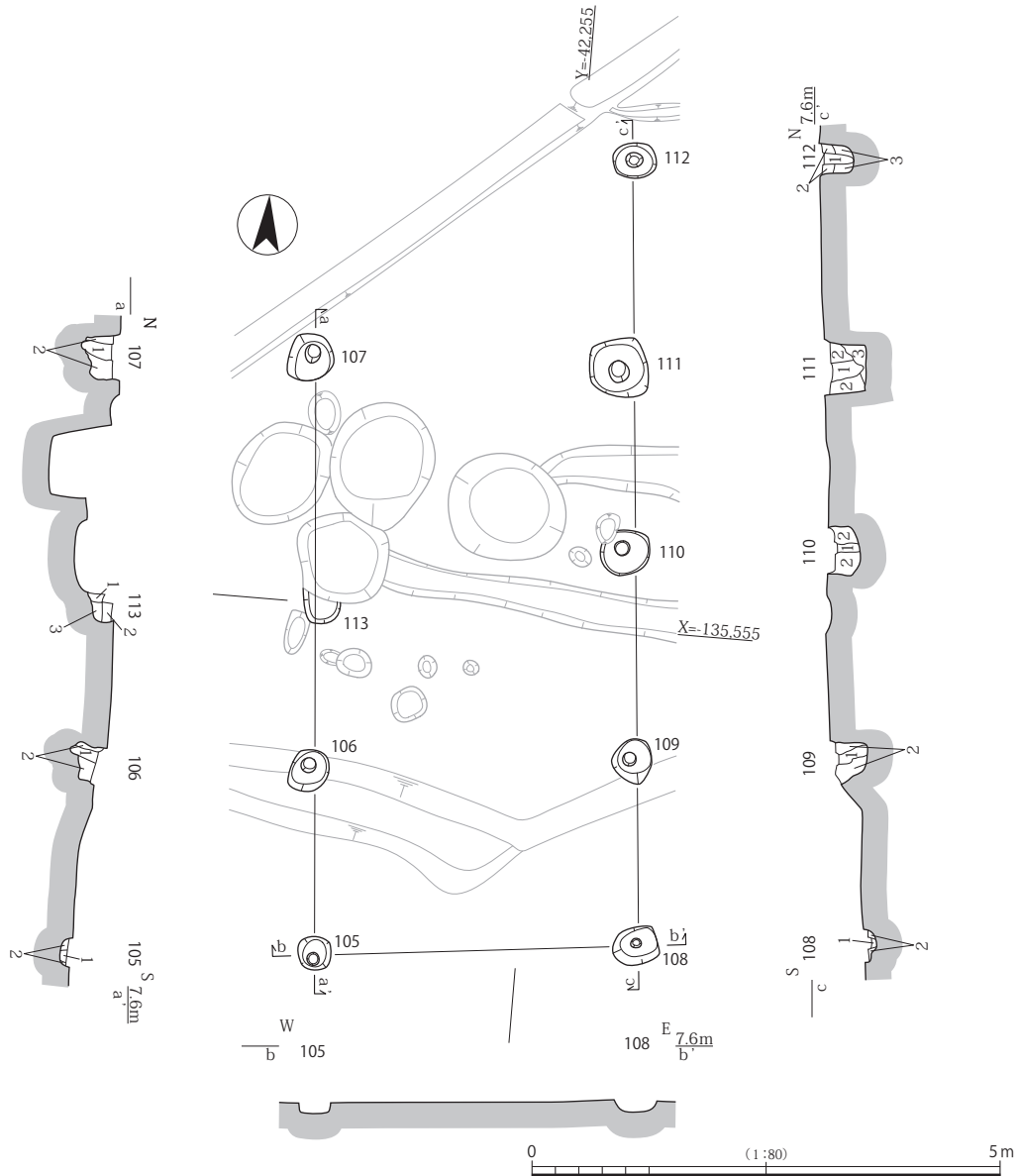


图8 集落域1 平面图

た桁行1間(2.0 m)以上×梁間1間(1.8 m)以上の建物であるが、建物の半分以上は調査区外にあるか、攪乱により削平されているため、正確な規模は不明である。柱の掘方は隅丸方形に近い不整形円で直径0.5 mを測る。平面図上では347柱穴を隅柱としているが、347柱穴の西側と南側に拡がる可能性も否定できない。建物の南北軸はN-4°-Wで、正方位よりやや西寄りに指向する。柱穴から遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

75 土坑 (図8・14・15、図版10・41) 掘立柱建物2の南西約5 mに位置する。直径1.4 m、深さ



- 105
 1. 2.5Y7/3 浅黄 粗砂
 2. 7.5YR5/1 褐灰 細砂(炭化物混)
 106
 1. 7.5YR4/1 褐灰 細砂
 2. 7.5YR5/1 褐灰 細砂
 107
 1. 10YR5/2 灰黄褐 極粗砂
 2. 10YR6/2 灰黄褐 粗砂(地山ブロック混)
 108
 1. 7.5YR6/1 褐灰 極細砂
 2. 7.5YR5/1 褐灰 細砂

- 109
 1. 7.5YR6/1 褐灰 極細砂
 2. 7.5YR5/1 褐灰 細砂(地山ブロック混)
 110
 1. 7.5YR6/1 褐灰 極細砂(地山ブロック混)
 2. 7.5YR6/1 褐灰 極細砂
 111
 1. 10YR5/2 灰黄褐 極細砂
 2. 10YR5/2 灰黄褐 細砂(地山ブロック混)
 3. 10YR6/1 褐灰 極細砂

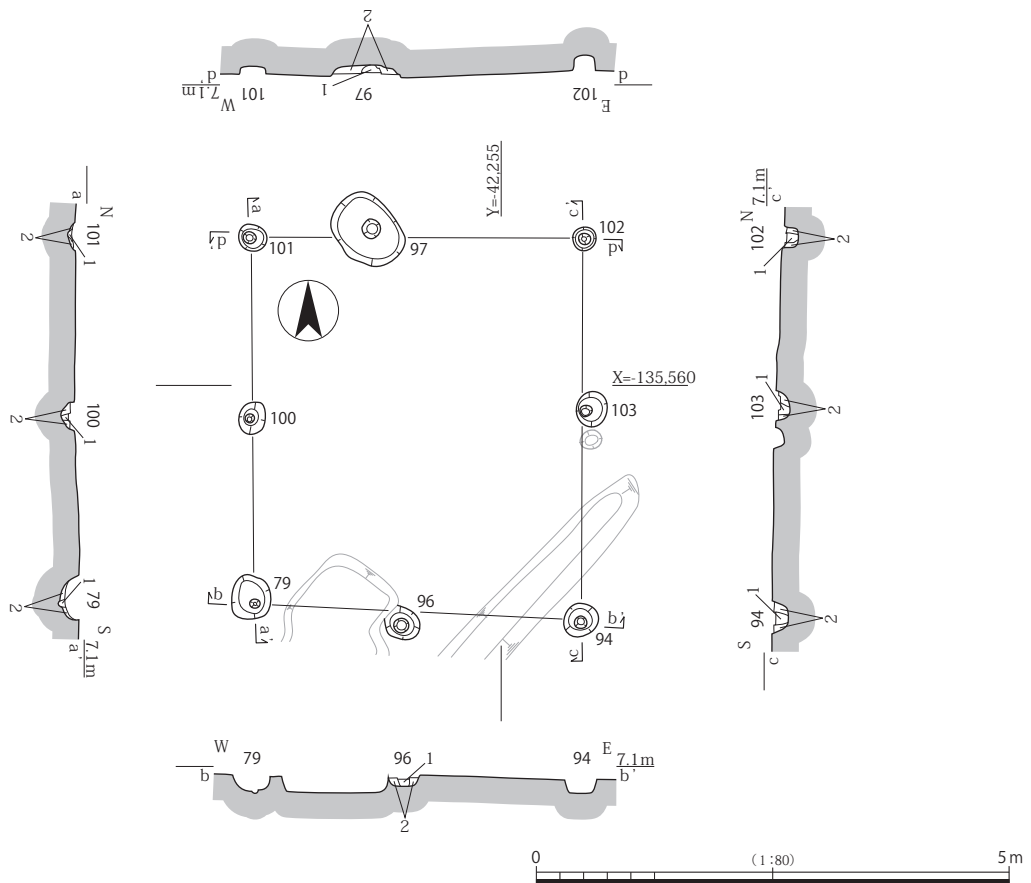
- 112
 1. 10YR5/2 灰黄褐 極細砂
 2. 10YR5/2 灰黄褐 細砂(地山ブロック混)
 3. 10YR6/1 褐灰 極細砂
 113
 1. 10YR5/2 灰黄褐 極細砂
 2. 10YR6/1 褐灰 細砂
 3. 10YR5/2 灰黄褐 細砂(地山ブロック混)

図9 掘立柱建物1 平・断面図

0.6 mを測る、断面すり鉢状の土坑である。埋土は3層で下層と中層の境から須恵器杯（1）および土師器甕（2・3）が出土した。1は杯Gで7世紀後半に属する。2・3は土師器甕で、ともに8世紀の所産である。

356 井戸（図8・14・15、図版11） 掘立柱建物3の南約15 mに位置し、微高地と谷部の間のやや下がった場所に立地する。356井戸の周囲には他に2基の井戸が存在する。掘方の平面形は円形で、検出面での規模は直径2.2 mを測る。深さは検出面から0.9 mまで掘り下げたが、湧水層に到達し、壁面の崩壊が著しかったため、井戸底面まで掘り下げられなかった。井戸上部はすり鉢状を呈すが、下部は筒状に掘り込まれる。遺物は須恵器の細片の他に土師器、黒色土器、瓦などが出土した。4は最上層から出土した黒色土器A類の椀底部で、井戸廃絶後の混入と考えられる。5は土師器甕である。8世紀後半の所産である。6は平瓦で、須恵質で堅緻な焼成である。凸面に斜格子目タタキが施されており、これらの特徴から、神亀3（726）年から聖武天皇が着手した、後期難波宮造営に際して操業された七尾瓦窯跡で焼成されたものである。

357 井戸（図8・14・15、図版12・41） 356井戸の北約2 mに位置する。掘方の平面形は円形で、



- | | | |
|---|--|---|
| <p>79
1. 5Y4/2 灰オーリーブ シルト
2. 5Y6/2 灰オーリーブ 細砂(地山ブロック混)</p> <p>94
1. 7.5YR7/1 明褐灰 極細砂
2. 7.5YR5/1 褐灰 極細砂(地山ブロック・炭化物混)</p> <p>96
1. 7.5YR7/1 明褐灰 極細砂
2. 7.5YR5/1 褐灰 極細砂(地山ブロック・炭化物混)</p> | <p>97
1. 7.5YR7/1 明褐灰 極細砂
2. 7.5YR5/1 褐灰 極細砂(地山ブロック混)</p> <p>100
1. 5Y4/2 灰オーリーブ シルト
2. 5Y6/2 灰オーリーブ シルト</p> <p>101
1. 7.5YR7/1 明褐灰 極細砂
2. 5Y6/2 灰オーリーブ 極細砂(地山ブロック混)</p> | <p>102
1. 7.5YR7/1 明褐灰 極細砂
2. 7.5YR5/1 褐灰 極細砂(地山ブロック混)</p> <p>103
1. 7.5YR7/1 明褐灰 極細砂
2. 7.5YR5/1 褐灰 極細砂(地山ブロック混)</p> |
|---|--|---|

図10 掘立柱建物2 平・断面図

検出面での規模は長径 0.9 m、短径 0.8 m、深さは 1.1 m を測り、井戸底部は湧水層まで達する。

掘方内で、木製の円形の曲物を使用した井筒を検出した。曲物は最下段とその上の二段目の一部が残存していた。完存する最下段の曲物は、直径 43cm、高さ 30 cm を測る。上段の曲物は上部が破損しており、残存する高さは 7～9 cm であった。直径は 53 cm で最下段のものよりも一回り大きい。

井筒の裏込土は 3 層に分かれるが、最下層の裏込土は軟弱地盤に対応するため、もしくは濾過の目的から礫が多く詰め込まれていた。井筒内の埋土は 5 層に分層できたが、上部 2 層は埋戻し土と考えられる。この埋戻し土を除去した段階で、完形の土師器杯（9）を、最下段の井筒内埋土を除去した段階で、土師器皿（7・8）2 点を検出した。また、その他に須恵器、黒色土器、土錘などが出土した。7・8 は土師器皿である。いわゆる「て」字状口縁を呈する。9 は土師器杯である。口縁部はヨコナデ、外面体部には指押さえの痕跡が残る。10 は黒色土器 A 類である。11 は須恵器壺底部、12 は須恵器鉢か壺であろう。13 は土錘である。外面に成形時の痕跡が残る。出土遺物はいずれも 10 世紀後半から 11 世紀初頭の所産と考えられる。なお、井筒に使用されていた曲物は脆弱であったことから、取り上げることはできなかった。

358 井戸 (図 8・16・17、図版 11・41) 356 井戸の北東約 5 m に位置する、直径 1.7 m、深さ 1.2 m の規模を測る。検出面での平面形は不整形な円形を呈するが、中段から下方は方形を呈することから、方形の井戸枠が設置されていたものと推測される。埋土は 3 層に分層される。中層底面で土師器蓋(14)と須恵器杯身(16)がセットで出土した。また、上層の埋土内より黒色土器片などが出土した。14 は

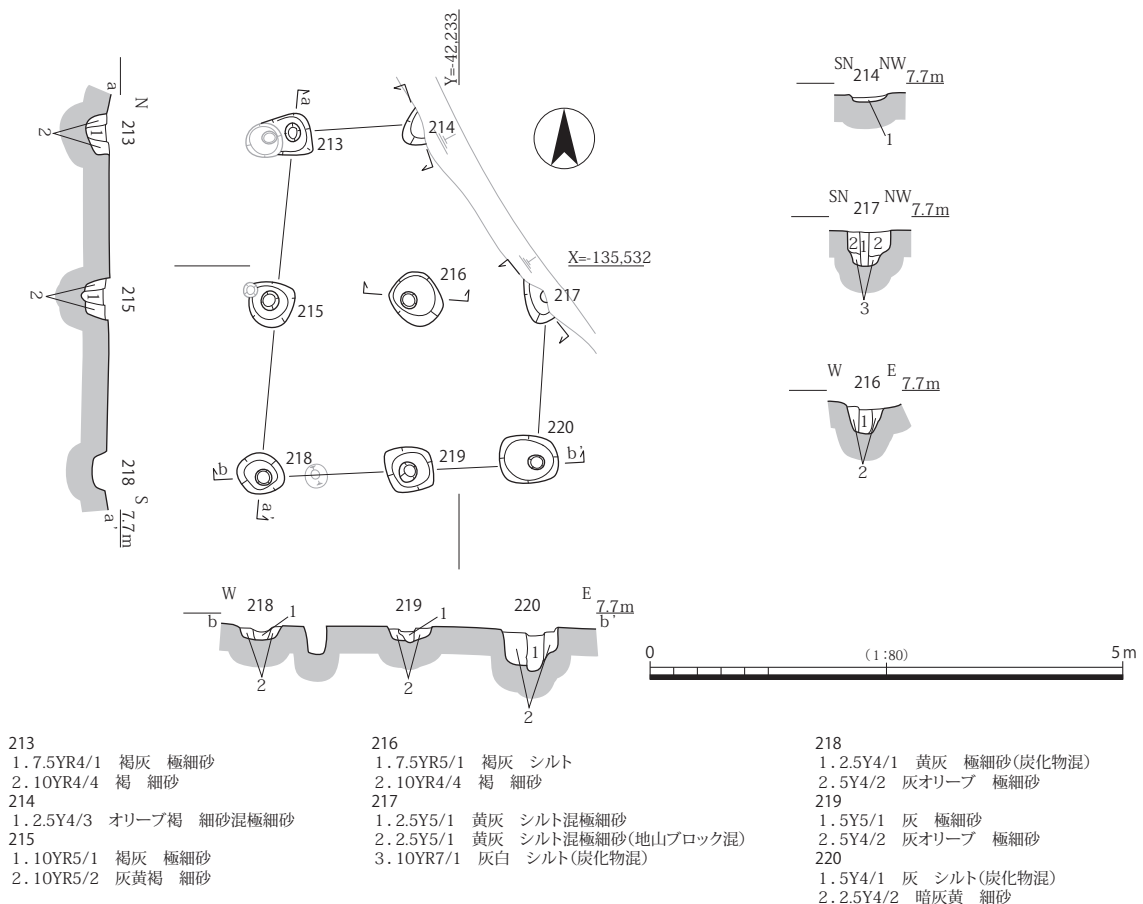


図 11 掘立柱建物 3 平・断面図

土師器蓋である。外面は丁寧なヘラミガキを施し、内面には螺旋状の暗紋を巡らす。15・16は須恵器杯である。15は杯A、16は杯Bである。17は黒色土器A類である。17以外は8世紀中から後半に属すると考えられる。

485 井戸 (図8・16) 掘立柱建物2の西約20mに位置する。これは谷部に近い集落域1の南西端部

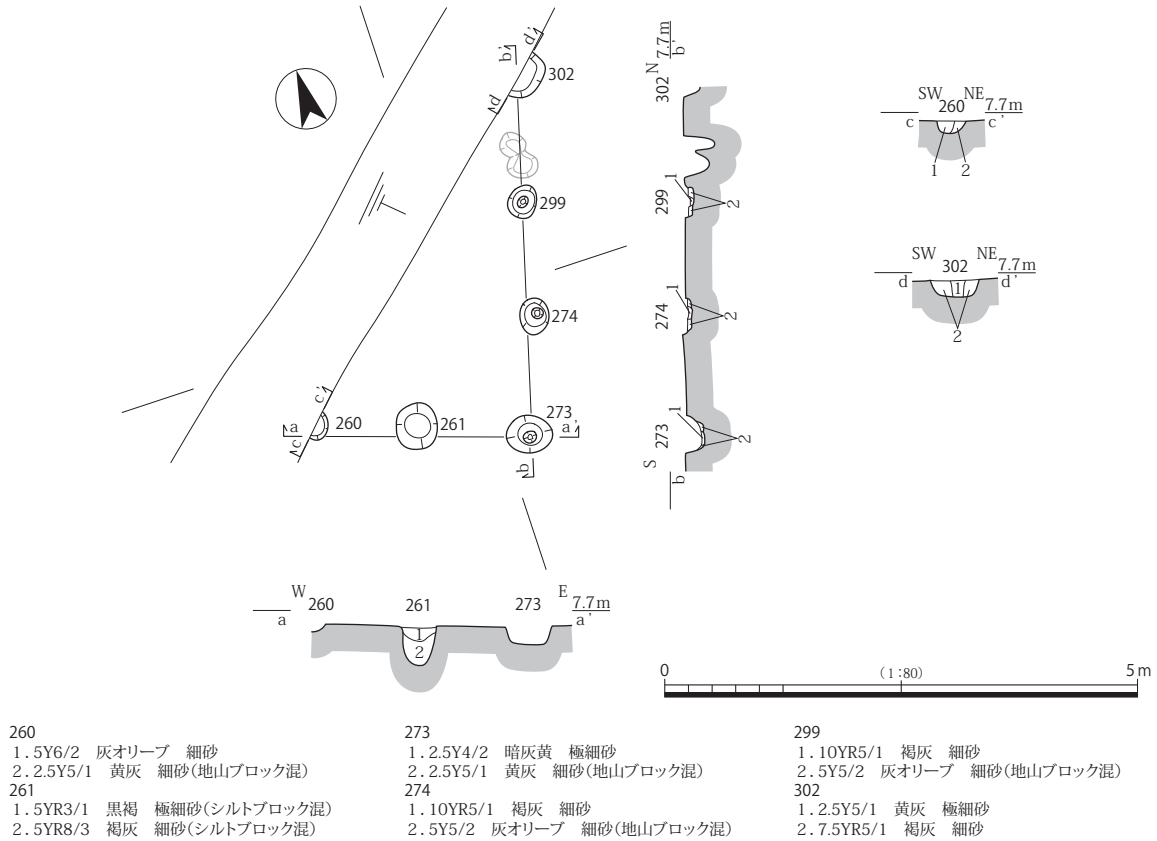


図12 掘立柱建物8 平・断面図

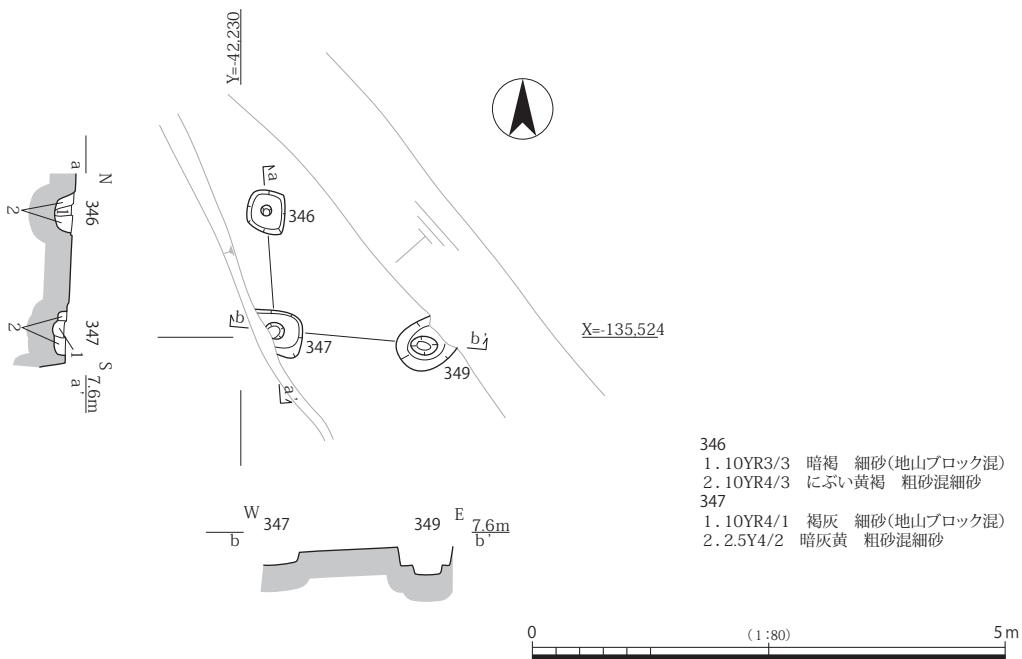


図13 掘立柱建物13 平・断面図

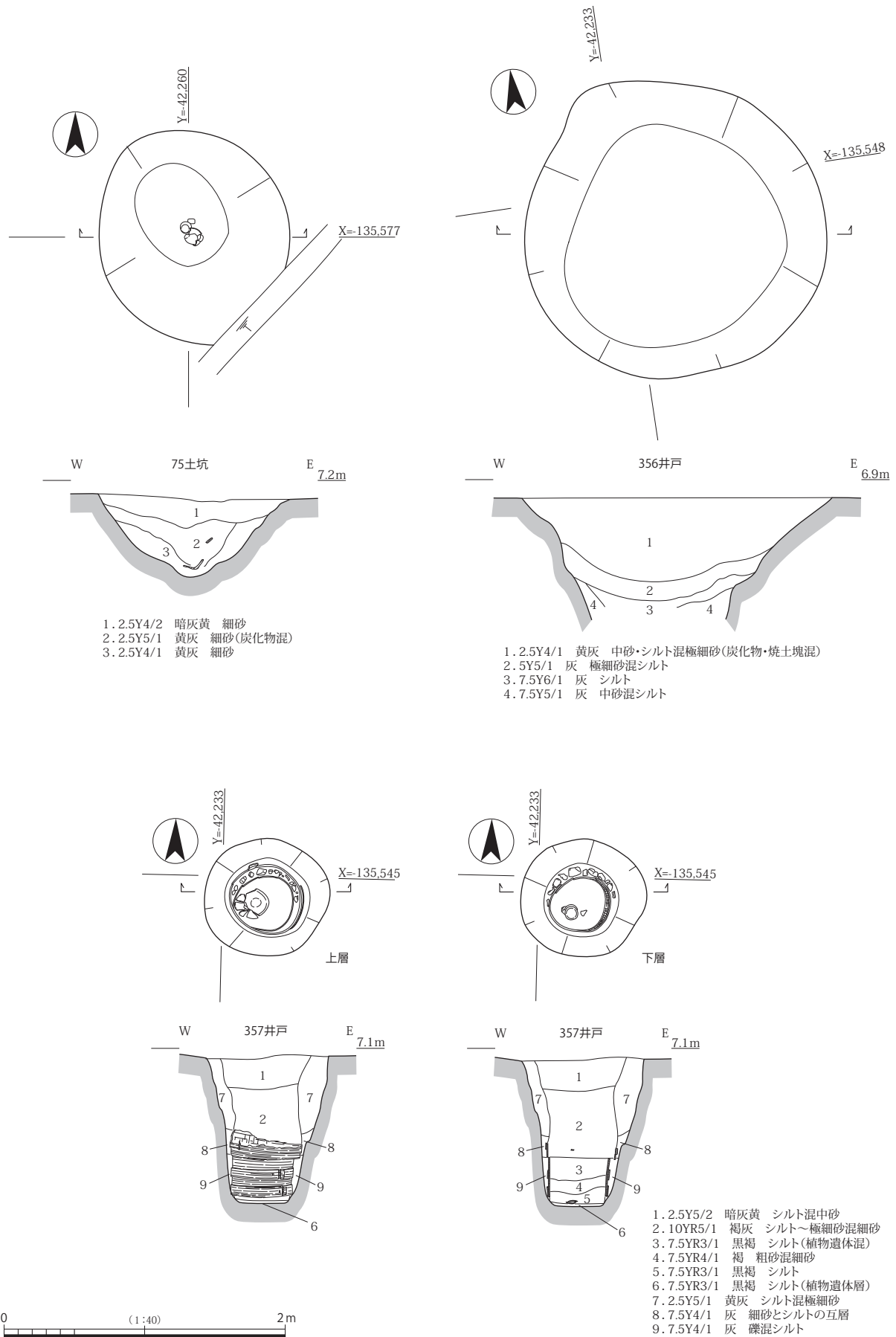


図 14 75 土坑、356・357 井戸 平・断面図

にあたる。平面円形で、直径 1.4 m、深さ 0.6 m を測る。断面形はすり鉢状を呈する。遺物は図示し得なかったが、奈良時代に属する須恵器や土師器の杯、甕などの細片が出土した。

486 井戸 (図 8・18・19、図版 14・41) 掘立柱建物 3 の西約 18 m で、485 井戸の北西約 2 m に位置する。平面形は不整楕円形で、長径 2.7 m、短径 2.3 m、深さ 1.2 m を測る。断面形はすり鉢状を呈し、底面付近で板材を組み合わせた井戸枠を検出した。なお、板材は脆弱で、取り上げられなかった。井戸枠の外側で須恵器甕体部 (21) が、埋土中から須恵器や土師器が出土した。18 は須恵器杯 A、19 は須恵器壺もしくは鉢底部である。20 は土師器甕口縁部である。21 は須恵器甕体部で、8 世紀に属する。

67 溝 (図 8・20・21) 掘立柱建物 1 の東約 5 m の位置を、湾曲しながら南北方向に高台上をはしる。規模は幅 1.0 m、深さ 0.2 m を測る。須恵器、土師器などが出土した。22 は須恵器杯蓋である。扁平なつまみをもつ。23 は須恵器杯 A である。24 は須恵器杯 B であるが、脚部を欠損する。遺物はいずれも 8 世紀中頃に属する。

74 溝 (図 8・20) 掘立柱建物 2 の南東約 6 m の位置を南南西—北北東方向にはしる。規模は幅 0.8 m、深さ 0.3 m を測る。遺物の出土はなかったが、検出位置や埋土などから掘立柱建物群の南限を示す区画溝と考えられる。

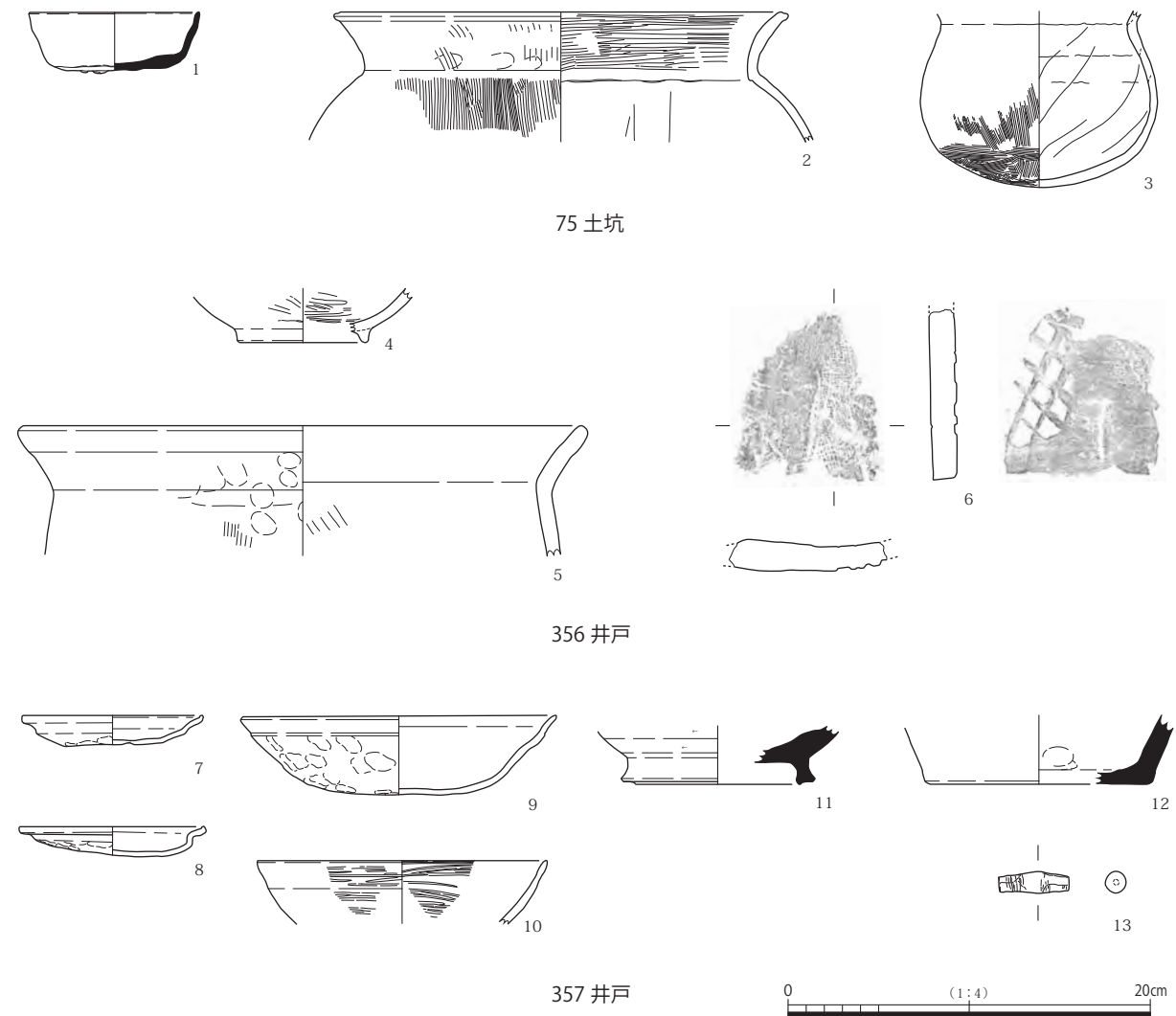


図 15 75 土坑、356・357 井戸 出土遺物

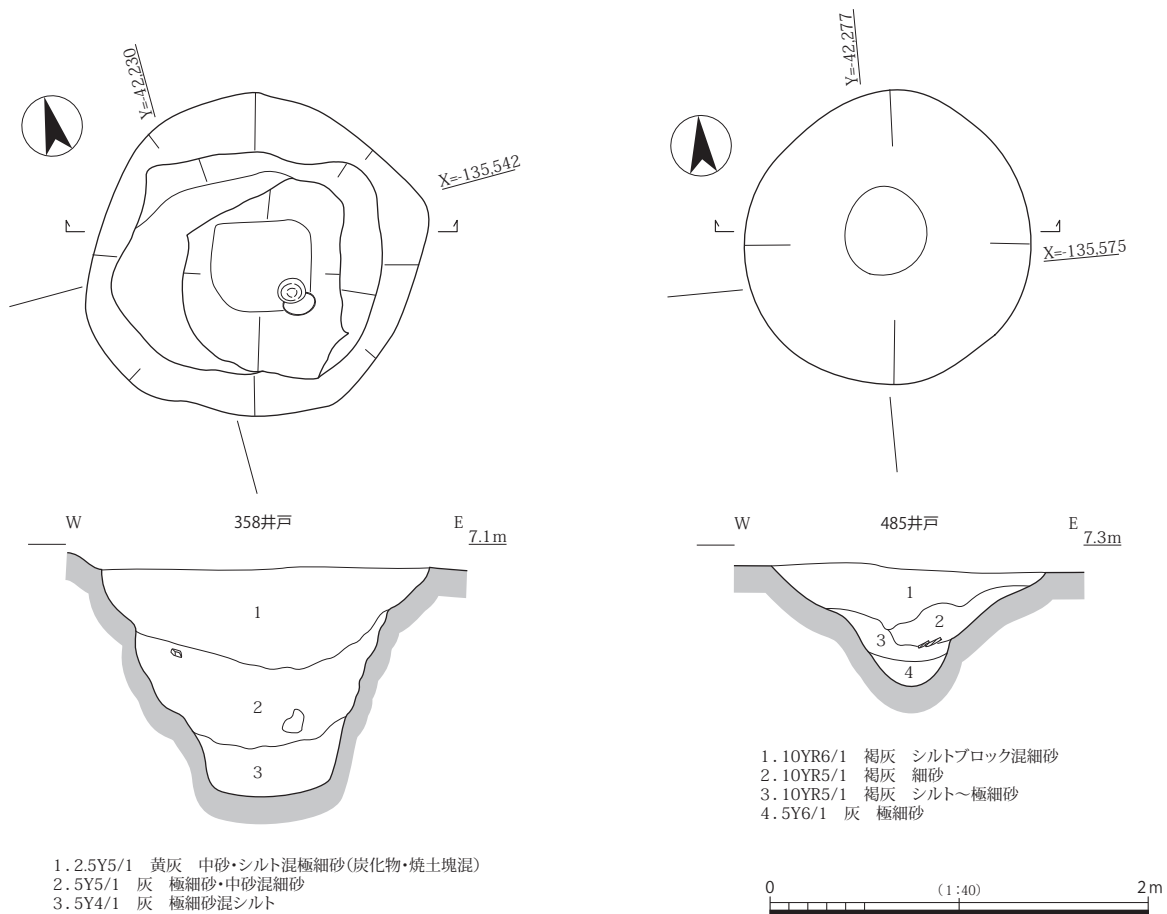


図16 358・485井戸 平・断面図

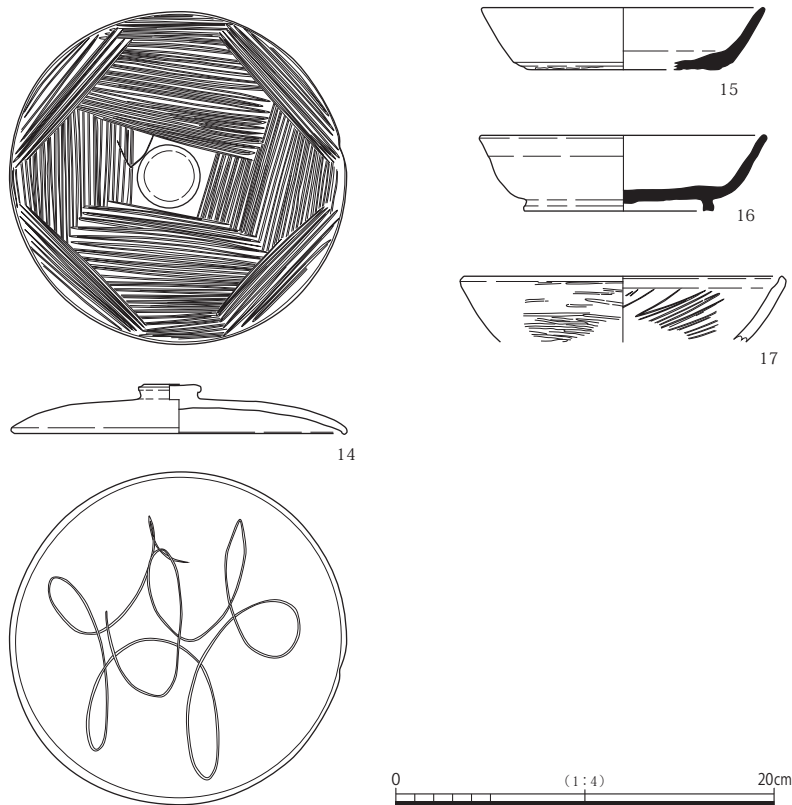


図17 358井戸 出土遺物

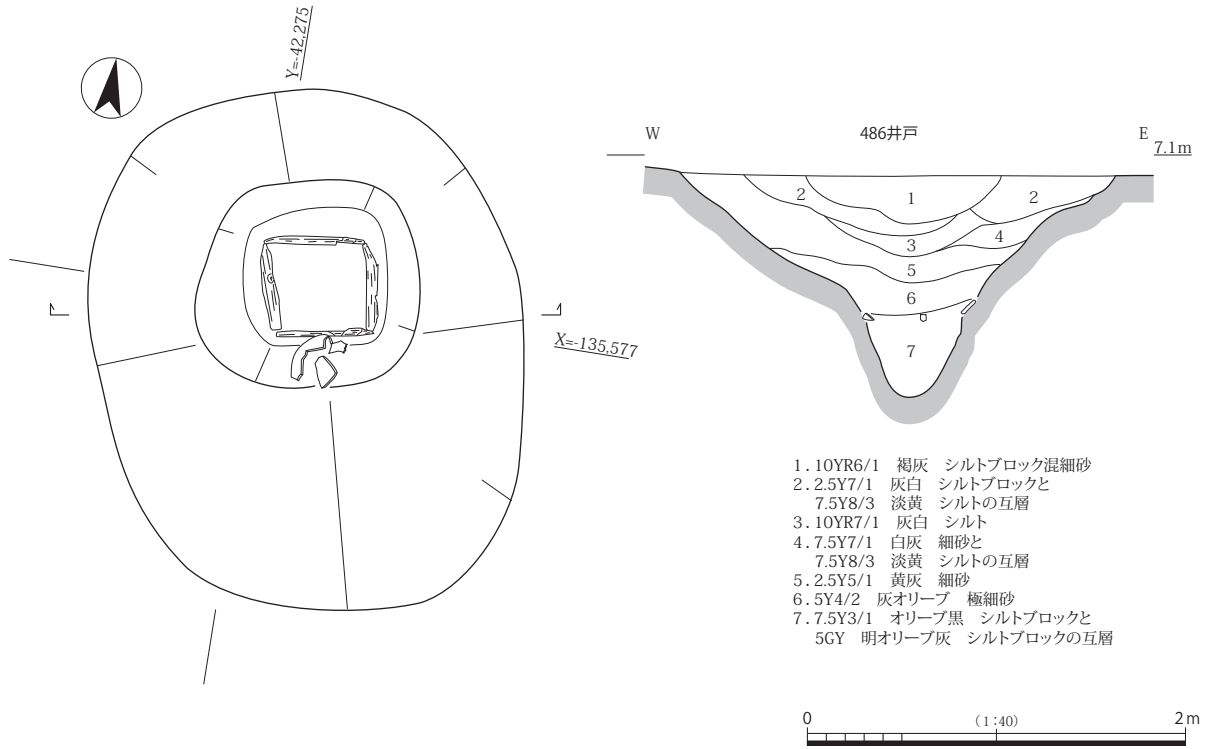


図 18 486 井戸 平・断面図

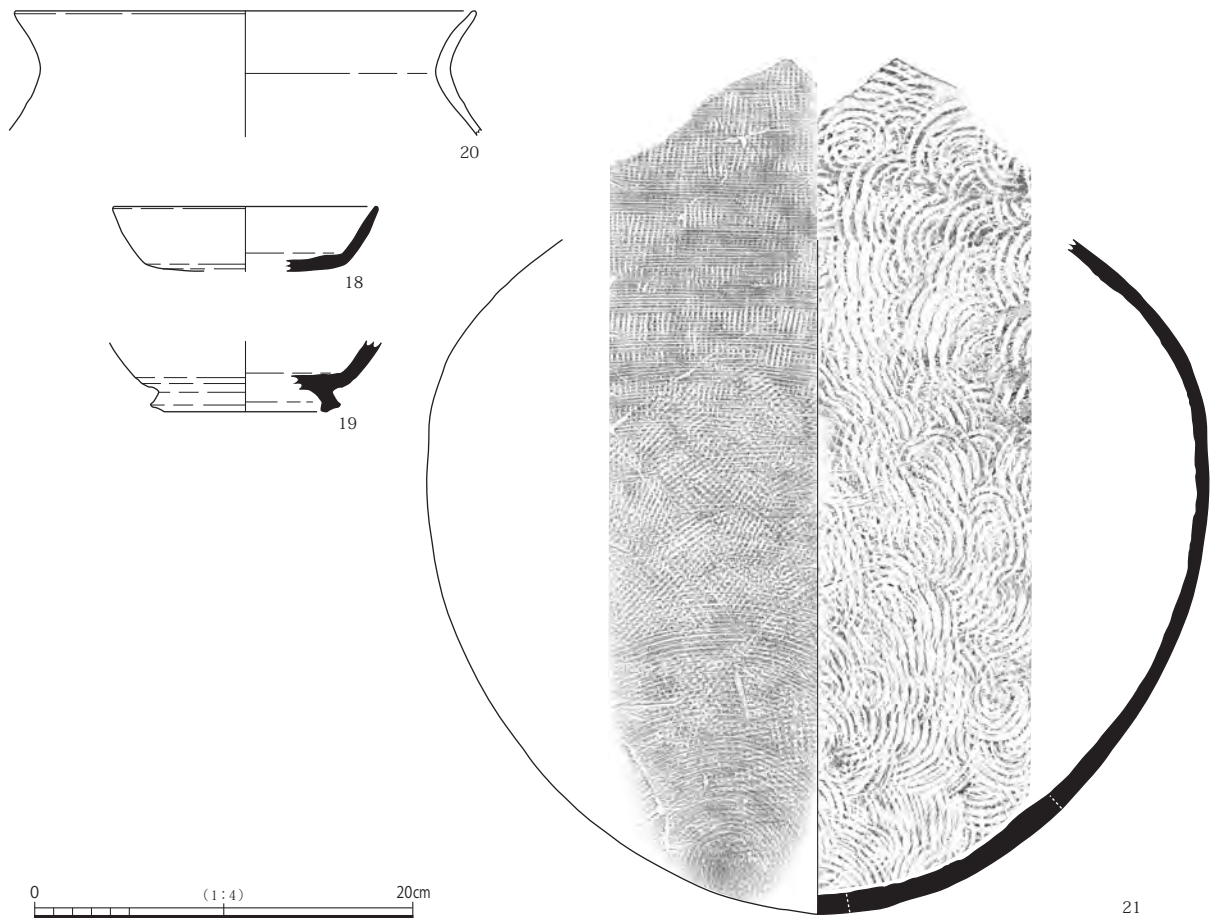


図 19 486 井戸 出土遺物

354 溝 (図 8・20・21、図版 42) 掘立柱建物 8 の東約 4 m に位置する、高台裾部にはしる不整形な溝である。規模は最大幅 0.9 m、深さ 0.2 m を測る。埋土は 2 層で、上層から須恵器、黒色土器などが出土した。25 は黒色土器 A 類椀である。底部を欠く。10 世紀中頃に属するが、混入の可能性はある。26 はほぼ完形の須恵器平瓶である。頸部から体部外面上半部にかけてカキ目を施す。また、外面底部にヘラ記号が残る。7 世紀中頃の所産である。

380 溝 (図 8・20・21、図版 42) 高台上を南北方向にはしる溝で、幅 1.1 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は 2 層で、上層から須恵器などが出土した。27 は須恵器杯 G 蓋で、宝珠つまみをもつ。28 は須恵器杯 G である。杯部の一部を打ち欠く。29 は須恵器壺脚部である。脚部は「ハ」字状に開き、裾部位は大きく外反する。また、体部外面にはヘラ記号が残る。

(2) 集落域 2 (図 22、図版 15 ~ 18)

集落域 2 は 1 区の南東半部と 2 区の一部に位置し、谷部の東側に展開する微高地上にあたる。遺構面の標高は 7.0 ~ 7.4 m を測り、地形的には南西から北東方向に向かって高くなる。遺構面は 1 区の北東隅部では旧耕作土層直下で、それ以外は第 1・2 層を除去して検出した。検出された遺構は主に奈良時

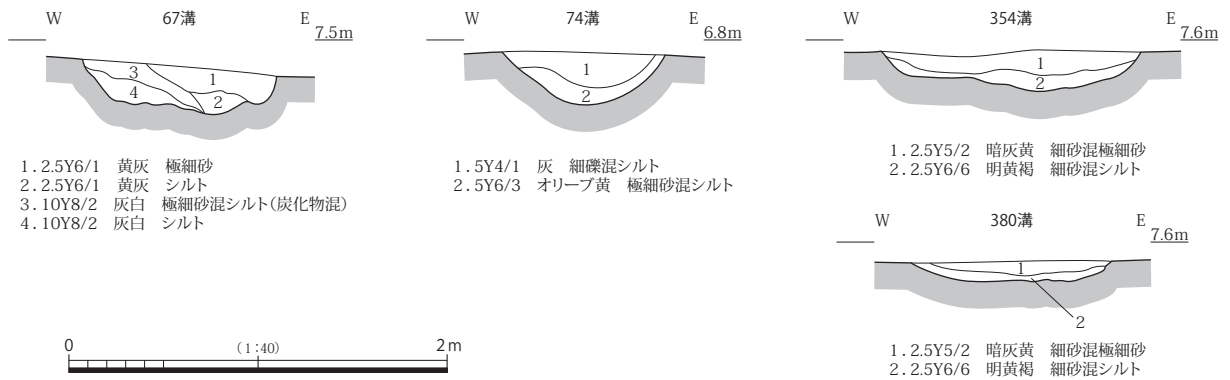


図 20 67・74・354・380 溝 断面図

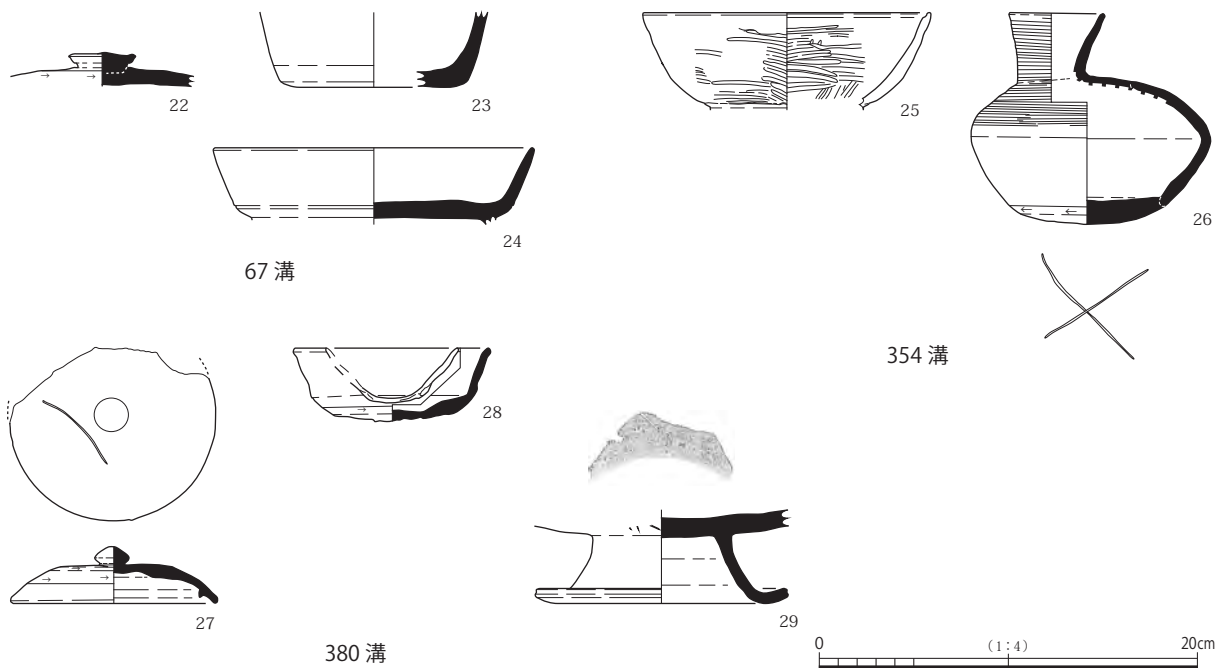


図 21 67・354・380 溝 出土遺物



图 22 集落域 2 平面图

代から平安時代に属するものであったが、一部弥生時代に属するものも確認できた。弥生時代の遺構は溝1条と落込み1基のみであったため断言できないが、調査地の東側に展開する微高地において弥生時代の集落が存在したと思われる。奈良時代から平安時代にかけての遺構は、掘立柱建物1棟、土坑、井戸、木棺墓1基などであった。掘立柱建物はほぼ正方位に主軸をとるもので、集落域1で検出した建物とほぼ同時期に属するものと考えられる。今回の調査では、建物の北半部のみ検出し、南半部は調査区外に延びることや、検出されたのが1棟のみであったことなどから、集落域の本体は調査区外に展開するものと考えられる。また、井戸を1基検出したが、微高地と谷部の間に位置しており、この井戸も、集落域の端となる微高地の縁辺に造られたものである。

なお、この微高地で古代末から中世の掘立柱建物や土壇墓、溝などが検出されており、集落域1と同様、中世において耕地化するまで集落域として利用されていたことが看取できた。

掘立柱建物 11 (図5・22・23) 調査区南東端部で検出した、桁行2間(4.0 m)以上×梁間2間(4.0 m)以上の建物であるが、建物の半分以上は調査区外にあるため、正確な規模は不明である。

柱の掘方は隅丸方形もしくは一辺0.2～0.5 mを測る。建物の南北軸はN-3°-Eを指向する。柱穴から遺物が出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

422ピット (図22・24・25、図版42) 掘立柱建物11の北約3 mで、建物の西辺の延長線上に位置する。遺構は弥生時代の土器を含む437落込みが埋没した後に掘り込まれる。掘方の規模は直径0.3 m、深さ0.2 m、柱痕跡の直径は0.15 mを測る。掘方埋土内より土師器の細片と石鏃(30)が出土した。

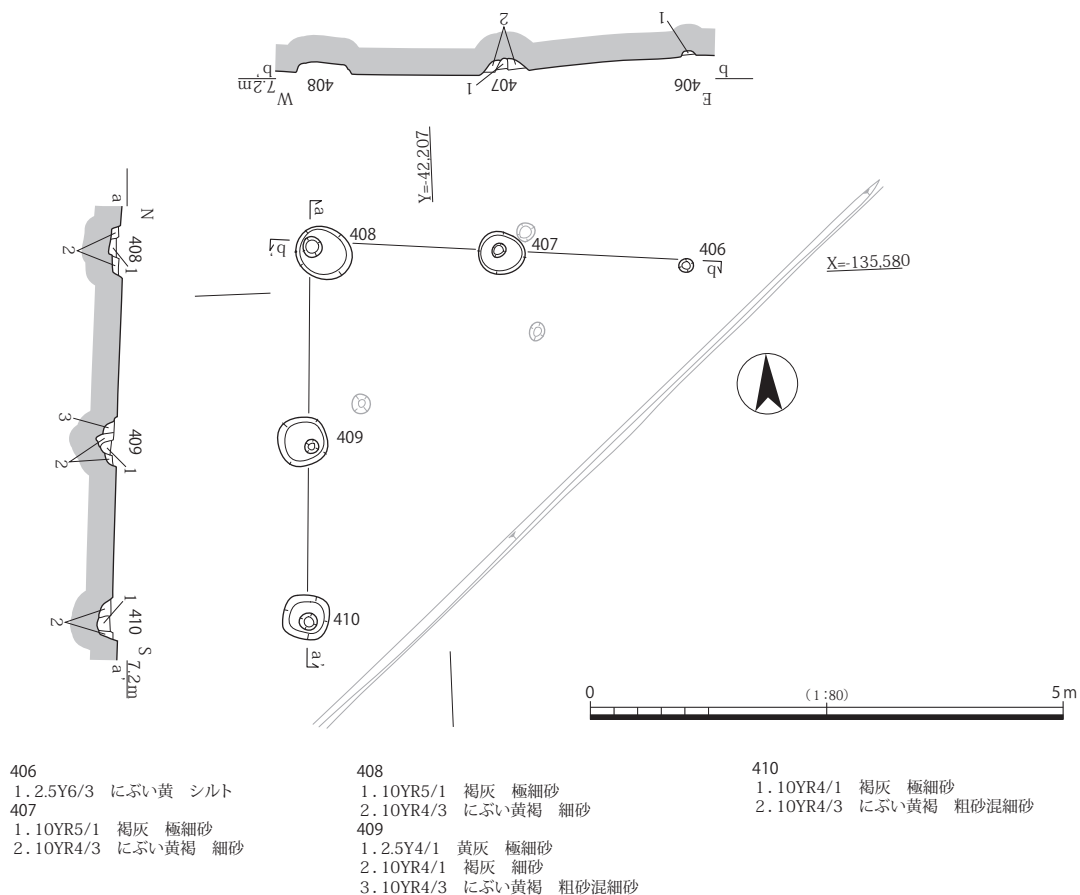


図23 掘立柱建物11 平・断面図

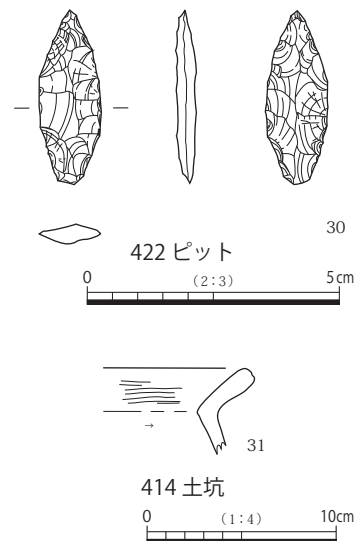
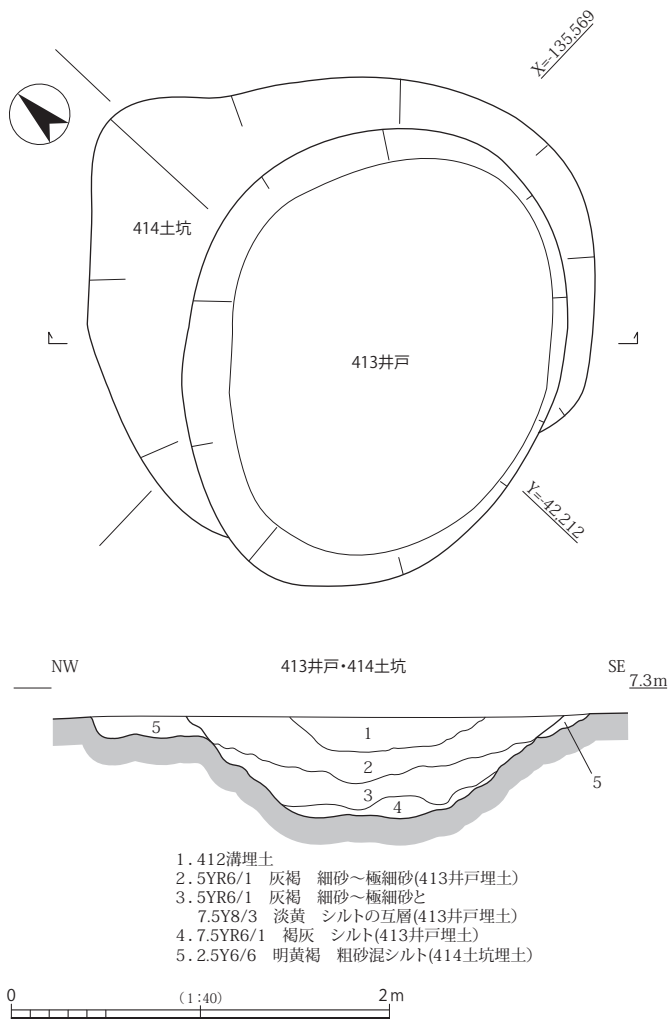
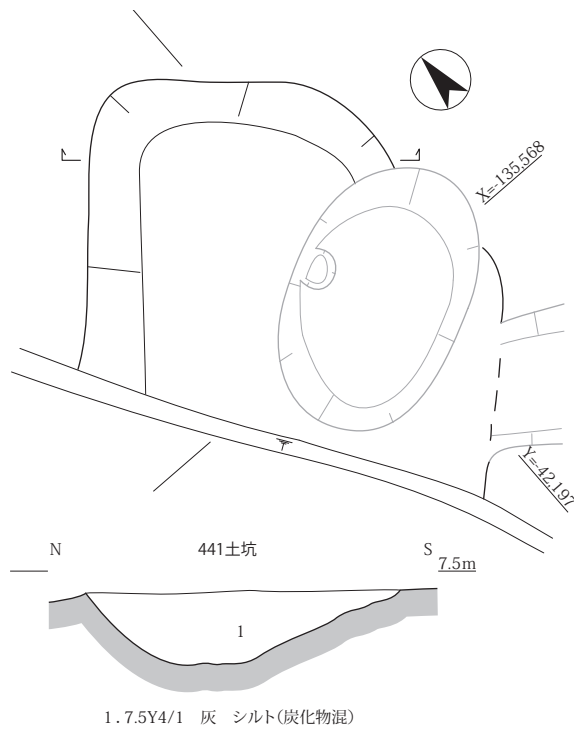
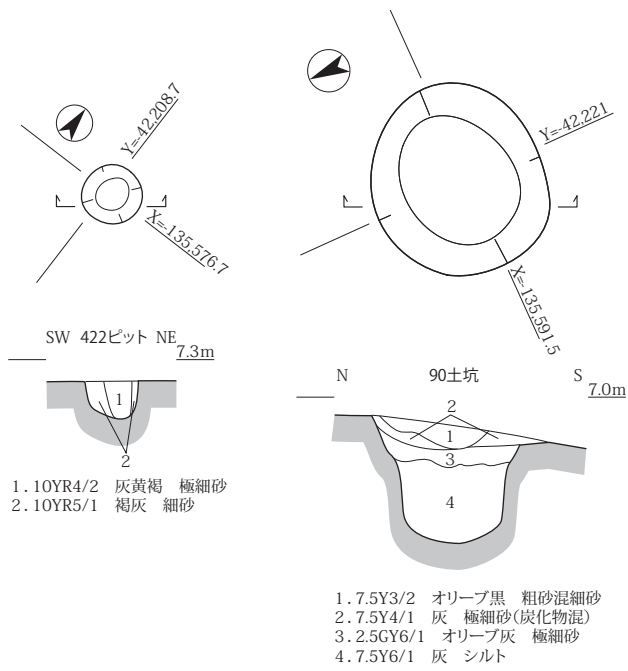


図 24 422 ピット、90・414・441 土坑、413 井戸、462 溝 平・断面図

図 25 422 ピット、414 土坑 出土遺物

30は凸基無茎式の石鏃で、平面形はやや幅広の木葉形を呈する。全長3.4cm、重さ1.7gである。437落込みからの巻き上げか。

90土坑（図22・24、図版15） 集落域2の南端部で、谷部の斜面内に位置する。第4層を除去して検出した。平面形は円形で、断面形は矩形を呈する。規模は直径1.0m、深さ0.7mを測る。埋土は4層であるが、最下層は人為的に埋め戻されており、井戸の可能性も残る。遺物の出土はなかったが、古墳時代以前に属する可能性が考えられる。

414土坑（図22・24・25） 掘立柱建物11の北東約10mに位置する。遺構は412溝と413井戸に切られるため詳細は不明であるが、平面形は不整円形を呈すると推測される。長径2.8m、短径2.2m、残存する深さ0.1mを測る。検出状況などから414土坑は井戸で、413井戸は414土坑が掘り直されたものである可能性も残る。埋土は単層で、土師器甕片（31）が出土した。31は土師器甕口縁部で8世紀に属すると考えられる。

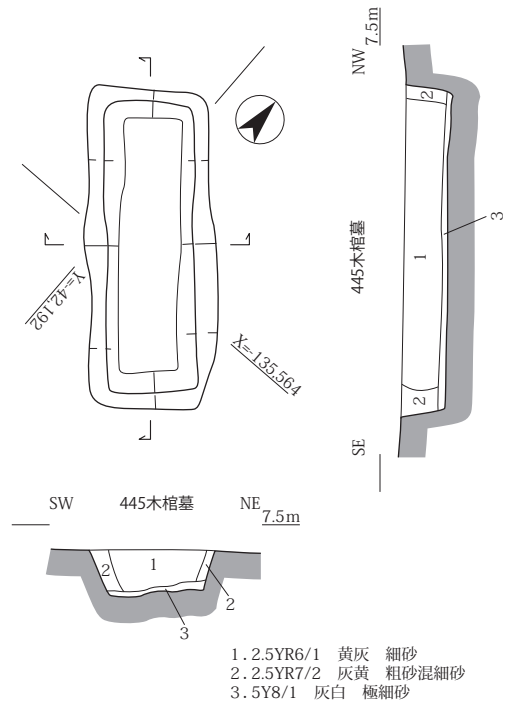


図26 445木棺墓 平・断面図

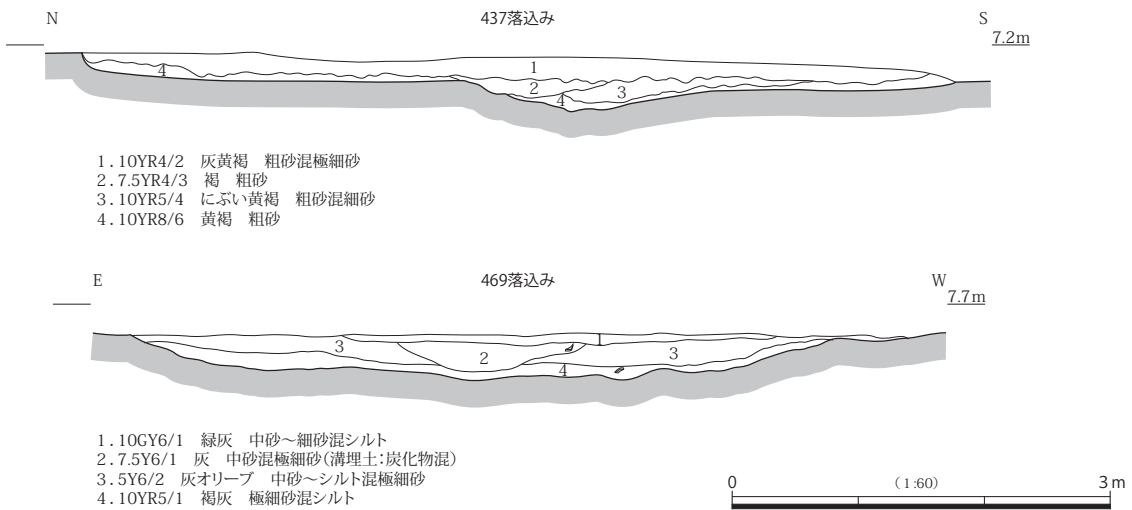


図27 437・469落込み 断面図

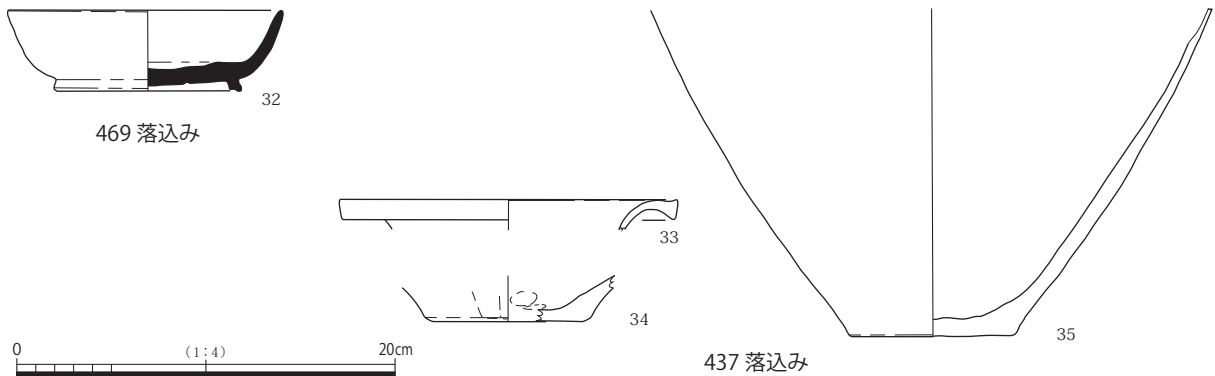


図28 437・469落込み 出土遺物

441 土坑 (図 22・24、図版 15) 調査区南東部に位置する。平面長方形を呈する土坑であるが、攪乱によって南西半部を失う。また、469 落込みより後出するが、中世末に属する 440 土坑に切られる。規模は長辺 2.3 m、短辺 1.8 m 以上、深さ 0.4 m を測る。古代に属する須恵器、土師器の細片が出土した。

413 井戸 (図 22・24、図版 15) 掘立柱建物 11 の北東約 10 m に位置し、遺構は 412 溝に切られる。平面形は円形で、断面形は逆台形を呈する。直径 2.0 m、深さ 0.5 m を測る。遺物は出土しなかった。

445 木棺墓 (図 5・22・26、図版 16・17) 調査区の東隅で検出した。墓壙の主軸は $N-43^{\circ}-W$ であった。墓壙の規模は全長 1.7 m、幅 0.7 m、深さ 0.23 m を測る。木棺は腐朽し木質は遺存していなかったが、埋土から木棺の規模は全長 1.5 m、幅 0.5 m、深さ 0.2 m と推定される。地層観察の結果から、墓壙が掘り込まれた後、厚さ約 3 cm の灰白極細砂で床面を整地してから木棺を設置し、灰黄細砂で裏込めが行われたことが分かった。なお、木棺埋土内から釘は出土しなかったため、組み合わせ木棺であったと推測される。さらに、遺物が出土しなかったため時期は不明であるが、墓壙の主軸方向が中世の掘立柱建物 9・10・12 や 472 土壙墓に近いことなどから、掘立柱建物や土壙墓の時期に属する可能性が高い。

462 溝 (図 22・24、図版 18) 調査区南東隅に位置し、469 落込みの埋土を除去して検出した。北西-南東方向にはした後、屈曲して南へ向かう。規模は幅 0.3 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は単層で、弥生土器の細片が出土した。

437 落込み (図 22・27・28、図版 18) 落込みは微高地上の南西側に位置し、西に開口して谷部に続くことから、侵食作用によってできた小開析谷状の落込みと考えられる。

集落域 2 の南西部に位置する。西に向かって開口する落込みである。この落込みが埋没した後、掘立柱建物 9 や 472 土壙墓、さらに 412 溝などが掘り込まれる。埋土は 3 層であったが、最上層の下面で弥生土器が倒立した状態で出土したほか、壺片なども出土した。33～35 は弥生土器である。33 は壺口縁部である。34・35 は甕もしくは壺の底部である。いずれも弥生時代後期の所産である。

469 落込み (図 22・27・28、図版 18・42) 調査区東端部で検出した。幅 6.2 m、深さ 0.4 m を測り、調査区外へ延びる。埋土は 2 層で、下層の褐灰極粗砂混シルトから須恵器杯のほか、土師器の細片が出土した。32 は須恵器杯 B である。8 世紀前半の所産である。

(3) 集落域 3 (図 29、図版 19～29)

集落域 3 は 3・4 区と 2 区の一部に位置し、谷部の南側に展開する微高地上にあたる。遺構面の標高は 6.7～7.3 m を測る。微高地の西半部は後世の削平を受けており、遺構は検出されなかった。集落域が確認できたのは微高地の東半部のみであった。集落域の北および西限を画する 117・118・529 溝がはしる。さらに、集落域は 118 溝によって東西 2 つの建物群に細分することができた。東側の建物群が存在するエリアでは、掘立柱建物 3 棟 (掘立柱建物 14～16) と木棺墓 2 基、土壙墓 1 基、溝などを検出した。一方、西側建物群が存在するエリアでは総柱建物を含む掘立柱建物 4 棟 (掘立柱建物 4～7) や溝などを検出した。他の集落域で検出した掘立柱建物と同様、掘立柱建物はいずれもほぼ正方位を指向する。掘立柱建物群はどちらも南北方向に並ぶように建てられており、これは集落域 1 と同様の傾向がみられる。木棺墓は全て東側集落域の西側で検出した。墓はいずれも東西方向に主軸をもつ。

なお、この集落域内においては、古代末から中世に属する遺構は検出されなかった。

掘立柱建物 4 (図 5・29・30、図版 19・20) 西側建物群の中で最北に位置する、桁行 2 間 (2.5～3.0 m) × 梁間 2 間 (3.0 m) の総柱建物で、平面形は北辺部が短い台形状を呈する。隅柱の掘方は一辺 0.3～



图 29 集落域 3 平面图

0.6 mの隅丸方形を、それ以外の柱は直径 0.3 mの円形である。建物の南北軸はN - 11° - Wとやや西を指向する。柱穴から遺物が出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

掘立柱建物 5 (図 5・29・31、図版 19・20) 掘立柱建物 4 の南約 3 mに位置する、桁行 3 間 (3.8 m) × 梁間 3 間 (3.6 m) の東西方向に長軸をもつ建物である。建物の南北軸はN - 14° - Wと、やや西に指向する。また、建物の南北辺は掘立柱建物 4 のそれに揃えて建てられていた。柱の掘方は隅丸方形もしくは不整形な円形を呈し、一辺もしくは直径は 0.4 ~ 0.6 mを測る。柱痕跡の直径は 0.2 m以下であった。柱穴から遺物が出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

掘立柱建物 6 (図 5・29・32・33、図版 19・21) 掘立柱建物 5 の南東約 5 mに位置する、桁行 3 間 (4.6 m) × 梁間 2 間 (3.4 m) の南北方向に長軸をとる建物である。建物の南北軸はN - 13° - Wと、やや西に指向する。これは、掘立柱建物 4・5 と同様の傾きを示す。柱の掘方は一辺 0.3 ~ 0.6 mの不整形な隅丸方形で、柱痕跡の直径は 0.2 m以下を測る。168・169・171・172 柱穴から須恵器杯片 (36 ~ 39) が出土した。36・38・39 は杯 B の底部である。37 は杯部片である。いずれも 8 世紀の所産である。

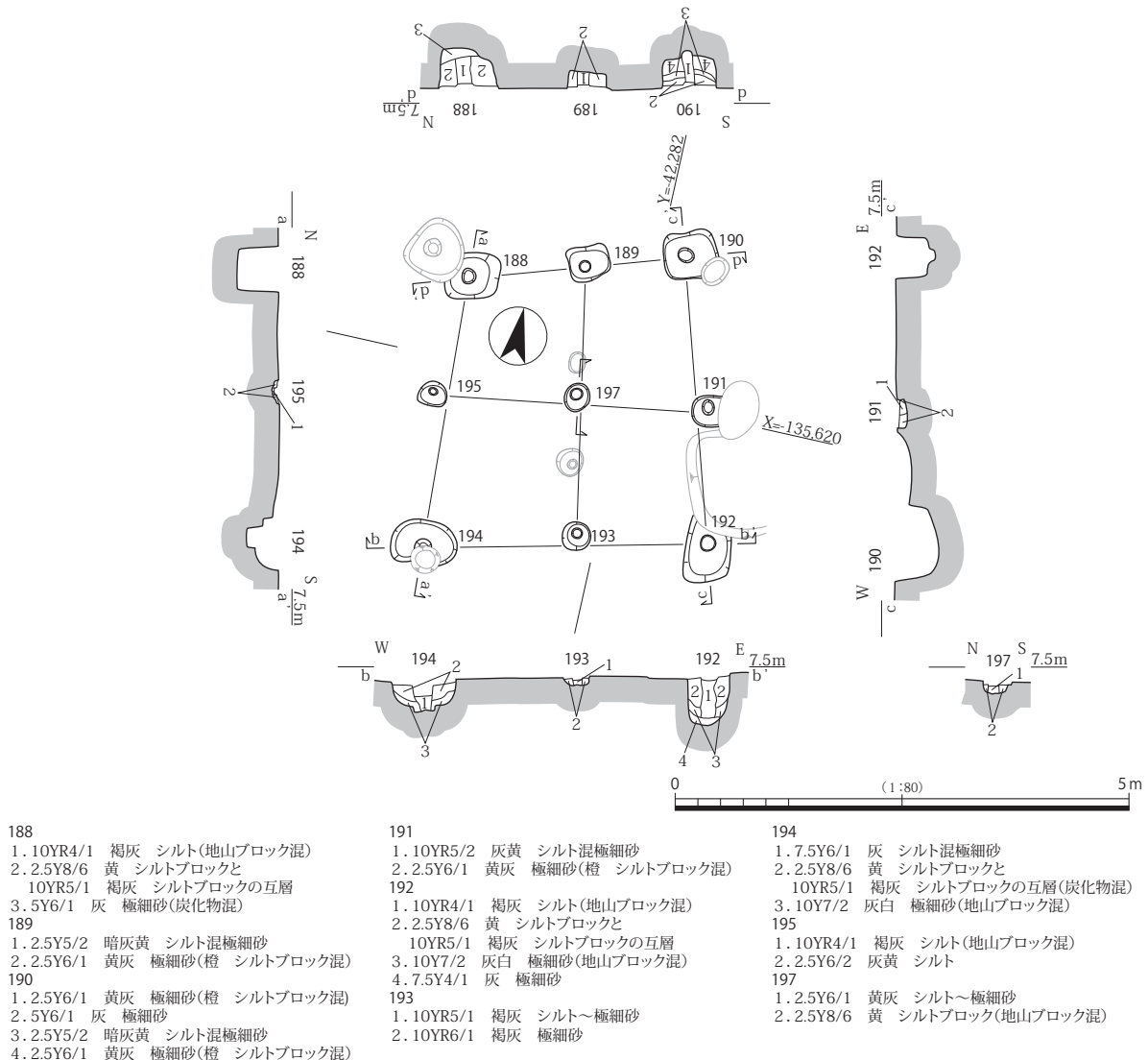


図 30 掘立柱建物 4 平・断面図

掘立柱建物 7 (図 5・29・34・35、図版 19・21) 掘立柱建物 5 の南約 10 m に位置する、桁行 3 間 (6.8 m) × 梁間 2 間 (3.8 m) の南北方向に長軸をとる建物である。建物の南北軸は $N-17^{\circ}-W$ と、やや西に指向する。柱の掘方は 180・186 柱穴を除いて一辺 0.2 ~ 0.7 m の不整形な隅丸方形である。180・186 柱穴の掘方は円形で直径 0.3 m を測る。柱痕跡の直径はいずれも 0.2 m 以下であった。178 柱穴から須恵器杯蓋 (40) が出土した。40 は杯 B 蓋片である。出土遺物からこの掘立柱建物の時期は 8 世紀前半と考えられる。

これらの掘立柱建物 4 ~ 7 は建物の配置や建物の方向から 4 棟の建物がほぼ同時期に建っていた可能性は高い。

掘立柱建物 14 (図 5・29・36、図版 22・23) 東側建物群で検出した掘立柱建物の中で最北に位置し、掘立柱建物 15 に切られる。桁行 3 間 (4.3 ~ 4.5 m) × 梁間 2 間 (3.4 ~ 4.2 m) の東西方向に主軸をもつ建物である。建物の南北軸は $N-2^{\circ}-W$ と、ほぼ正方位を指向する。柱の掘方は方形で、一辺 0.6 ~ 1.2 m を測る。ほとんどの柱の掘方が建物の軸に沿って掘り込まれるのに対して、北東隅柱

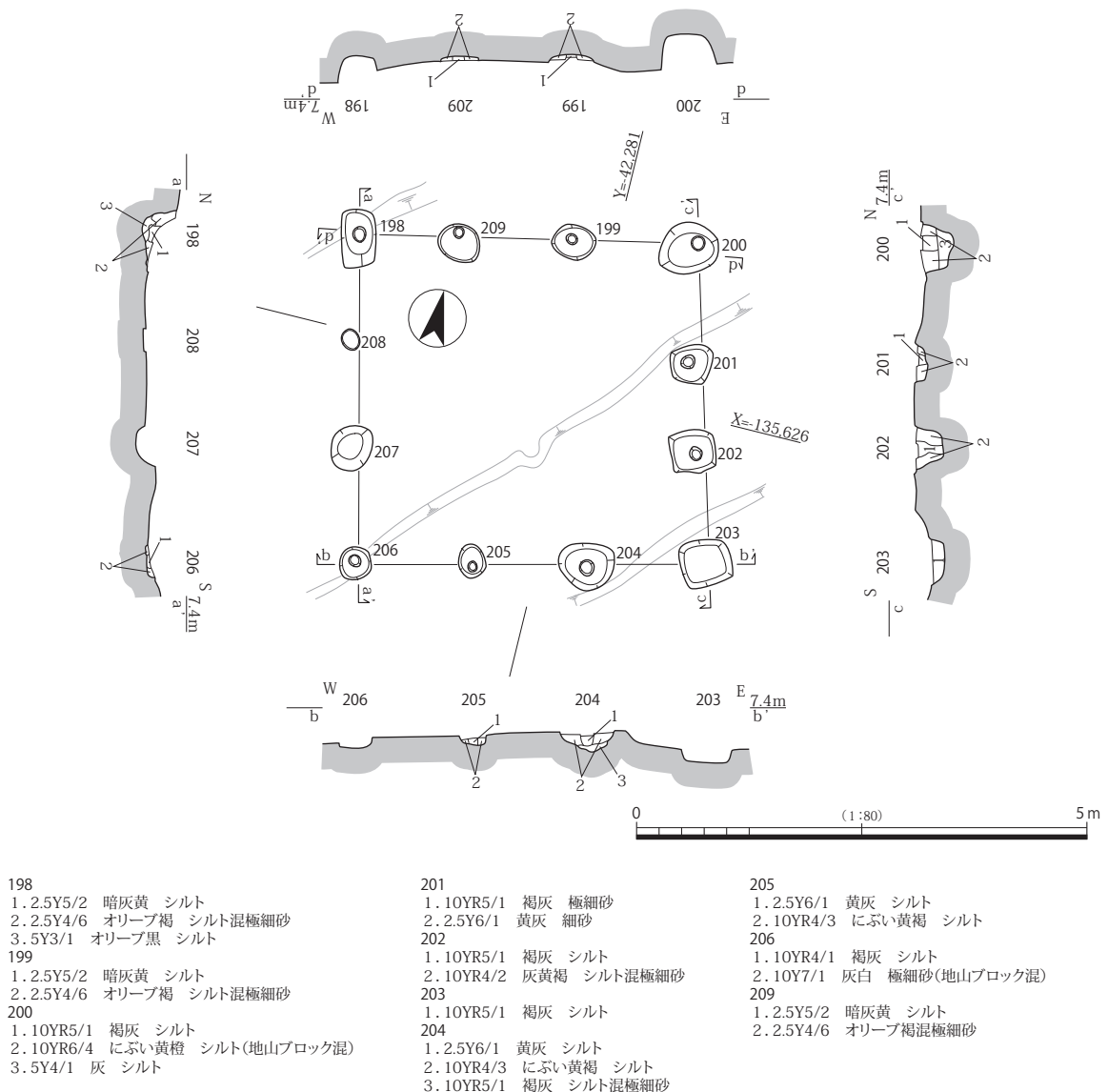
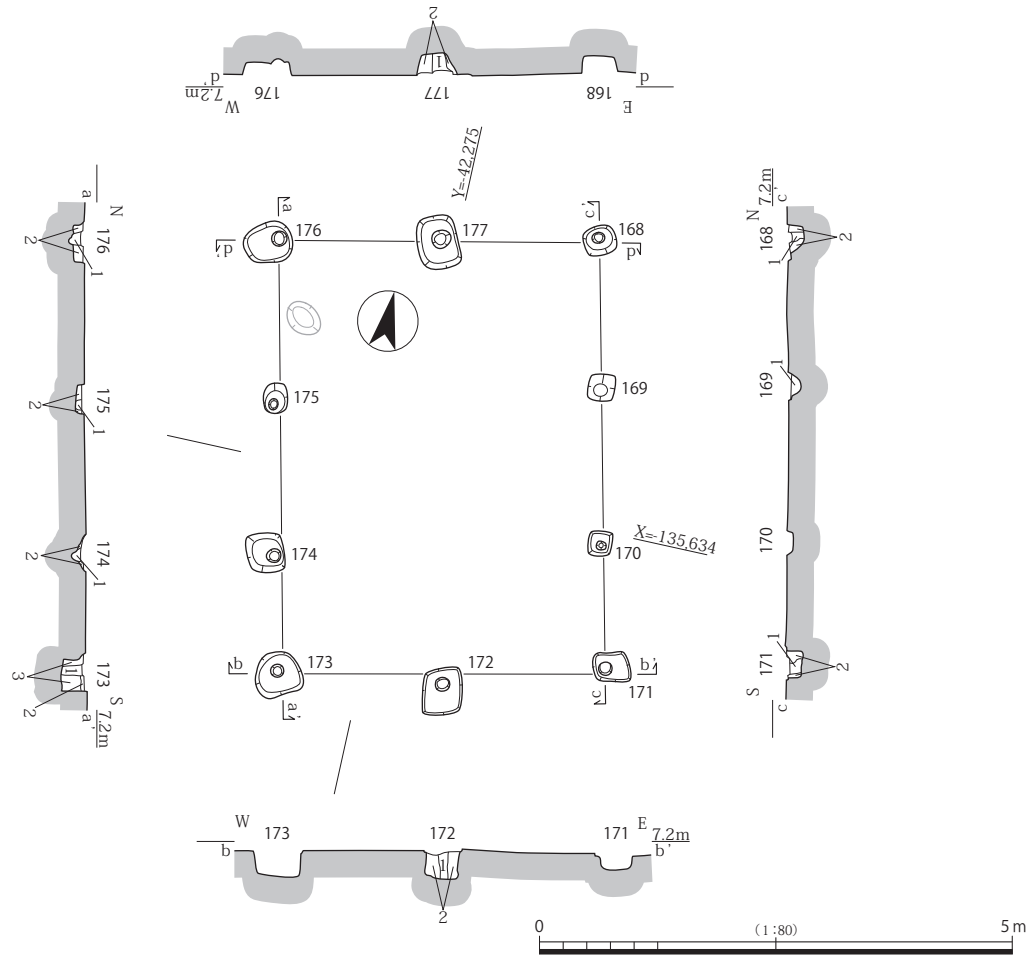


図 31 掘立柱建物 5 平・断面図

の 519 柱穴は斜め方向に傾いた掘方をもつ。柱痕跡の直径は 0.2 m 前後を測る。520 柱穴の柱痕跡内から須恵器すり鉢の細片が、522 柱穴の掘方内から土師器の細片が出土した。出土した遺物や掘立柱建物 15 との切り合い関係から、この建物の時期は 7 世紀後半と考えられる。

掘立柱建物 15 (図 5・29・37・38、図版 22・23) 掘立柱建物 14 の南東に位置し、掘立柱建物 14 とは切り合い関係にある。桁行 3 間 (4.7 m) × 梁間 2 間 (3.8 m) の東西方向に主軸をもつ建物である。建物の南北軸は N-7°-E と、やや東を指向する。柱の掘方は不整形な隅丸方形で、一辺 0.4 ~ 0.8



- | | | |
|--|--|--|
| <p>168
1. 2.5Y6/1 黄灰 粗砂混細砂
2. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂混細砂</p> <p>169
1. 2.5Y4/1 暗灰黄 細砂</p> <p>171
1. 5Y7/4 淡黄 シルト
2. 5Y4/1 灰 シルト(炭化物混)</p> | <p>172
1. 2.5Y4/1 黄灰 シルト(炭化物混)
2. 5Y3/1 オリーブ黒 シルト</p> <p>173
1. 2.5Y4/1 黄灰 シルト(炭化物混)
2. 5Y8/3 淡黄 極細砂
3. 5Y3/1 オリーブ黒 シルト(地山ブロック混)</p> <p>174
1. 5Y4/1 灰 細砂(地山ブロック混)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂</p> | <p>175
1. 5Y4/1 灰 細砂
2. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂</p> <p>176
1. 5Y4/1 灰 細砂
2. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂</p> <p>177
1. 5Y4/1 灰 細砂
2. 2.5Y4/1 黄灰 細砂(地山ブロック混)</p> |
|--|--|--|

図 32 掘立柱建物 6 平・断面図

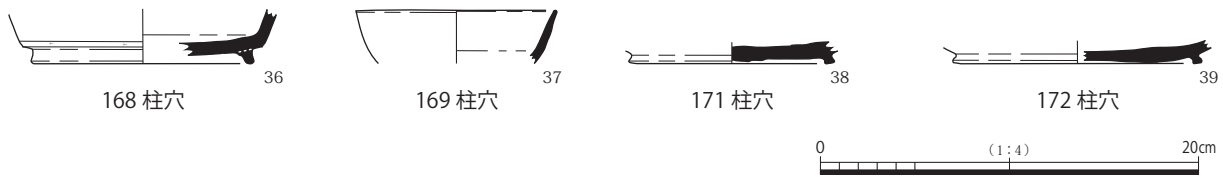


図 33 掘立柱建物 6 出土遺物

mを測る。遺物は 502・504・507 柱穴から須恵器や土師器の細片が出土したが、図示し得たのは 502 柱穴から出土した土師器皿のみであった。41 は土師器皿である。8 世紀中頃の所産と考えられる。

掘立柱建物 16 (図 5・29・39、図版 22・24) 掘立柱建物 15 の南約 12 m に位置する、東西方向に主軸をもつと考えられる桁行 3 間 (4.0 m) 以上 × 梁間 2 間 (2.3 m) 以上の建物で、建物の南半部は調査区外に

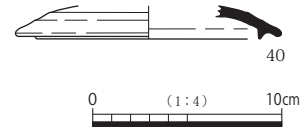
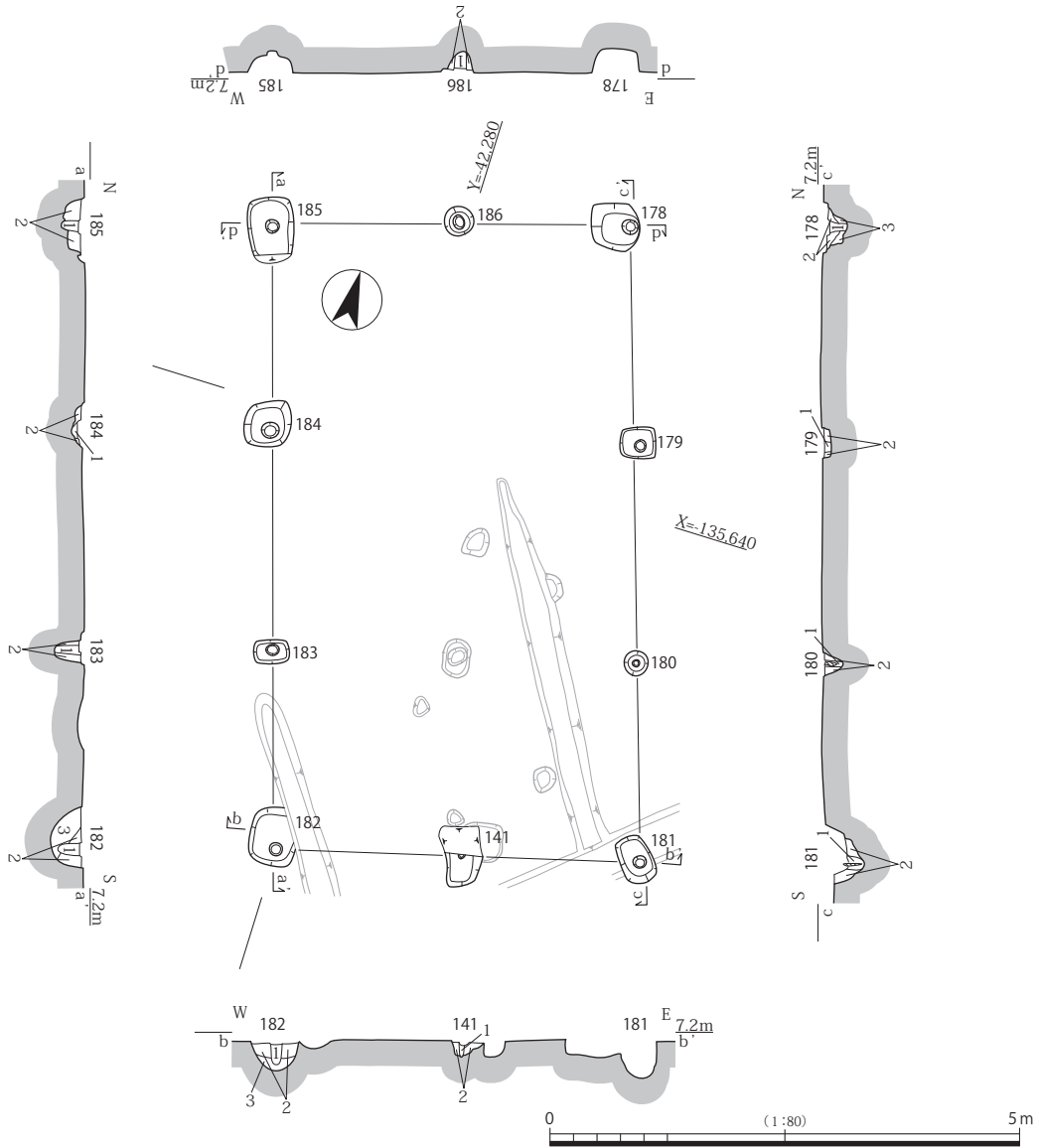


図 34 178 柱穴 出土遺物



- 141
- 1. 5Y6/1 灰 細砂
- 2. 2.5Y5/1 黄灰 細砂と
- 2.5Y6/4 にぶい黄 シルトブロックの互層
- 178
- 1. 5Y4/1 灰 シルト
- 2. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト混極細砂
- 3. 5Y8/4 淡黄 シルトブロックと
- 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト混極細砂の互層
- 179
- 1. 2.5Y5/2 暗灰 シルト
- 2. 5Y7/6 黄 シルトと
- 5Y5/1 灰 極細砂ブロックの互層

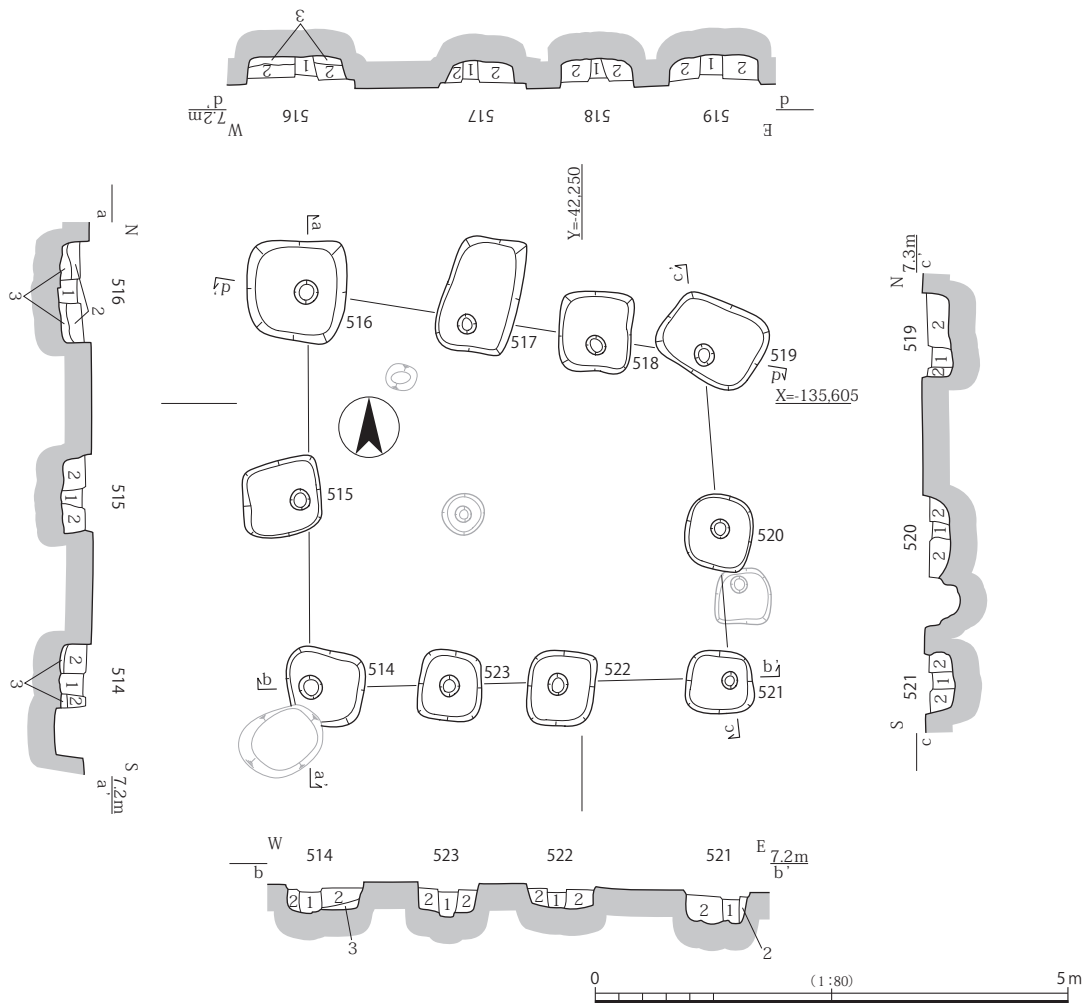
- 180
- 1. 5Y4/1 灰 シルト
- 2. 5Y6/3 オリーブ黄 細砂
- 181
- 1. 10Y6/1 灰 シルト
- 2. 10YR4/1 灰 シルト(地山ブロック混)
- 182
- 1. 2.5Y4/1 黄灰 極細砂
- 2. 5Y5/1 灰 極細砂(炭化物混)
- 3. 5Y7/6 黄 シルトブロックと
- 5Y5/1 灰 極細砂ブロックの互層
- 183
- 1. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト
- 2. 5Y5/1 灰 極細砂(炭化物混)

- 184
- 1. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト
- 2. 5Y7/6 黄 シルトブロックと
- 5Y5/1 灰 極細砂ブロックの互層
- 185
- 1. 5Y5/2 灰オリーブ シルト
- 2. 5Y7/6 黄 シルトブロックと
- 5Y5/1 灰 極細砂ブロックの互層
- 186
- 1. 2.5Y5/1 黄灰 シルト混極細砂
- 2. 5Y5/1 灰 極細砂

図 35 掘立柱建物 7 平・断面図

展開する。建物の南北軸はN-7°-Wと、やや西を指向する。柱の掘方は隅丸方形もしくは円形で、一辺0.4～0.8mを測る。遺物の出土がなかったため、詳細な時期は不明であるが、建物の方向や柱穴の規模などから、掘立柱建物15とほぼ同時期の建物と考えられる。

152 土坑 (図29・40・41、図版25) 掘立柱建物7の北約3mに位置する、直径0.5m、深さ0.2mの円形の土坑である。埋土はオリーブ褐の細砂～極細砂の単層であった。土坑の底から須恵器や土師器が廃棄された状態で出土した。42は須恵器杯である。43～47は土師器杯である。43は上外方に立ち上がる杯部をもち、内面に斜放射状暗文を施す。44は内彎しながら立ち上がる杯部をもつ。磨滅が著しかったが、内面には斜放射状暗文が残る。45・46は外反しながら立ち上がる杯部をもつ。45



- 514
 - 1. 2.5Y6/3 にぶい黄 細砂混シルト
 - 2. 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト
 - 3. 10YR6/6 にぶい黄橙 シルト混細砂(地山ブロック混)
- 515
 - 1. 2.5Y6/3 にぶい黄 細砂混シルト
 - 2. 10YR6/6 にぶい黄橙 シルト混細砂(地山ブロック混)
- 516
 - 1. 2.5Y6/3 にぶい黄 細砂混シルト
 - 2. 10YR6/6 にぶい黄橙 シルト混細砂(地山ブロック混)
 - 3. 2.5Y6/6 明黄褐 極細砂混シルト
- 517
 - 1. 2.5Y6/3 にぶい黄 細砂混シルト
 - 2. 10YR6/6 にぶい黄橙 シルト混細砂(地山ブロック混)
- 518
 - 1. 2.5Y6/3 にぶい黄 細砂混シルト
 - 2. 10YR6/6 にぶい黄橙 シルト混細砂(地山ブロック混)

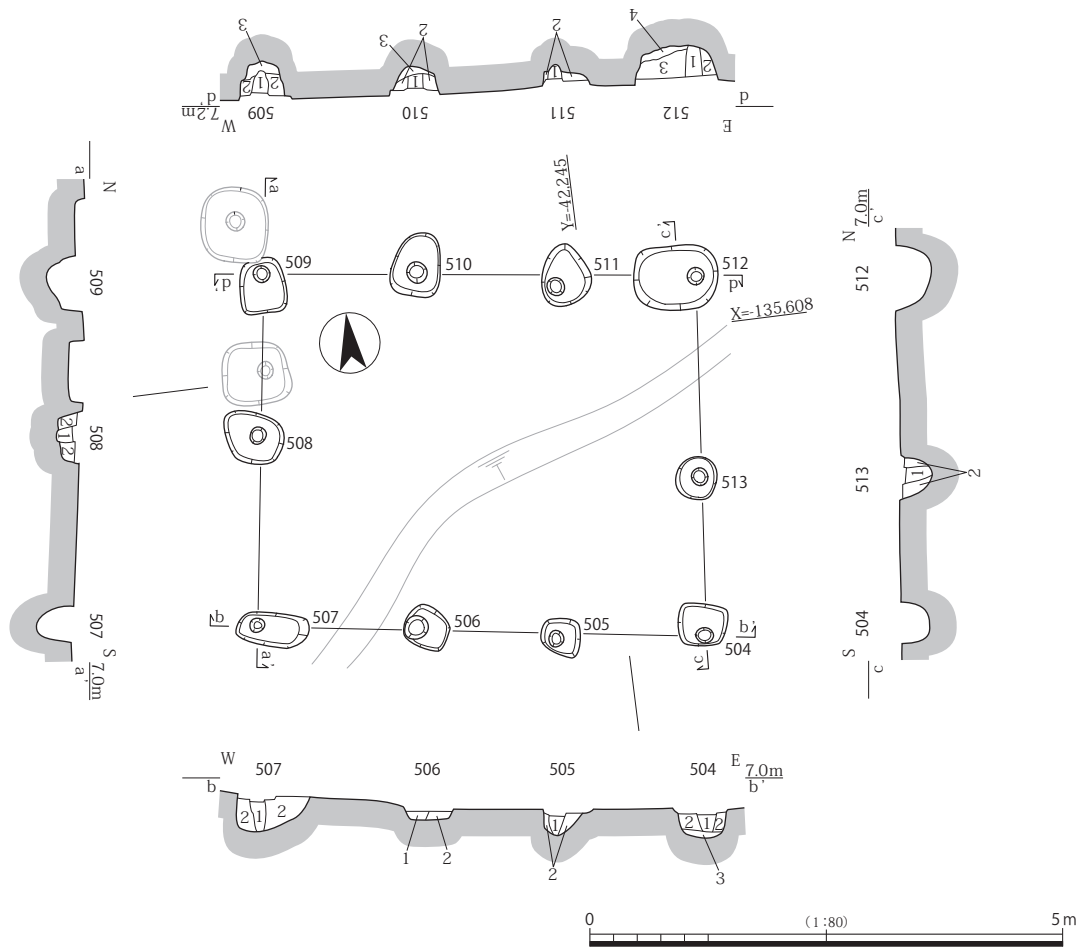
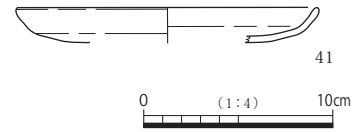
- 519
 - 1. 2.5Y6/3 にぶい黄 細砂混シルト
 - 2. 10YR6/6 にぶい黄橙 シルト混細砂(地山ブロック混)
- 520
 - 1. 2.5Y6/3 にぶい黄 細砂混シルト
 - 2. 10YR6/6 にぶい黄橙 シルト混細砂(地山ブロック混)
- 521
 - 1. 2.5Y6/3 にぶい黄 細砂混シルト
 - 2. 10YR6/6 にぶい黄橙 シルト混細砂(地山ブロック混)
- 522
 - 1. 2.5Y6/3 にぶい黄 細砂混シルト
 - 2. 10YR6/6 にぶい黄橙 シルト混細砂(地山ブロック混)
- 523
 - 1. 2.5Y6/3 にぶい黄 細砂混シルト
 - 2. 10YR6/6 にぶい黄橙 シルト混細砂(地山ブロック混)

図36 掘立柱建物14 平・断面図

は口縁端部内面に沈線状にヘラミガキを施す。47は大きく外反させる口縁をもつ。口縁端部内面には沈線を施す。48は土師器羽釜である。出土した遺物はいずれも8世紀前から中頃の所産である。

163 土坑 (図 29・40・41) 152 土坑の東約 1 m に位置する。平面形は不整な円形を呈し、直径 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は 152 土坑と同じであった。中から土師器壺 (49) が出土した。

117・118 溝 (図 29・40・41、図版 25) 118 溝は調査区中央南東 図 37 509 柱穴 出土遺物



- | | |
|--|---|
| <p>504</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR6/6 明黄褐 極細砂混シルト 2. 2.5Y5/1 黄灰 細砂混中砂(炭化物混) 3. 10YR4/1 褐灰 細砂混中砂(炭化物混) <p>505</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR4/1 褐灰 シルト混極細砂(炭化物混) 2. 2.5Y6/4 にぶい黄 細砂混シルト <p>506</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR4/1 褐灰 シルト混極細砂(炭化物混) 2. 2.5Y6/4 にぶい黄 細砂混シルト <p>507</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y4/1 黄灰 極細砂混粗砂(炭化物混) 2. 2.5Y5/4 黄褐 極細砂混シルト(地山ブロック混) <p>508</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y6/4 にぶい黄 細砂混シルト(炭化物混) 2. 10YR6/4 にぶい黄橙 極細砂混シルトと 10YR5/1 褐灰 極細砂混細砂の互層 <p>509</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR6/6 明黄褐 極細砂混シルト 2. 10YR6/4 にぶい黄橙 極細砂混シルトと 10YR5/1 褐灰 極細砂混細砂の互層 3. 10YR4/1 褐灰 シルト混極細砂 | <p>510</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y4/1 黄灰 シルト混細砂(炭化物混) 2. 10YR6/4 にぶい黄橙 極細砂混シルトと 10YR5/1 褐灰 極細砂混細砂の互層 3. 10YR4/1 褐灰 シルト混極細砂 <p>511</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y4/1 黄灰 シルト混細砂(炭化物混) 2. 10YR6/4 にぶい黄橙 極細砂混シルトと 10YR5/1 褐灰 極細砂混細砂の互層 <p>512</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y4/1 黄灰 シルト混細砂(炭化物混) 2. 2.5Y6/4 にぶい黄 極細砂混中砂 3. 2.5Y5/1 黄灰 細砂混中砂(炭化物混) 4. 10YR3/1 黒褐 極細砂混シルト(地山ブロック混) <p>513</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR4/1 褐灰 中砂混シルト 2. 10YR6/4 にぶい黄橙 中砂・細砂混シルト |
|--|---|

図 38 掘立柱建物 15 平・断面図

端から北東方向にはしった後、大きく南東方向に湾曲して掘立柱建物4・5の東側をはしり、掘立柱建物6の北約4mで収束する。一方、117溝は118溝が湾曲する部分から派生して北東方向に約8mはしり、谷部へと向かう傾斜地付近で収束する。溝の規模はどちらも幅0.4m、深さ0.1mを測る。遺物は118溝から土師器高杯脚柱部(50)が出土した。この2条の溝は、集落域3内で検出した掘立柱建物群を東西に二分するための区画溝と考えられる。

124・127溝(図29・40、図版26) 124・127溝は掘立柱建物4の西約5mの位置を、N-27°-Eと北東方向を指向して並行にはしる。2条の溝の幅は芯々間で2.5mを測る。規模は124溝は全長2.9m、幅0.4m、深さ0.1m、127溝は全長2.8m、幅0.6m、深さ0.1mであった。遺物は出土しなかったため、時期や性格については不明である。

151溝(図29・40・41、図版26) 調査区の南西端部に位置する平面「L」字状にはしる溝である。南から北へはしった後、東に屈折する。規模は幅0.9m、深さ0.2mを測る。埋土は2層で上層に粗砂混細砂、下層に極細砂層が堆積する。遺物は下層から庄内甕(51)が出土した。51は口縁部である。掘立柱建物群とも方向が違うことや、出土した遺物も庄内期の甕であったことなどから、弥生時代末の遺構と考えられるが、溝の周囲ではこの時期の遺構は他に検出されておらず、その性格については不明である。

529溝(図29・40、図版22) 掘立柱建物14・15の東側を北西-南東方向にはしる。規模は幅0.3m、深さ0.1mを測る。遺物の出土はなかったが、117・118溝とほぼ同規模であったことや、検出された位置などから考えて、建物群の北辺を画する溝と考えられる。

498落込み(図29・40・41、図版42) 掘立柱建物14の南約12mに位置する不定形の落込みである。

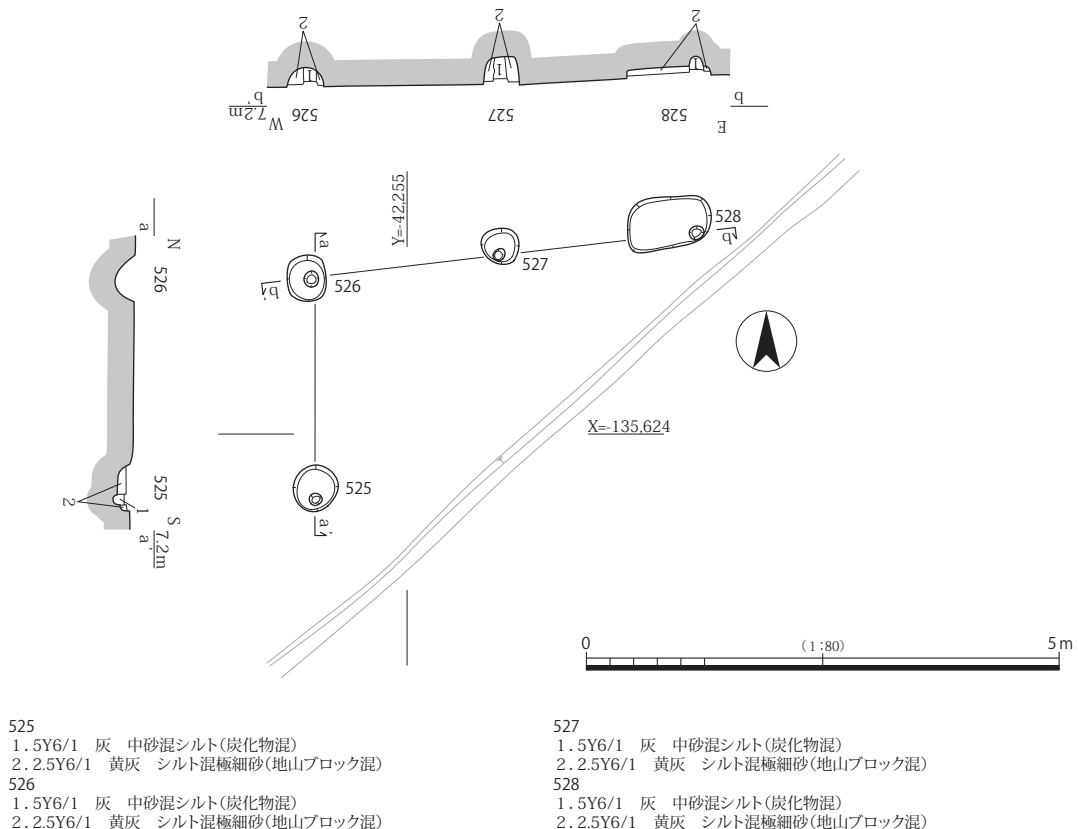


図39 掘立柱建物16 平・断面図

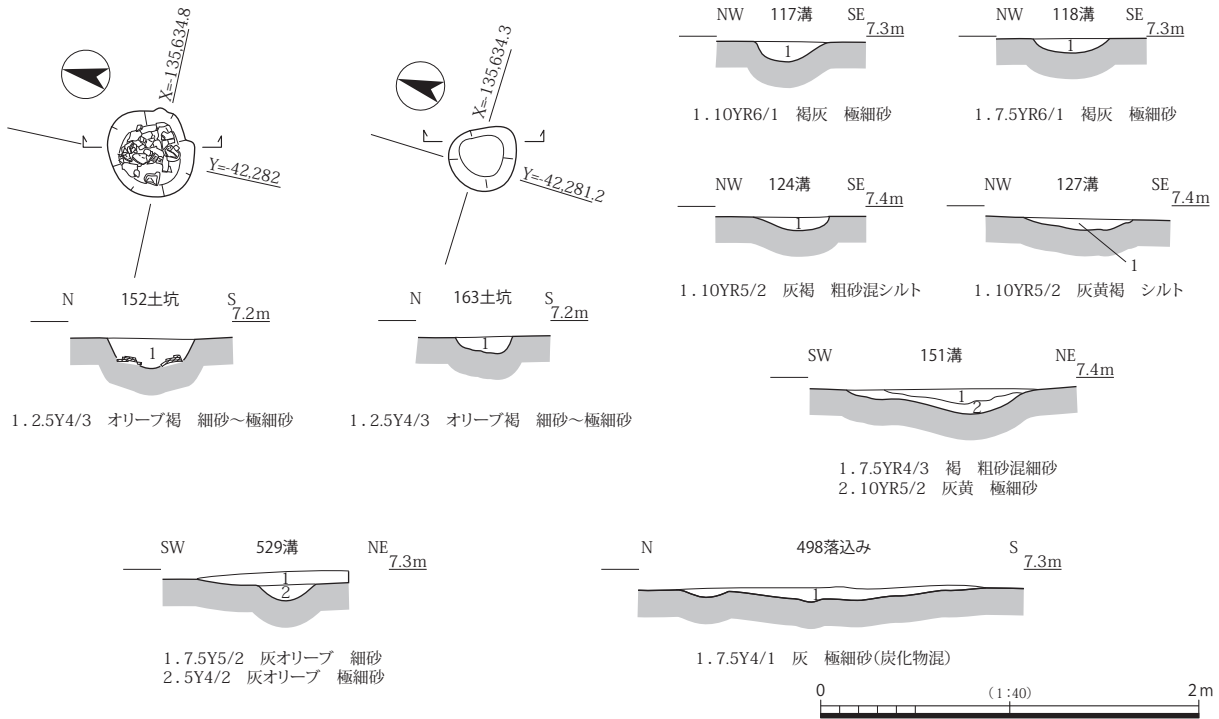


図40 152・163土坑、117・118・124・127・151・529溝、498落込み 平・断面図

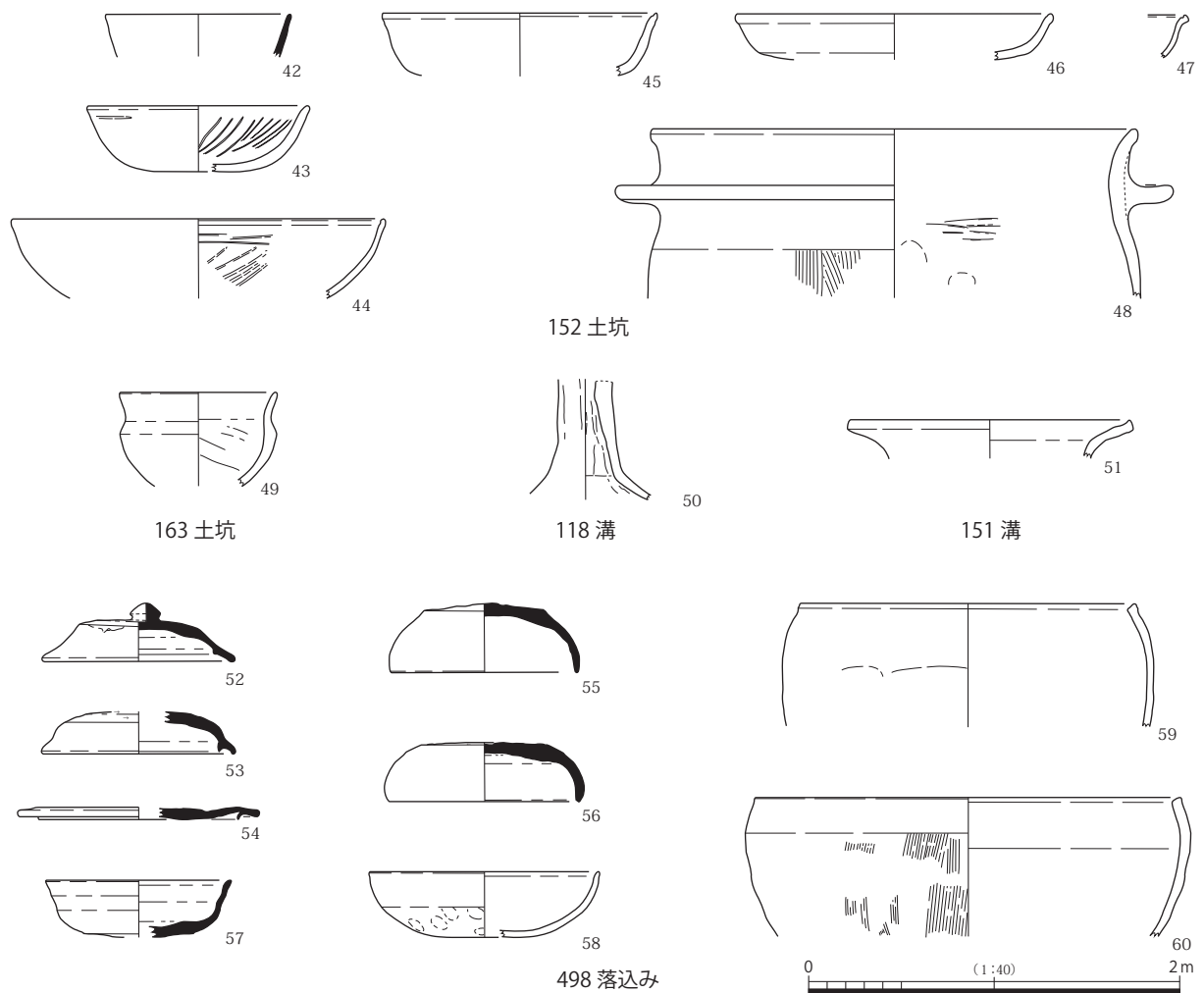


図41 152・163土坑、118・151溝、498落込み 出土遺物

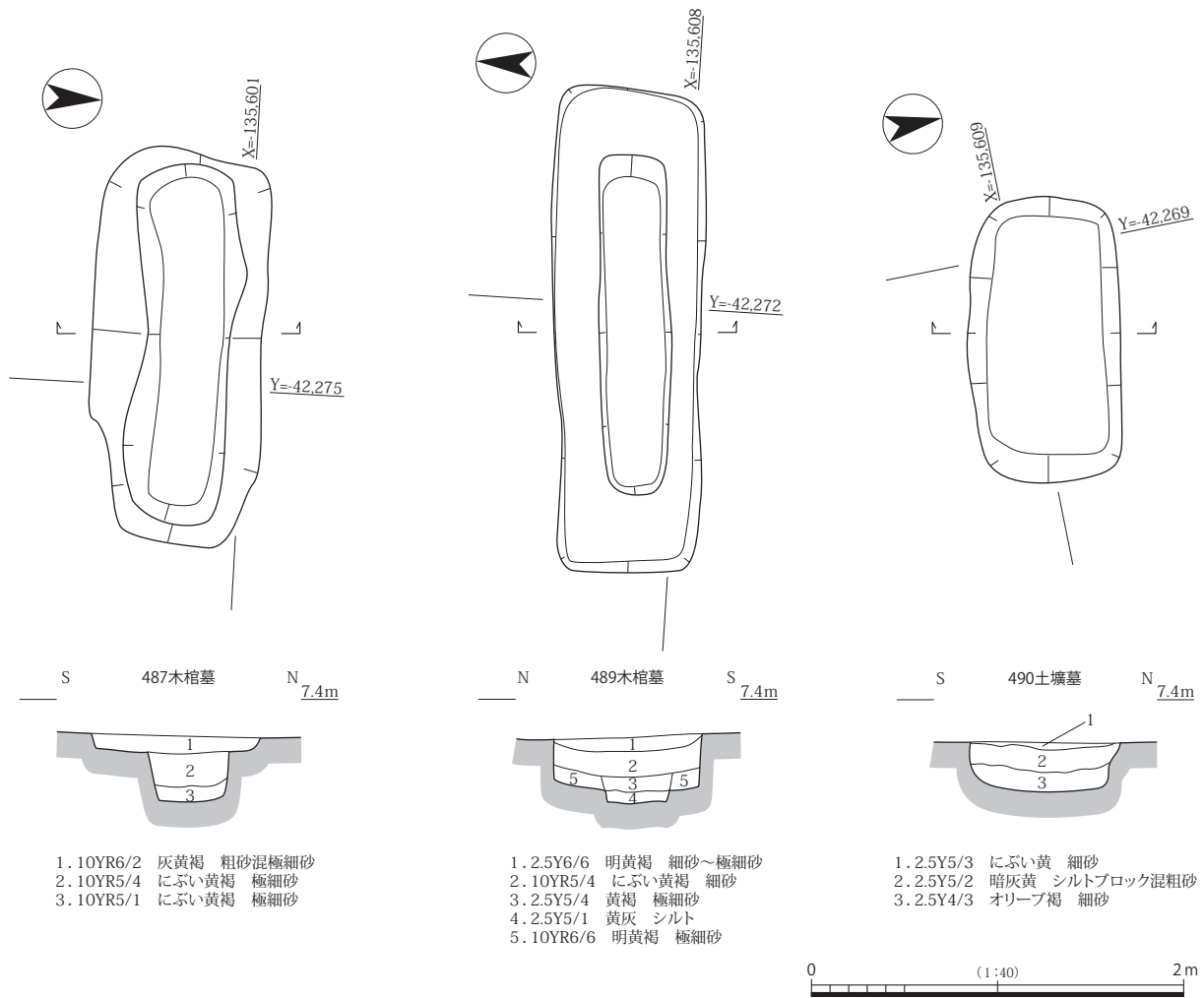


図42 487・489木棺墓、490土墳墓 平・断面図

全長5.2m、最大幅2.2m、深さ0.1mを測る。埋土は単層で炭化物を含む極細砂であった。埋土中から飛鳥時代の遺物(52～60)が出土した。52～57は須恵器、58～60は土師器である。52・53は杯G蓋、54は杯B蓋であるが、焼き歪みが著しい。55・56は杯H蓋である。57は杯Gである。58は杯Cで体部下半から底部にかけて指押さえが残る。59・60は鉢である。どちらも口縁端部に面をもつ。これらの遺物から、この落込みは7世紀中から後半の時期に比定され、掘立柱建物14が建てられていた時期に存在した落込みと考えられる。

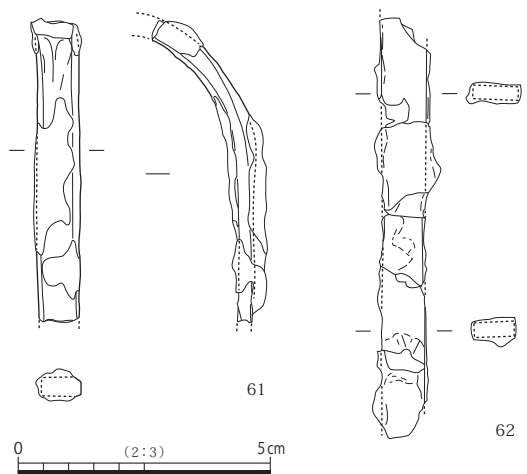
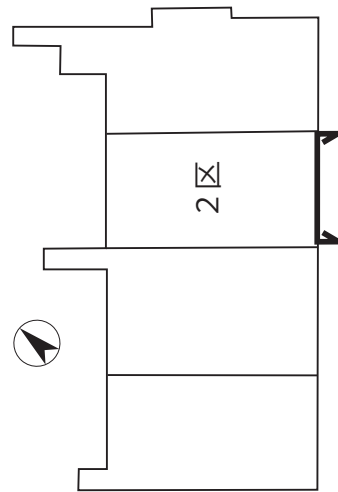


図43 487木棺墓 出土遺物

487木棺墓(図29・42・43、図版27・42) 487木棺墓は117・118溝で区切られた区画の東側にあたり、掘立柱建物14の西約20mに位置する。3基検出した墓の中で最北部に位置する。木棺墓の主軸はN-90°-Eで、東西方向を指向する。墓壇の平面形は長方形で、規模は長さ2.1m、幅0.9m、検出面からの深さは0.4mを測る。墓壇の中央部は木棺を据えるために一段深く掘り窪められており、その規模は長さ1.9m、東側幅0.55m、西側幅0.50m、深さ0.3mを測る。墓壇上面の形から頭位を判断することはできなかったが、木棺据え付け



- 11. 7.5YR4/1 褐灰 粗砂混シルト(第3層)
- 12. 2.5Y7/1 灰白 細砂(第3層)
- 13. 10YR4/1 褐灰 極細砂混シルト(第3層)
- 14. 2.5Y8/1 灰白 粗砂~中砂(第3層)
- 15. 10YR5/1 褐灰 極細砂混細砂(第4層)
- 16. 10YR6/1 褐灰 シルト(第4層)
- 17. 7.5YR7/1 明褐灰 極細砂混細砂(第4層)
- 18. 7.5YR6/2 灰褐 極粗砂~中砂(第4層)
- 19. 2.5Y7/1 灰白 極細砂(第4層)
- 20. 10YR2/2 黒褐 細砂混極細砂(第4層)

- 1. 盛土
- 2. N3/ 暗灰 細砂混シルト(旧耕土)
- 3. 攪乱
- 4. 5Y5/1 灰 中砂・極細砂混シルト(第1-1層)
- 5. 2.5Y6/1 黄灰 粗砂・中砂混細砂(第1-2層)
- 6. 10B6/1 青灰 シルト・粗砂混細砂(第1-3層)
- 7. 5B5/1 青灰 中砂混シルト(第2-1層)
- 8. 2.5Y6/2 灰黄 極細砂・細砂混シルト(第2-2層)
- 9. 5B6/1 青灰 極粗砂・シルト混細砂(第2層)
- 10. 2.5Y5/1 黄灰 極粗砂・中砂混粗砂(第2-3層)

図44 2区 南東壁 断面図

のための二段目の墓壙は、東側短辺の幅が西側短辺に比べて5 cm 広がったことから、東に頭位をもつ木棺墓であったと考えられる。ただし、木棺は腐朽していたため遺存しておらず、土層断面においても、木棺腐朽粘土の痕跡も確認できなかった。埋土は3層であったが、中層の埋土内より不明鉄製品が2本(61・62)出土した。61・62ともに断面は長方形を呈する。61は大きく屈曲し、かつ、両端部を欠損する。残存長6.0 cm、幅0.8 cm、厚さ0.4 cmであった。62も両端部が欠損しており、残存長7.3 cm、幅1.0 cm、厚さ0.3 cmを測る。遺物は他に出土しなかったため、詳細な時期については不明である。

489 木棺墓(図29・42、図版28) 487木棺墓の南東約6 mに位置する。木棺墓の主軸はN-87°-Eで、ほぼ東西方向を指向する。墓壙の平面形は逆台形を呈し、長さ2.6 m、東側場0.80 m、西側幅0.75 m、検出面からの深さ0.3 mを測る。487木棺墓と同様に、墓壙の中央部は木棺を据えるために一段深く掘り窪められており、その規模は長さ1.8 m、東側幅0.35 m、西側幅0.30 m、深さは0.1 mを測る。その結果、487木棺墓についても東に頭位をとる墓であると考えられる。ただし、木棺は腐朽していたため遺存しておらず、土層断面においても木棺腐朽粘土の痕跡も確認できなかった。埋土は断面観察の結果、一段目の墓壙内は3層確認できたが、上層の2層は覆土が落ち込んだものと考えられる。一方、木棺内流入土は上から3層目の上面まで立ち上がっていたことから、3層目の土は木棺据え付け後の裏込め土と判断した。遺物は出土しなかったため、詳細な時期については不明である。

490 土壙墓(図29・42、図版29) 489土壙墓の東約2 mに位置する。墓壙の主軸はN-100°-Eで、やや南東方向を指向する。平面形は逆台形を呈し、長さ1.5 m、東側場0.8 m、西側幅0.7 m、検出面からの深さ0.3 mを測る。木棺の痕跡は確認できなかったことから直葬と考えられる。遺物は出土しなかったため、詳細な時期については不明である。

3基の墓については、487木棺墓から2本の不明鉄製品が出土したほかは遺物の出土はなく、詳細な時期は不明であったが、墓の方位や分布状況などから考えて、建物群が存在した時期に造られたものと推測される。

(4) 谷(図44～50、図版30・31)

谷(図44、図版30・31) 調査区内を「Y」字状にはしる谷で、弥生時代以前から存在する。北側の谷はN-19°-Eを指向し、北から南方向へはしる。一方、南側の谷はN-75°-Wを指向しており、西から東方向へはしり、合流して南東方向へ流下する。第4層下面から測った谷の深さは、上流部では2本とも0.4 m、合流後の下流部では1.2 mを測る。谷内には第2～4層が堆積する。第2層は調査地が耕作地として利用される前段階で、かつ、谷が完全に埋没しきらず窪地状を呈していた際に堆積する中世の堆積層である。遺物は瓦器の他に古代の須恵器や土師器、七尾瓦窯で焼成された瓦などが出土したが、これらの古代の遺物は、谷の上流や周辺の微高地上から流入したものと考えられる。第3層は4層に細分でき、調査区南東壁面で観察した結果、第3層の最上層にあたる11. 褐灰粗砂混シルト層は止水堆積による土壌化が顕著に認められた。また、第3層からは古墳時代後期から平安時代の遺物が多数出土した。谷の最深部に堆積する第4層は谷の合流部より南東側において堆積が確認できた。遺物の出土は少なく、弥生土器片などが出土した。

以上のように、この2本の谷は弥生時代以降中世にいたるまで存続しており、完全に埋没して耕作地として利用されるようになるまでの間、集落域の形成に規制をかける存在となっていたことが分かる。

谷出土遺物(図45～50、図版42～45)

第2層(図45、図版42～43) 第2層からは瓦器の他に、弥生土器、須恵器、土師器、瓦、鉄釘、

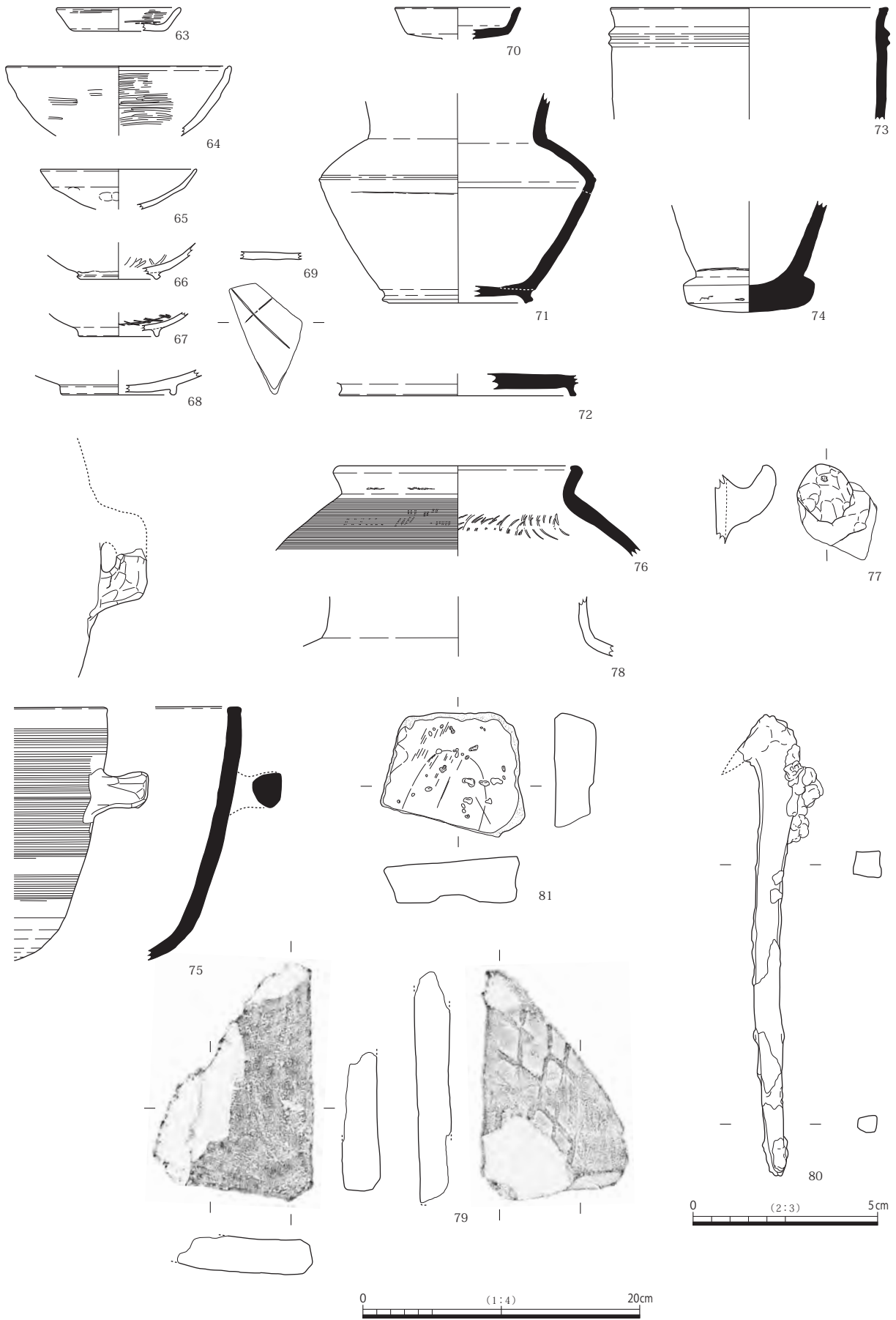


图45 谷部 第2層 出土遺物

砥石などが出土した。弥生土器をはじめ古代に属する須恵器や土師器は、谷の上流や周辺の微高地上から流入したものと考えられる。63～67は瓦器である。63は皿、64～67は椀である。いずれも破片で12～13世紀の所産である。68は緑釉陶器皿もしくは椀の底部である。9世紀末から10世紀初頭に属すると考えられる。69は土師器皿底部で、外面にヘラ記号が認められる。70～76は須恵器である。70は高杯杯部で、脚部を欠損する。71は壺Cであるが、口縁端部を欠損する。8世紀前から中頃に属する。72は壺底部である。73は鉢か。頸部直下に断面三角形の突帯が2条巡る。8世紀の所産である。74はすり鉢である。体部外面下位にヘラ描き沈線が1条巡る。75は深鉢である。「U」字状の把手をもつ。体部にはカキ目を、体部下半から底部はヘラケズリを施す。76は甕である。77は瓦質土器の鍋把手である。78は弥生土器の甕口頸部である。79は隅切瓦である。凸面に斜格子目タタキが施されていることから、七尾瓦窯で焼成されたものと考えられる。80は鉄製の搔折れ釘であるが、頭部先端部を欠損する。81は砂岩製の砥石である。使用面は1面であった。

第3層 (図46～49、図版43～45) 第3層からは須恵器、土師器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白磁、弥生土器、製塩土器、瓦、鉄製品、石製品など多くの遺物が出土した。82～118は須恵器である。82～87は杯蓋である。82は杯G蓋で、宝珠つまみをもつ。7世紀中頃に比定される。83～87は杯B蓋である。88～95は杯である。88は杯Hである。7世紀初頭の所産である。89～91は杯Aである。91は墨書土器で底部外面に「十」?と書かれる。92～95は杯Bである。93は墨書土器で、底部外面に「Φ」と記す。95は転用硯で、底部外面に墨が残る。96は皿Bか。97・98は鉢である。7世紀前から中頃の所産であろう。99は横瓶または壺の口縁部である。100～110は壺である。100は長径壺の体部である。体部上半に2条の羽状列点文を施す。101は短頸壺体部である。体部にカキ目を施す。6～7世紀に属するか。102・103は壺口頸部である。102は頸部に3条の波状文を施す。6世紀後半から7世紀初頭の所産である。104・105は別個体の壺Kの頸部と体部である。8世紀の所産である。106は壺脚部、107は台付壺の脚部である。108は壺Lである。9世紀中頃の所産である。109は壺Mであるが、頸部を欠損する。110は壺Gである。底部外面に糸切痕が残る。8世紀末から9世紀初頭の所産である。111はすり鉢の底部である。棒状工具によって内面まで貫通する刺突痕が3箇所みられた。112は甕底部である。底部外面に並行する3条の沈線が刻まれる。また、出土したのが小片であったため完全に復原することはできないが、蒸気孔の形状は特異な形状をとる可能性が高い。7～8世紀か。113～118は甕の口頸部である。113～115は6世紀後半、116は7世紀前半、117・118は8世紀に属する。119は土師器皿でいわゆる「て」字状口縁をもつ。10世紀に属する。120は緑釉陶器皿で、底部外面に糸切痕が残る。9世紀の所産である。121は緑釉陶器の段皿である。10世紀の所産である。122は灰釉陶器皿の口縁部である。123・124は黒色土器A類の椀である。125・126は緑釉陶器の椀である。ともに平底で、126には糸切痕が残る。127・128は灰釉陶器の椀である。128には糸切痕が残る。129・130は白磁碗である。131は土師器高杯脚柱部である。面取りを施す。8世紀の所産である。132～134はいわゆる摂津C型羽釜である。135・136は製塩土器で、丸底皿式に属する。8世紀の所産である。137・138は管状土錘である。139は弥生土器壺または甕の底部である。混入である。140～143は瓦である。140は難波宮6303型式の軒丸瓦で、七尾瓦窯で焼成されたと考えられる。8世紀中頃に属する。141は軒平瓦である。唐草文の一部が残る。西寺系の瓦の特徴をもつことから、吉志部瓦窯で焼成されたものか。二次的に被熱を受けた痕跡が残る。9～10世紀の所産である。142・143は平瓦で、凹面には布目痕が、凸面には縄目タタキが残る。

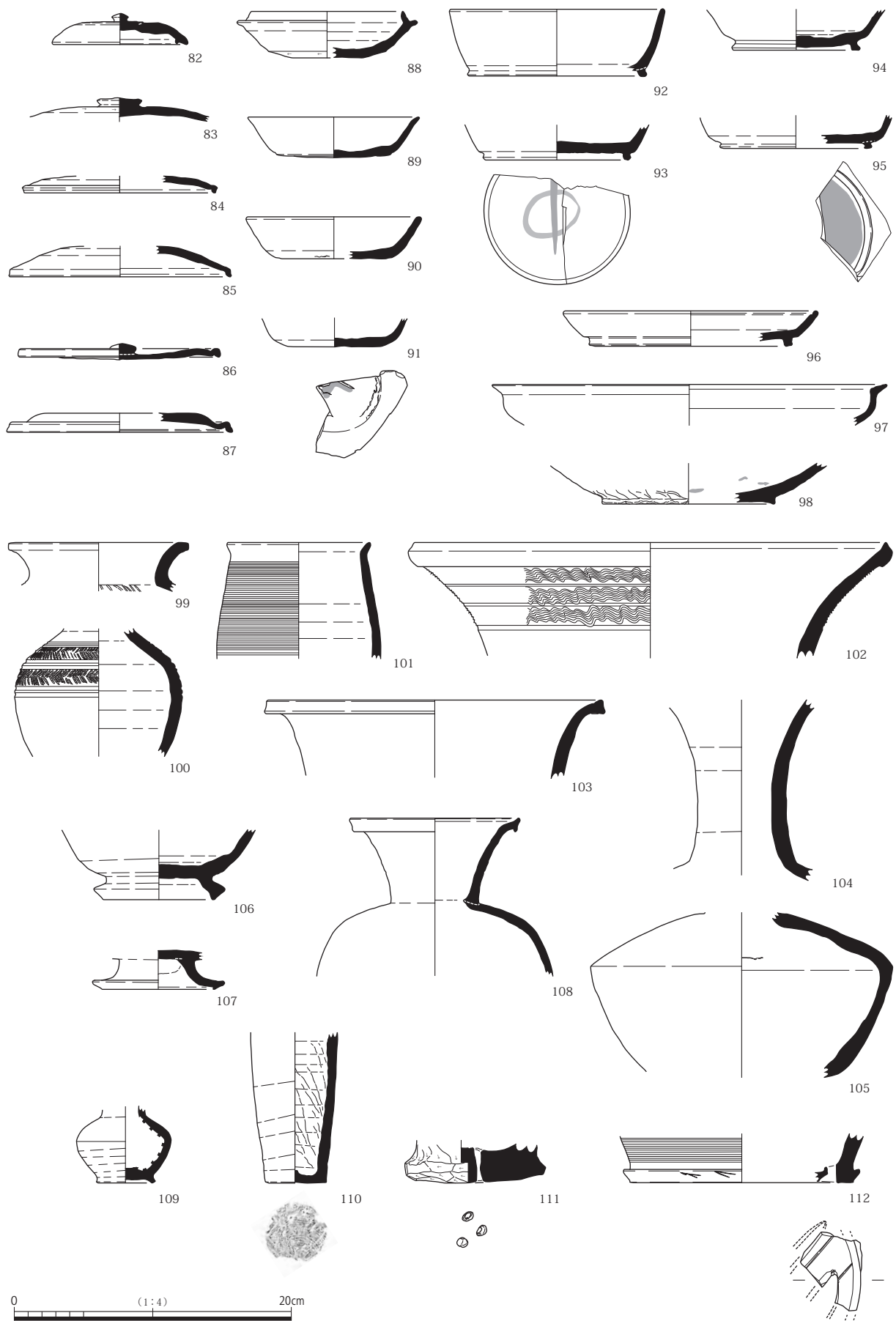


图 46 谷部 第 3 层 出土遗物 (1)

144～149は石製品である。144は滑石製石鍋を転用した温石である。四周を再研磨する。一部が欠損していたものの、上端部には紐を通すための穿孔が残る。また、凸面の一部には煤の付着が認められた。

145は一部打ち欠きが認められることから、砂岩製の石錘の可能性はある。146・147は砂岩製の砥石である。148はサヌカイト製の凹基無茎式石鏃である。0.6 gを量る。149はサヌカイト製の剥片である。150は有頸有茎鉄鏃であるが、先端部を欠損する。

第4層 (図50) 第4層から遺物はあまり出土しなかった。中でも図示できたのは弥生土器底部1点(151)のみであった。151は弥生土器甕もしくは壺の底部である。詳細な時期は不明である。

4. 古代末から中世の遺構

集落域1～3において、古代末から中世の遺構を検出した。集落域1については、第3層以下の堆積が確認できた2区では第2層下面で、その他においては第4層下面で遺構を検出した。検出した遺構はピット、土坑、溝などである。また、集落域2については第3層以下の堆積がなかったため、第4層下面で遺構を検出した。検出した遺構は掘立柱建物、ピット、土坑、土壙墓、溝などであった。さらに集落域3については、古代の遺構が存在する調査区東半部で当該時期の遺構は確認できなかったが、調査区西隅部で池を検出した。出土遺物から、これらの遺構は11～13世紀に属すると考えられる。以下、集落域毎に報告を行う。

(1) 集落域1 (図51～53、図版31～33)

集落域1は古代の遺構面と同様、1・2区北西部にある微高地上で、第2層を除去して検出した。検出した遺構はピット、土坑、溝などであった。ピットは100基以上検出したが、建物を復原することはできなかった。ピットは直径0.2 m前後のものを中心に0.4 m以下を測るものがほとんどであった。また、ピットの埋土はいずれも黒褐もしくは褐灰の極細砂や細砂を基調としていた。ここでは遺物が出土したピットを中心に報告を行う。土坑と溝は2区の微高地上で検出された。なお、土坑については直

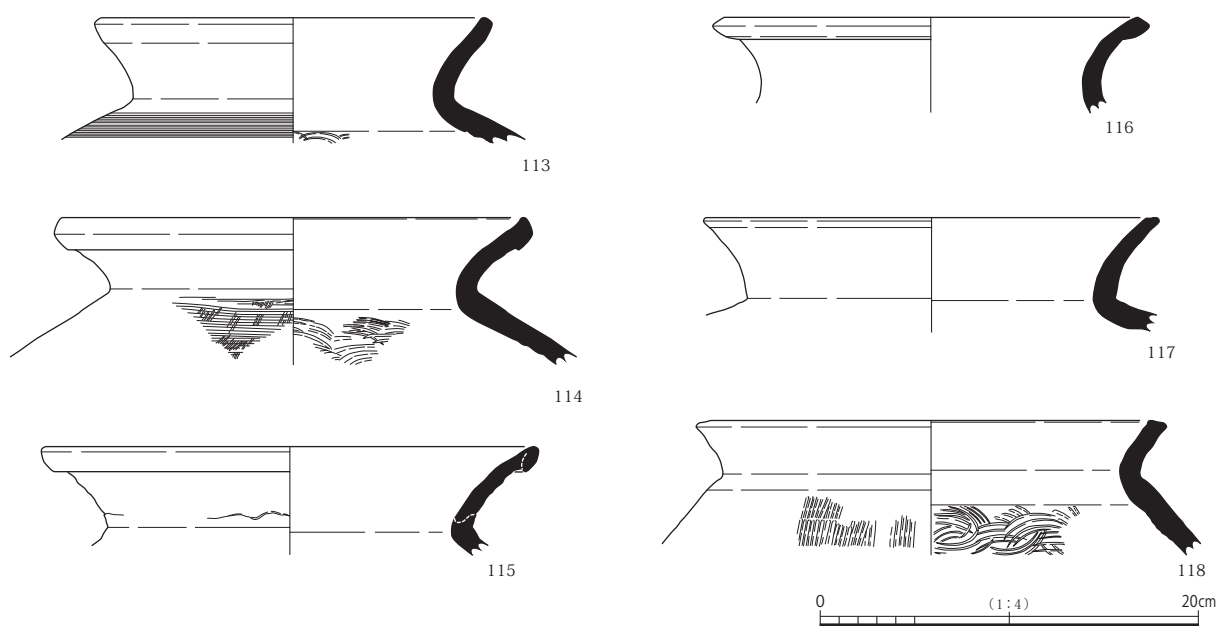


図47 谷部 第3層 出土遺物(2)

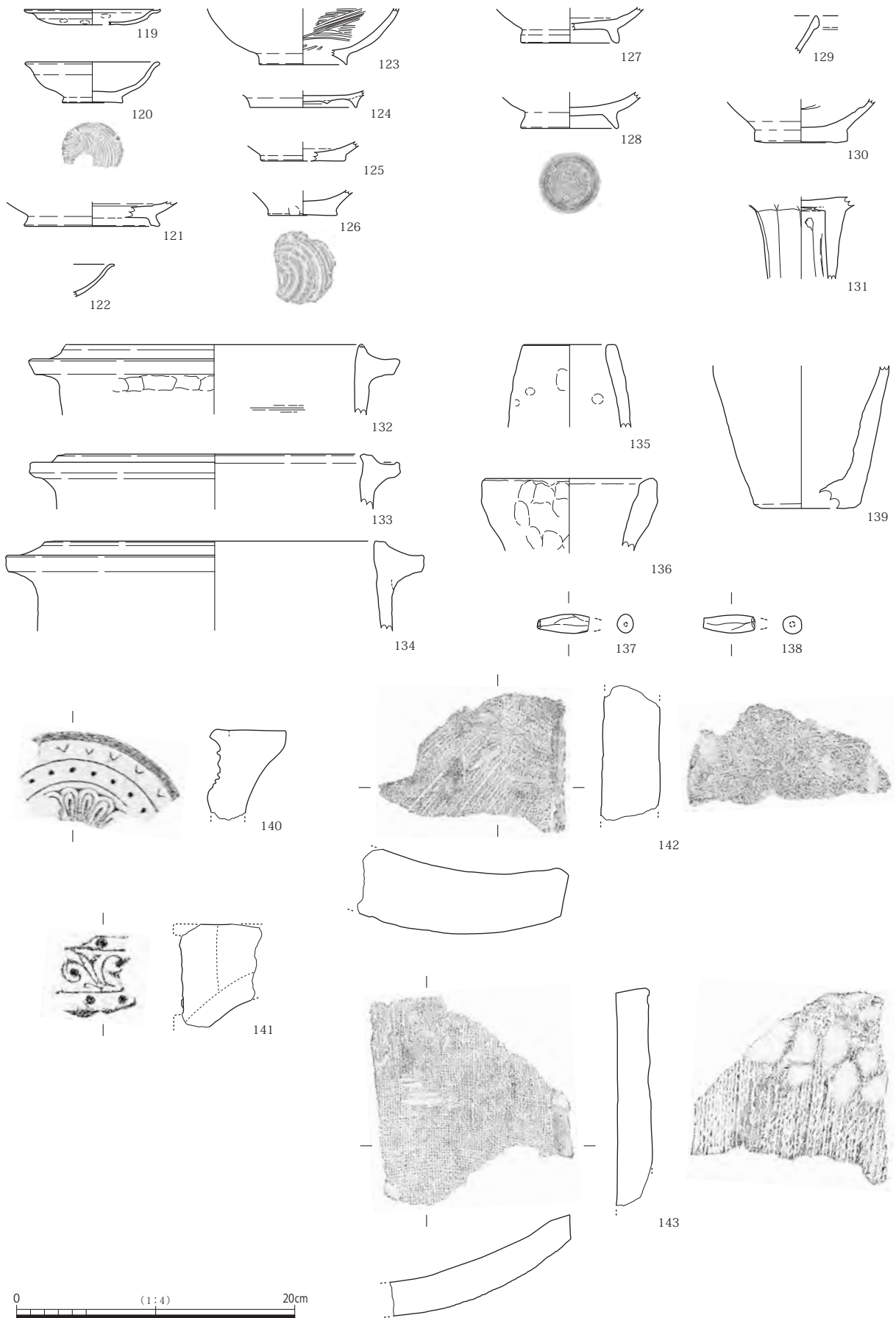


图 48 谷部 第3层 出土遗物 (3)

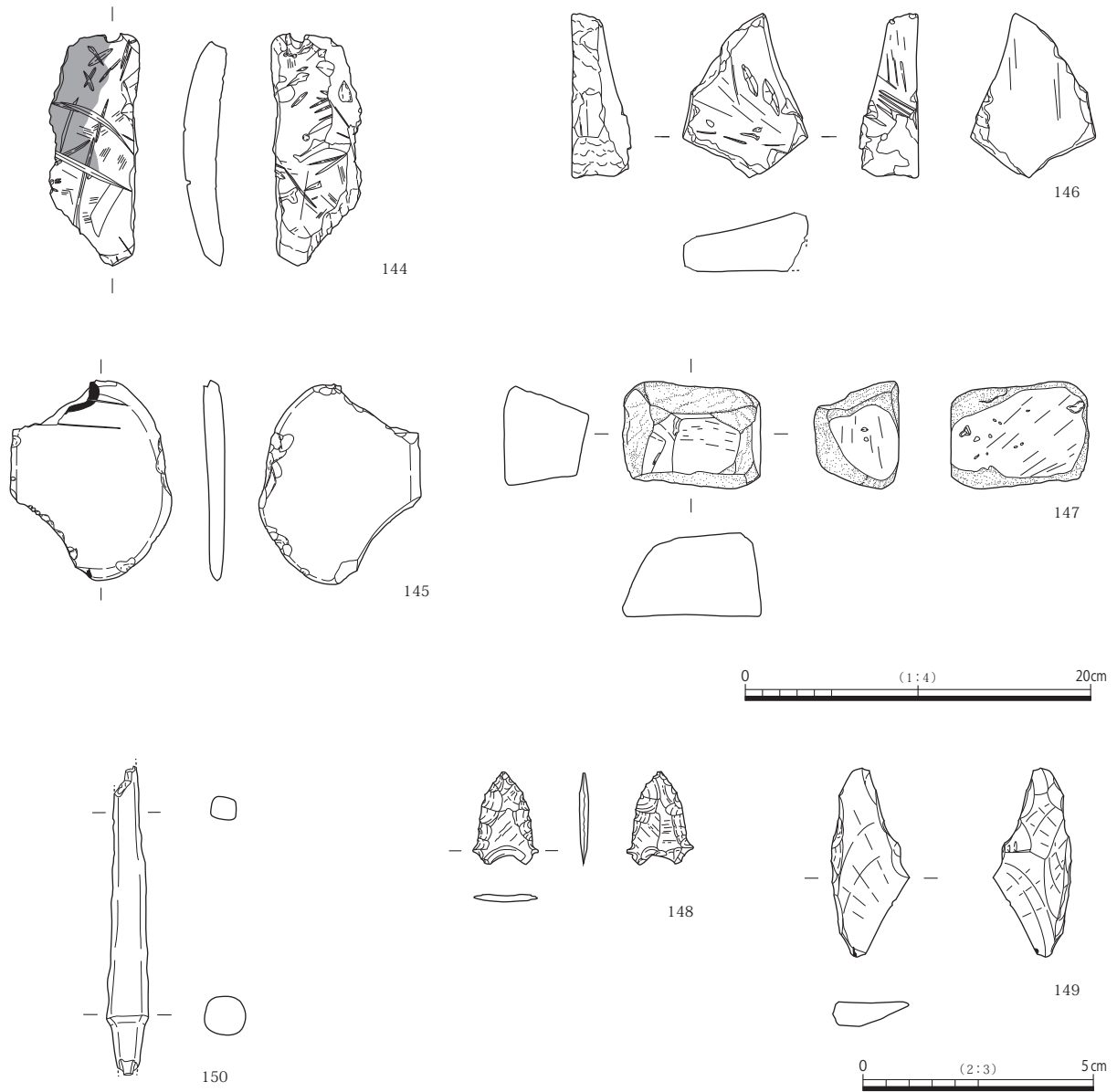


図49 谷部 第3層 出土遺物(4)

径1～1.5m前後のものが多く、また、多少切り合い関係が認められたものの、東西方向に帯状に並ぶように掘削されていた。検出された土坑の中の65土坑は下層で検出された掘立柱建物1と先後関係にあったことから、これらの一連の土坑群は掘立柱建物1の廃絶後に掘削された遺構であると判断した。土坑内から奈良時代の遺物の他に瓦質土器片も出土した。これらの土坑群は既往の調査成果などから考えて、粘土採掘のための土坑と考えられる。

20ピット (図51～53、図版31) X=-135,549.5・Y=-42,251付近に位置する。規模は直径0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は2層で、下層から土師器皿(156)が出土した。156はやや内彎しながら立ち上がり、口縁端部は大きく外反し、内面に面をもつ。

24ピット (図51～53、図版31) X=-135,549.4・Y=-42,253付近に位置する。規模は直径0.2m、深さ0.1mを測る。埋土は単層で、黒色土器(162)が出土した。162は黒色土器B類の椀で、内彎し

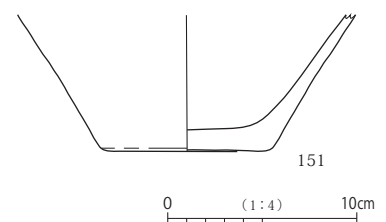


図50 谷部 第4層 出土遺物

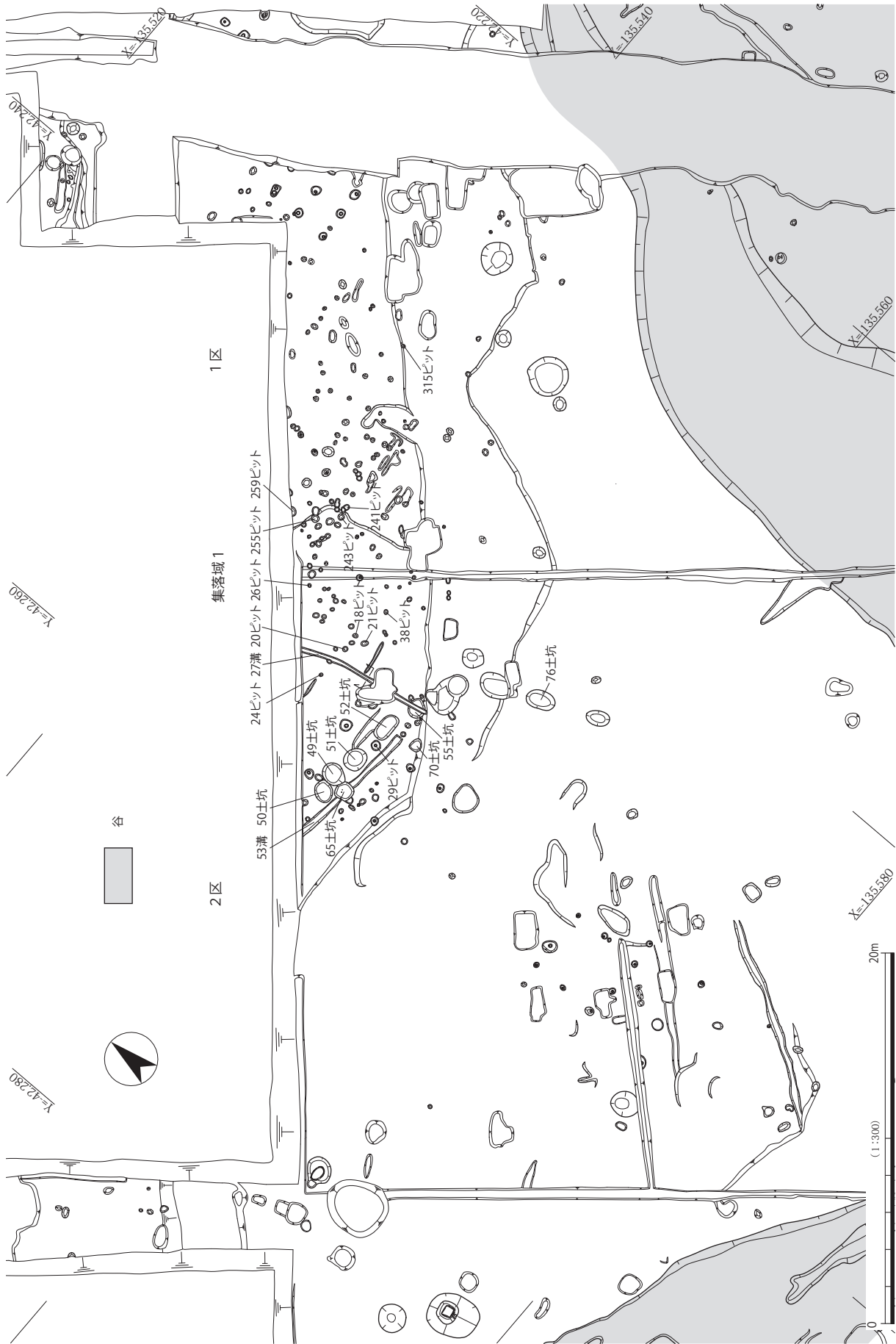
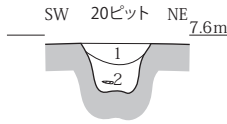
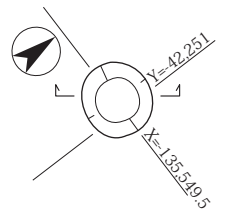
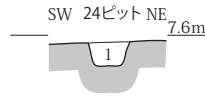
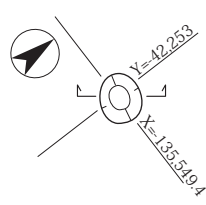


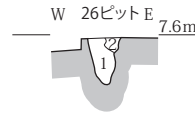
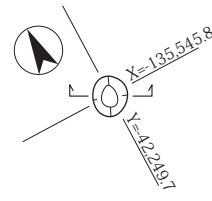
図51 集落域1 (古代末~中世) 平面図



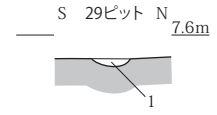
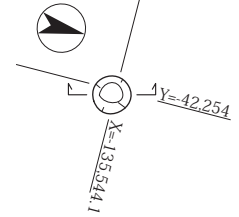
1. 7.5YR6/1 褐灰 極細砂
2. 7.5Y8/3 淡黄 シルトブロックと
7.5YR6/1 褐灰 極細砂の互層



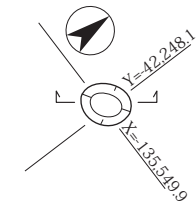
1. 10YR3/2 黒褐 細砂



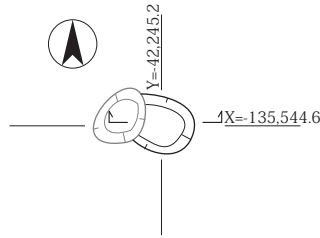
1. 10YR3/2 黒褐 細砂
2. 10YR8/2 灰白 シルトと
10YR3/2 黒褐 細砂の互層



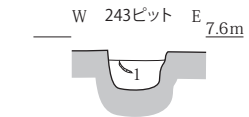
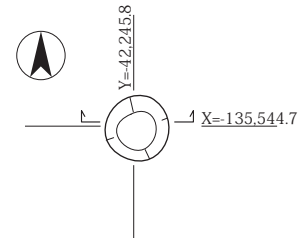
1. 5YR5/1 褐灰 細砂



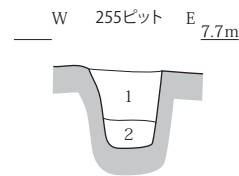
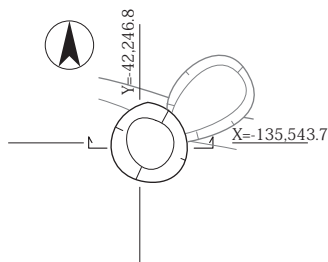
1. 10YR3/2 黒褐 細砂



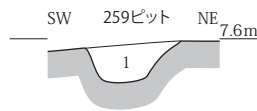
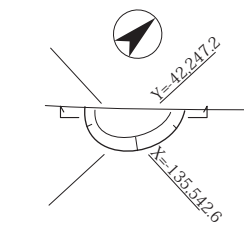
1. 5YR4/1 褐灰 シルト混細砂



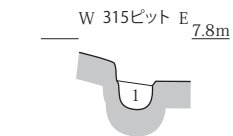
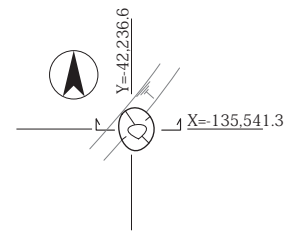
1. 7.5YR2/1 黒褐 シルト混細砂



1. 5YR3/1 黒褐 シルトブロック混極細砂
2. 5YR4/1 褐灰 シルトブロック混細砂



1. 5YR4/1 褐灰 シルトブロック混細砂



1. 7.5YR4/1 褐灰 細砂(炭化物混)



図 52 集落域 1 (古代末~中世) 平・断面図 (1)

ながら立ち上がる。口縁端部内面に沈線状の暗文を施す。11世紀前から中頃に比定される。

26ピット (図51～53、図版31) X=-135,545.8・Y=-42,249.7 付近に位置する。規模は直径0.2 m、深さ0.2 mを測る。埋土は2層で、下層の黒褐細砂内から黒色土器(163)が出土した。163は黒色土器B類の椀で内彎しながら立ち上がる。口縁端部内面に沈線状の暗文を施す。11世紀前から中頃に比定される。

29ピット (図51～53、図版31) X=-135,544.1・Y=-42,254 付近に位置する。規模は直径0.2 m、深さは0.1 m以下であった。埋土は単層で、土師質の土錘(164)が出土した。164は管状土錘で、両端部は紐擦れによる磨滅が認められる。

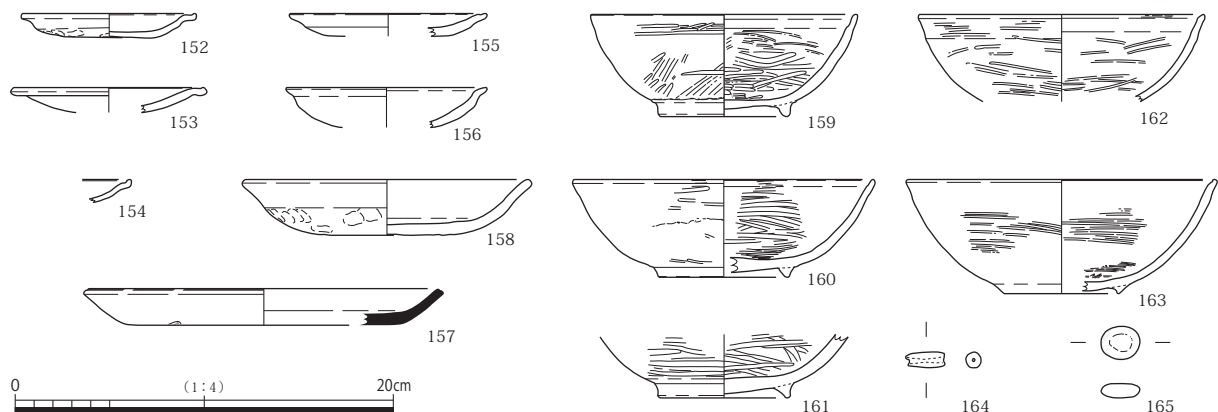
38ピット (図51～53、図版31) X=-135,549.9・Y=-42,248.1 付近に位置する。規模は直径0.3 m、深さ0.2 mを測る。埋土は単層で、須恵器皿片(157)が出土した。157は杯部が上外方にまっすぐ立ち上がり、口縁端部は面をもつ。はやや内彎しながら立ち上がり、口縁端部は大きく外反し、内面に面をもつ。8世紀末から9世紀初頭の所産で、混入遺物と考えられる。

241ピット (図51～53、図版31) X=-135,544.6・Y=-42,245.2 付近に位置する。他の遺構に切られるが、規模は直径0.3～0.4 m、深さ0.2 mを測る。埋土は単層で、土師器皿(154)や黒色土器(159～161)が出土した。154は土師器皿の細片で、いわゆる「て」字状口縁をもつ。159～161は黒色土器A類の椀で、いずれも10世紀後半の所産である。

243ピット (図51～53、図版31・32・44) X=-135,544.7・Y=-42,245.8 付近に位置する。規模は直径0.3 m、深さ0.2 mを測る。埋土は単層で、ほぼ完形の土師器皿(152)が出土した。152いわゆる「て」字状口縁をもつ皿である。10世紀末から11世紀初頭の所産である。

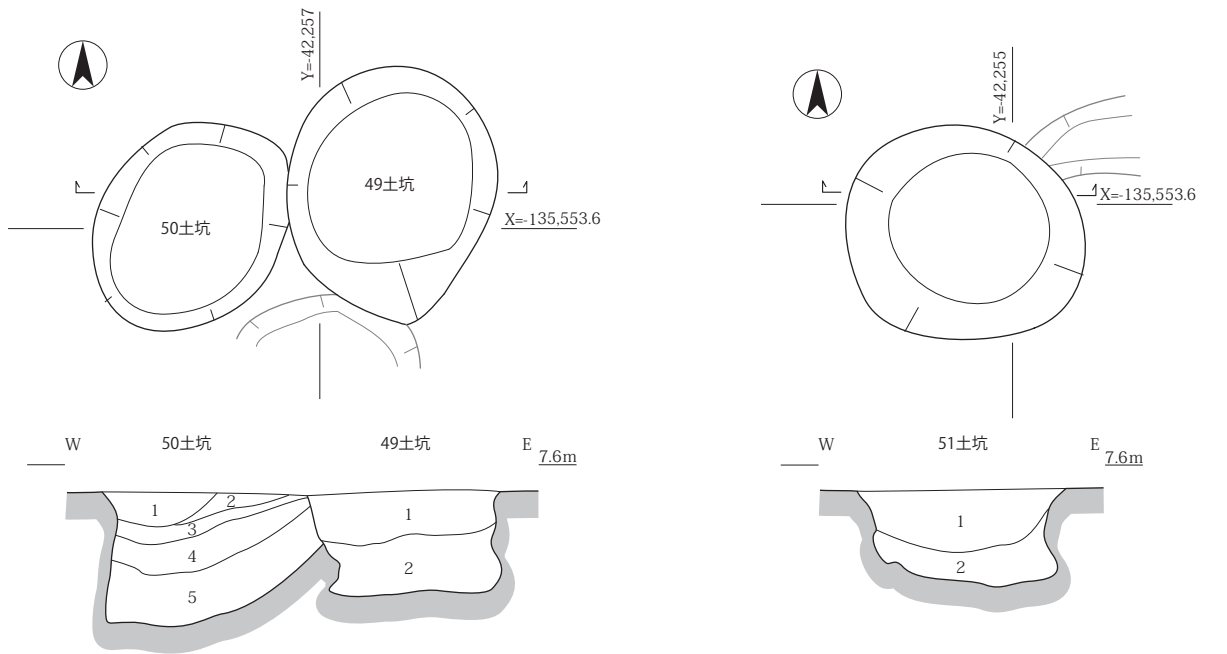
255ピット (図51～53、図版31) X=-135,543.7・Y=-42,246.8 付近に位置する。規模は直径0.4 m、深さ0.4 mを測る。埋土は2層で、上層から土師器(153・158)が出土した。153はいわゆる「て」字状口縁をもつ皿で、10世紀末から11世紀初頭の所産である。158は杯で、8世紀後半から9世紀初頭の所産であることから混入遺物と考えられる。

259ピット (図51～53、図版31・44) X=-135,542.6・Y=-42,247.2 付近に位置する。遺構の西半部は調査区外に延びる。規模は直径0.5 m、深さ0.2 mを測る。埋土は単層で、基石(165)が出土した。165は粘板岩製の基石で黒色を呈する。直径1.8～2.5 cm、厚さ0.8 cm、重さ4.3 gであった。



156 : 20ピット 162 : 24ピット 163 : 26ピット 164 : 29ピット 157 : 38ピット 154・159～161 : 241ピット 152 : 243ピット
153・158 : 255ピット 165 : 259ピット 155 : 315ピット

図53 集落域1 (古代末～中世) 出土遺物 (1)



50土坑

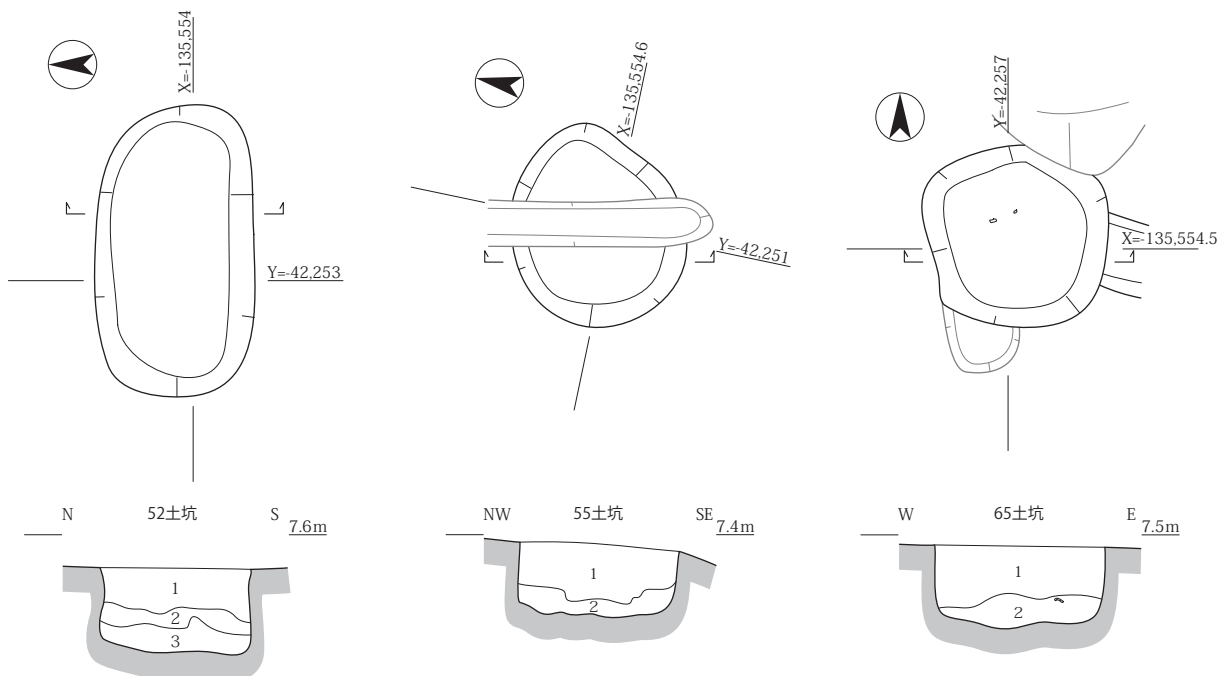
1. 10YR4/2 灰黄褐 細砂
2. 10Y8/2 灰白 シルトブロック
3. 10YR4/2 灰黄褐 極細砂
4. 10YR4/2 灰黄褐 極細砂と
10Y8/2 灰白 シルトブロックの互層
5. 10YR4/2 灰黄褐 極細砂と
10Y8/2 灰白 シルトブロック

49土坑

1. 10YR4/2 灰黄褐 細砂
2. 10YR4/2 灰黄褐 細砂と
10Y8/2 灰白 シルトブロックの互層

1. 10YR4/2 灰黄褐 細砂

2. 10YR4/2 灰黄褐 細砂と
10Y8/2 灰白 シルトブロックの互層



1. 10YR4/2 灰黄褐 細砂と
10Y8/2 灰白 シルトブロックの互層
2. 10Y8/2 灰白 シルトブロック
3. 10YR4/2 灰黄褐 極細砂と
10Y8/2 灰白 シルトブロックの互層

1. 10YR4/2 灰黄褐 極細砂と
10Y8/2 灰白 シルトブロックの互層
2. 10Y8/2 灰白 シルトブロックと
10YR4/2 灰黄褐 細砂ブロックの互層

1. 10YR4/2 灰黄褐 極細砂と
7.5Y8/3 淡黄 シルトブロックの互層
2. 7.5Y8/3 淡黄 シルトブロックと
10YR3/2 黒褐 細砂の互層

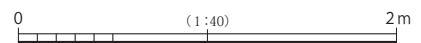


図 54 集落域 1 (古代末~中世) 平・断面図 (2)

315 ピット (図 51 ~ 53, 図版 31) X=-135,541.3・Y=-42,236.6 付近に位置する。規模は直径 0.2 m、深さ 0.6 m を測る。埋土は単層で、下層から土師器皿 (155) が出土した。

49 土坑 (図 51・54・56, 図版 32) X=-135,553.6・Y=-42,257 付近に位置する。集落域 1 の南端部にあたり、50・65 土坑と先後関係にある。平面形は不整な円形で、規模は長径 1.3 m、短径 1.1 m、深さ 0.5 m を測る。断面形は底部がやや広がるフラスコ状を呈する。埋土は 2 層で、上層は細砂が堆積し、下層は細砂とシルトブロックの互層が確認できた。埋土中から須恵器、土師器、瓦の細片が出土したが、図示できたのは 2 点のみであった。167 は須恵器杯である。8 世紀後半に属する。169 は平瓦である。凸面には縄目タタキが、凹面には布目痕が残る。遺物は 2 点とも混入と考えられる。

50 土坑 (図 51・54) 49 土坑の西に隣接し、かつ、49 土坑に切られる。平面形は不整な円形で、規模は長径 1.2 m、短径 1.0 m、深さ 0.7 m を測る。埋土は 5 層で、下層の 2 層はシルトブロックを含む土層が堆積する。断面観察の結果、東側から埋め戻されたと考えられる。遺物は 11 世紀に属する須恵器、土師器、製塩土器の細片が出土したが、図示し得なかった。

51 土坑 (図 51・54) 49 土坑の東約 0.3 m に位置する。平面形は不整な円形で、規模は長径 1.3 m、短径 1.1 m、深さ 0.5 m を測る。埋土は 2 層で、下層はシルトブロックを含む土層が堆積する。遺物は須恵器、土師器の細片が出土したが、図示し得なかった。

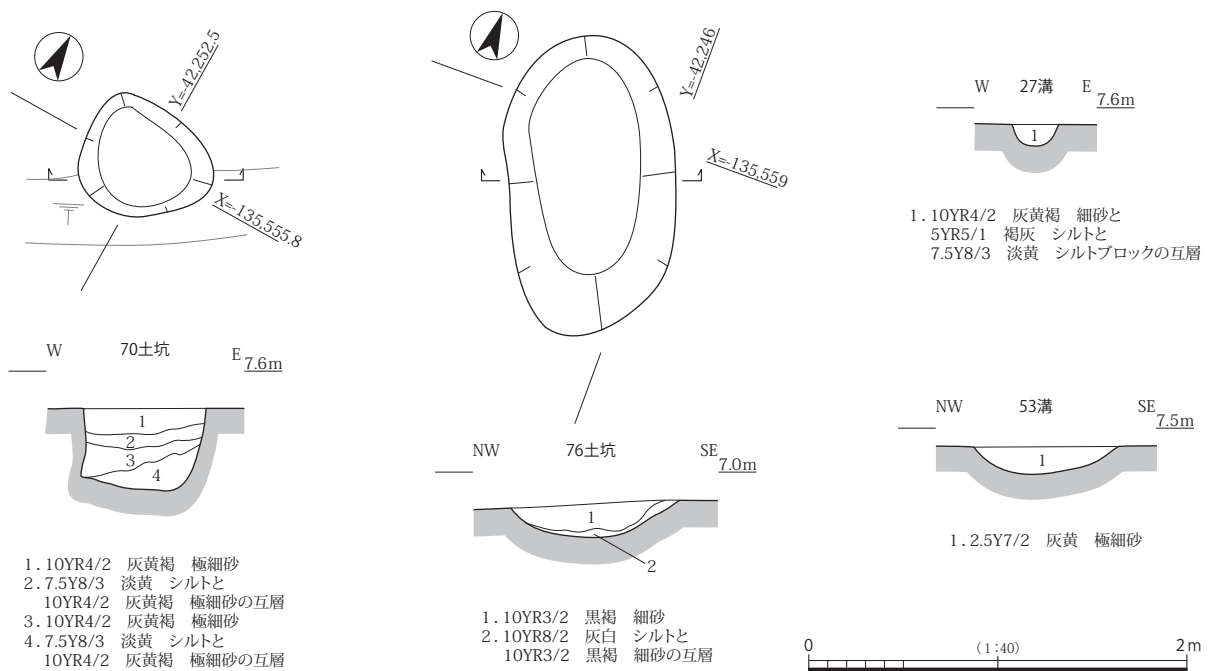


図 55 集落域 1 (古代末~中世) 平・断面図 (3)

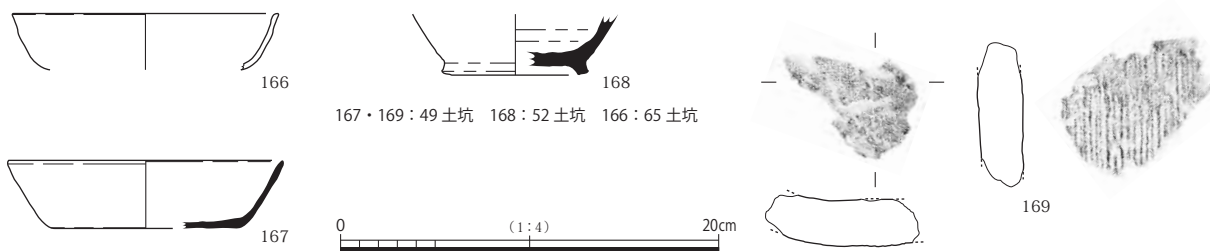
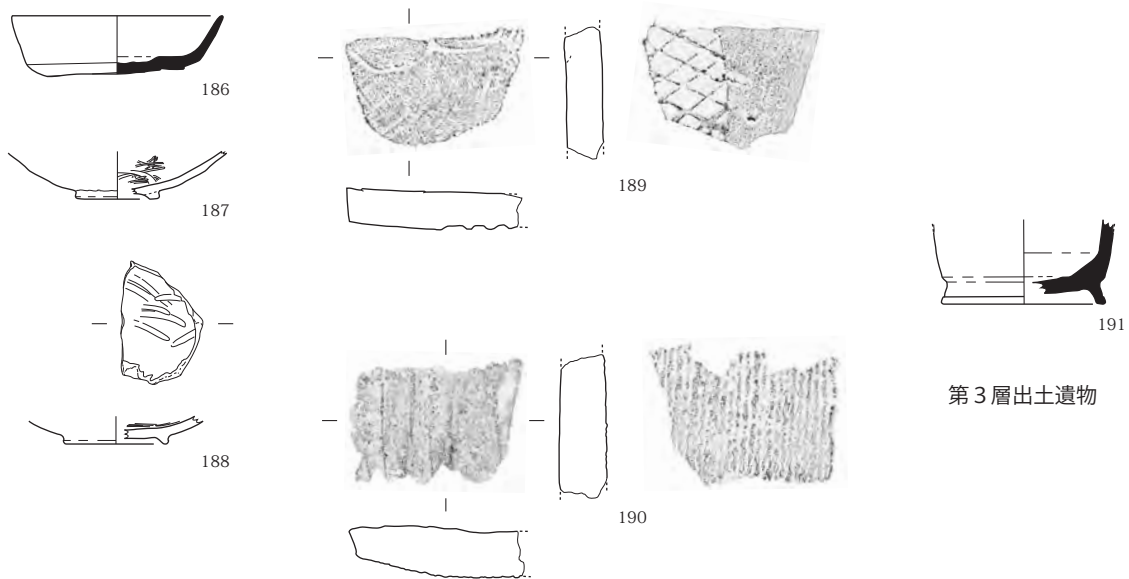
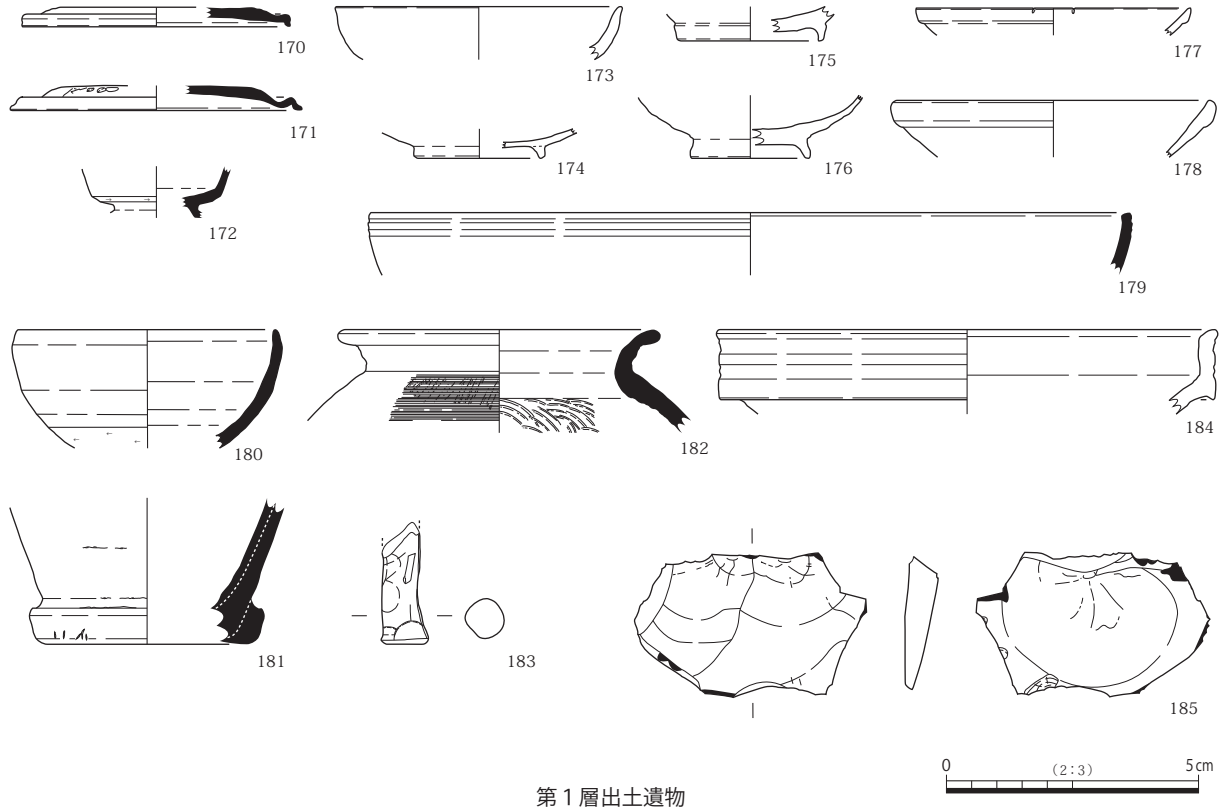


図 56 集落域 1 (古代末~中世) 出土遺物 (2)

52 土坑 (図 51・54・56、図版 32) 51 土坑の東約 1 m に位置する。平面形は不整な楕円形で、規模は長径 1.5 m、短径 0.9 m、深さ 0.4 m を測る。埋土は 3 層で、全てにシルトブロックを含む土層が堆積する。埋土中から須恵器や土師器の細片が出土したが、図示できたのは 1 点のみであった。168 は須恵器壺底部である。8 世紀の所産である。



第 2 層出土遺物

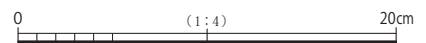


図 57 集落域 1 (古代末~中世) 包含層 出土遺物

55 土坑 (図 51・54、図版 33) 52 土坑の東約 0.6 m に位置する。平面形は不整な円形で、規模は長径 1.1 m、短径 0.9 m、深さ 0.4 m を測る。埋土は 2 層で、2 層ともシルトブロックを含む土層が堆積する。遺物は須恵器、土師器、瓦質土器の細片が出土したが、図示し得なかった。

65 土坑 (図 51・54・56、図版 33) 49 土坑の南に隣接し、かつ、49 土坑に切られる。なお、この 65 土坑は先述したように下層で検出した掘立柱建物 1 を切っていた。平面形は不整な方形を呈しており、一辺 1.0 m、深さ 0.4 m を測る。埋土は 2 層で、どちらもシルトブロックを含む層であった。下層から須恵器、土師器、鉄製釘の細片が出土したが、図示できたのは土師器 1 点のみであった。166 は土師器皿である。8 世紀後半に属する。

70 土坑 (図 51・55、図版 33) 52 土坑の南約 1.2 m に位置する。平面形は不整な円形を呈し、規模は長径 0.7 m、短径 0.6 m、深さ 0.4 m を測る。最下層と下から 3 層目はシルトブロックを含む層であった。遺物は須恵器、土師器、製塩土器の細片が出土したが、図示し得なかった。

76 土坑 (図 51・55) 微高地上から一段下がった、70 土坑の東約 6 m に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長径 1.6 m、短径 0.9 m を測る。検出面からの深さは 0.2 m しかなく、これは、後世の耕作地化に伴って微高地が削平を受けたためと考えられる。遺構の埋土は 2 層で、下層はシルトブロックを含む層であった。遺物の出土はなかった。

27 溝 (図 51・55) Y=-42,252 ライン付近をほぼ南北方向にはしるが、軸は N-13°-W とやや西に指向する。また、溝の北端部は調査区外に延び、南端部は後世の耕作地化に伴う削平によって失われる。規模は幅 0.2 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は単層で、細砂・シルトとシルトブロックの互層であった。須恵器や土師器の細片が出土したが、図示し得る遺物はなかった。

53 溝 (図 51・55) X=-135,555 ライン付近をほぼ東西方向にはしるが、軸は N-85°-W であった。溝の西端部は調査区外に延び、東端部は X=-135,555・Y=-42,254 付近で収束する。規模は幅 0.5 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は単層で極細砂層であった。須恵器や土師器の細片が出土したが、図示し得る遺物はなかった。

包含層出土遺物 (図 57、図版 44) 微高地上に堆積する第 1～3 層からはそれぞれ須恵器、土師器、灰釉陶器、白磁、瓦質土器、瓦器、陶器、瓦などの遺物が出土した。

第 1 層 (図 57) 170・171 は須恵器杯 B 蓋である。171 は転用硯で、内面が磨耗する。172 は須恵器杯 B である。173 は土師器杯 G である。174～176 は灰釉陶器である。174 は皿、175・176 は椀の底部である。177・178 は白磁碗である。179 は須恵器の皿もしくは鉢杯部である。口縁端部下に 2 条の沈線が巡る。180 は須恵器鉢体部である。内彎しながら立ち上がる。181 は須恵器すり鉢である。182 は須恵器甕である。183 は瓦質の火鉢の脚部か。184 は備前焼すり鉢である。15 世紀中頃の所産である。185 はサヌカイト製剥片である。

第 2 層 (図 57、図版 44) 186 は須恵器杯 A である。187・188 は瓦器椀底部である。13 世紀の所産である。189・190 は平瓦である。189 は凸面に斜格子目タタキが、凹面には布目痕と粘土板整形時の糸切り痕跡が残る。須恵質で堅緻な焼成である。190 は凸面に縄目タタキ、凹面に模骨痕跡と布目痕が残る。

第 3 層 (図 57) 191 は須恵器壺 L 底部である。

(2) 集落域 2 (図 58～67、図版 34～36)

集落域 2 は谷の南側の微高地上にあたり、1 区東半部と 2 区の一部に位置する。この集落域 2 が展開

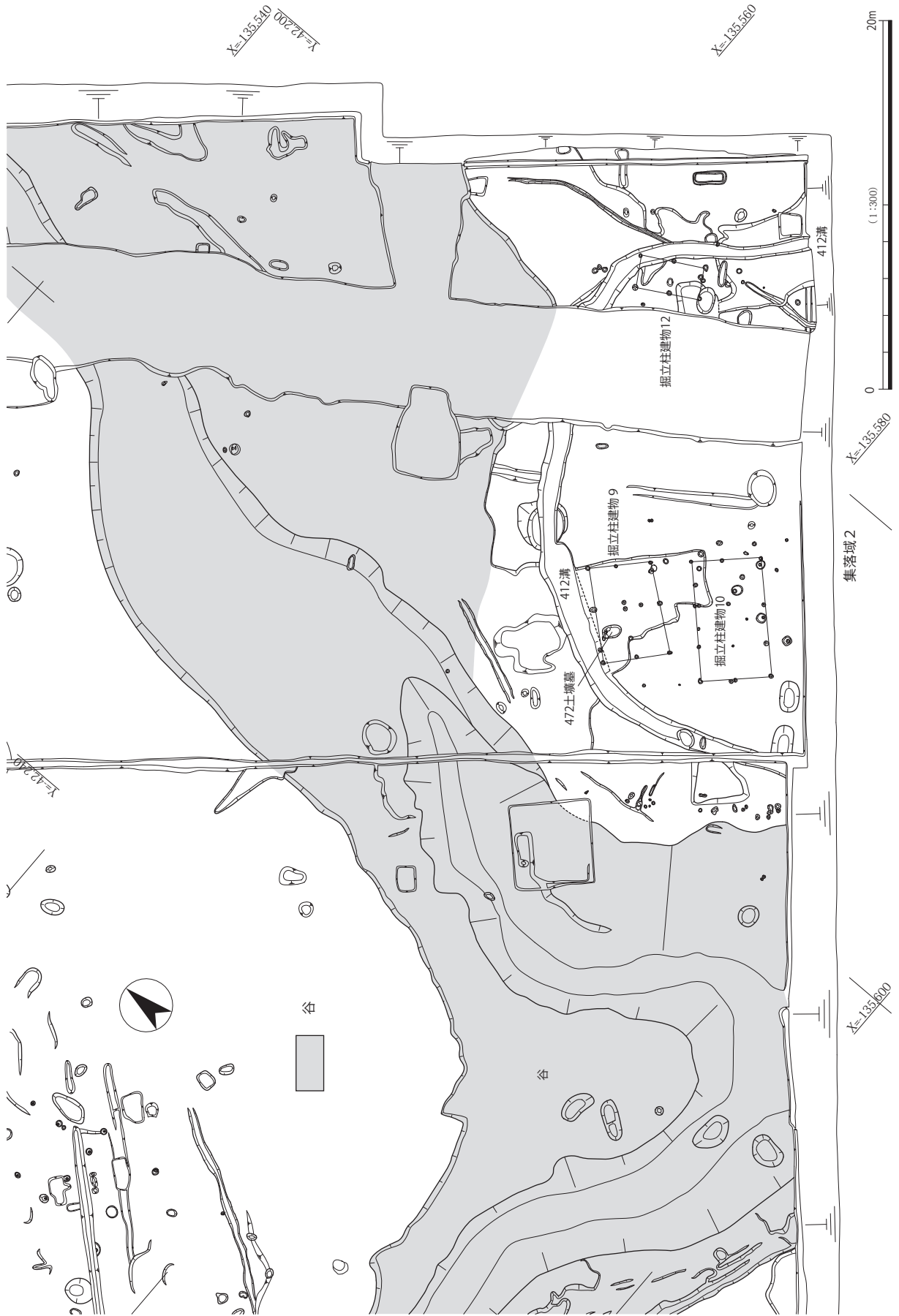


图 58 集落域 2 (古代末~中世) 平面图

する微高地は、さらに東側と北側の調査区外に広がる。第3節2でも述べたが、この遺構面は、旧耕作土層直下で検出した1区の北東隅部以外は第1・2層を除去して検出した。検出した遺構は掘立柱建物、ピット、土坑、土壙墓、溝などであった。掘立柱建物は3棟検出したが、いずれも北西-南東方向に軸をもっており、古代の建物群とは大きく方向を違って建てられていた。また、土壙墓については弥生土器を包含する437落込み完掘後に検出してしまったため正確なところは不明であるが、出土遺物や検出状況などを勘案して、掘立柱建物9が廃絶した後に掘り込まれたものと考えられる。また、微高地上を取り囲むように巡る412溝は、出土遺物から472土壙墓より古く、切り合い関係から掘立柱建物9や12よりも新しいことが判明したが、その性格については不明であるものの、集落に伴う区画溝であることが想定される。

掘立柱建物9 (図58～60、図版34) 集落域2で検出された掘立柱建物3棟のうち、最も微高地の南西隅に位置する。北東-南西方向に長軸をもつ桁行2間(5.0～5.2m)×梁間2間(3.4～3.6m)の建物である。建物の長軸はN-41°-Eを指向する。柱の掘方は直径0.2～0.4mを測る円形もしくは楕円形である。柱痕跡は391・

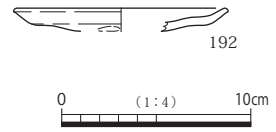


図59 416柱穴 出土遺物

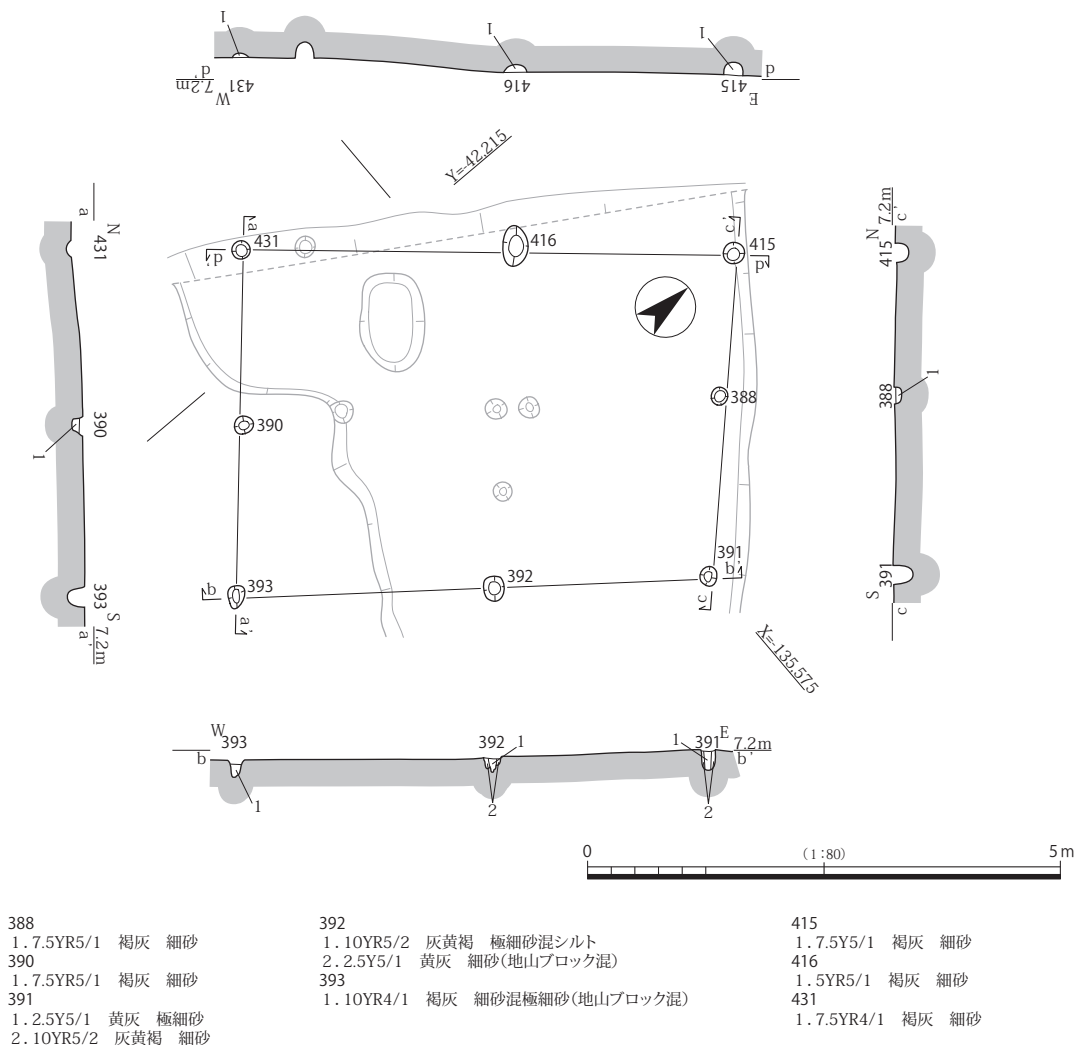


図60 掘立柱建物9 平・断面図

392 柱穴で確認でき、直径は 0.1 m であった。また、遺物は 416 柱穴から出土した土師器皿（192）以外に、388・390 柱穴から土師器、須恵器、瓦器碗の細片が出土した。192 は土師器皿である。11 世紀末から 12 世紀初頭に属すると考えられる。

掘立柱建物 10（図 58・61、図版 34） 掘立柱建物 9 の南東約 2 m に位置する。建物の北東辺を掘立柱建物 9 に揃えて建てられていた。北東－南西方向に長軸をもつ桁行 3 間（6.4 ～ 6.6 m）× 梁間 2 間（3.8 m）の建物である。建物の長軸は N－46°－E を指向する。柱の掘方は直径 0.2 m を測る円形である。柱痕跡が残っていたのは、394・397・405 柱穴の隅柱のみで、直径は 0.1 m であった。遺物は 397・401 柱穴から須恵器、土師器、黒色土器の細片が出土したが、いずれも混入と考えられる。

掘立柱建物 12（図 58・62、図版 34） 掘立柱建物 9 の北東約 15 m に位置する、北西－南東方向に軸をもつ桁行 2 間（3.6 m）× 梁間 1 間（1.8 m）の建物である。建物の長軸は N－31°－W を指向する。柱の掘方は直径 0.2 ～ 0.3 m を測る円形である。柱痕跡が残っていたのは、453・455 柱穴の隅柱のみで、直径は 0.1 m であった。遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、建物の方向や柱穴の規模などから、中世に属する建物と考えられる。

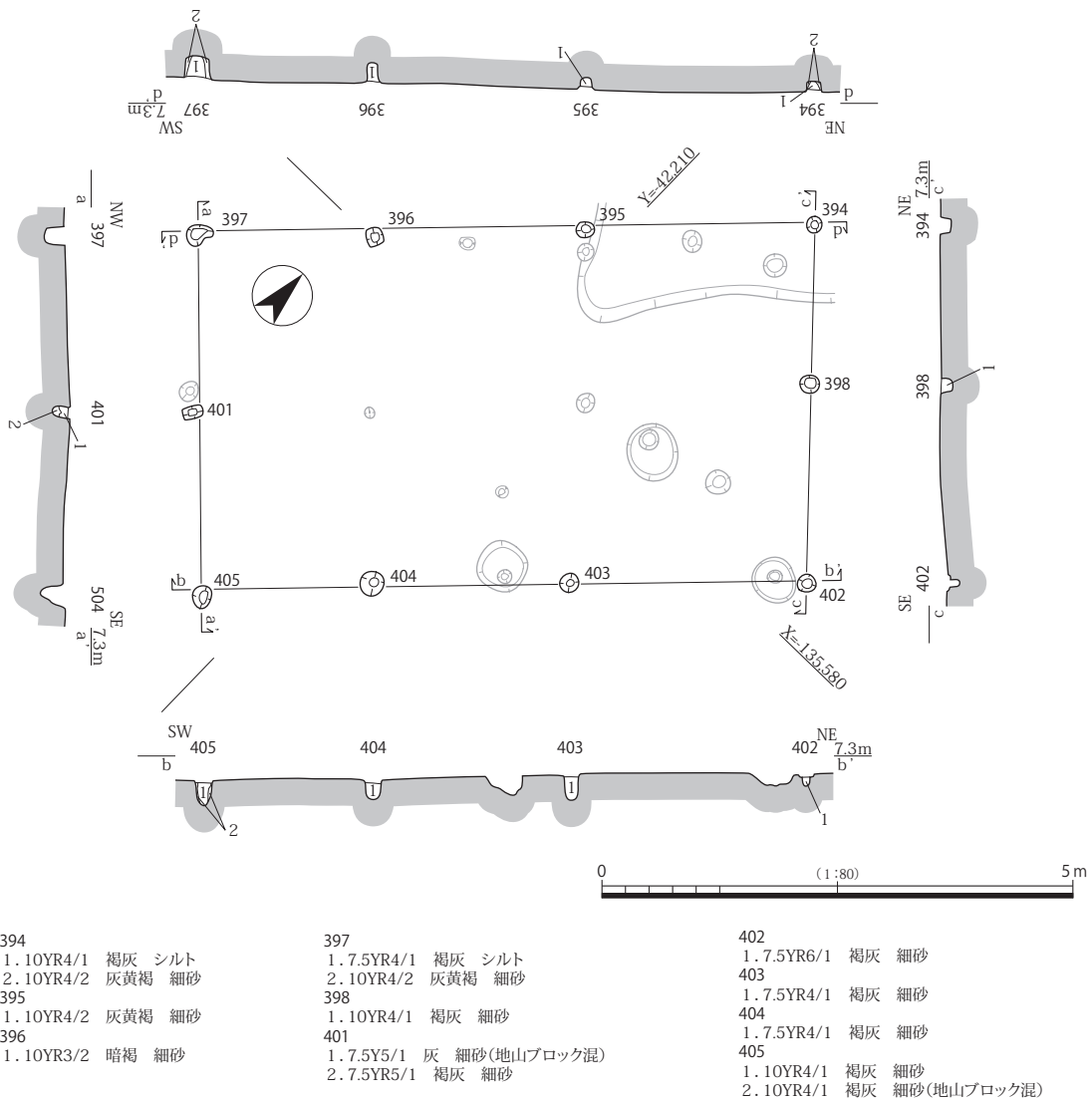
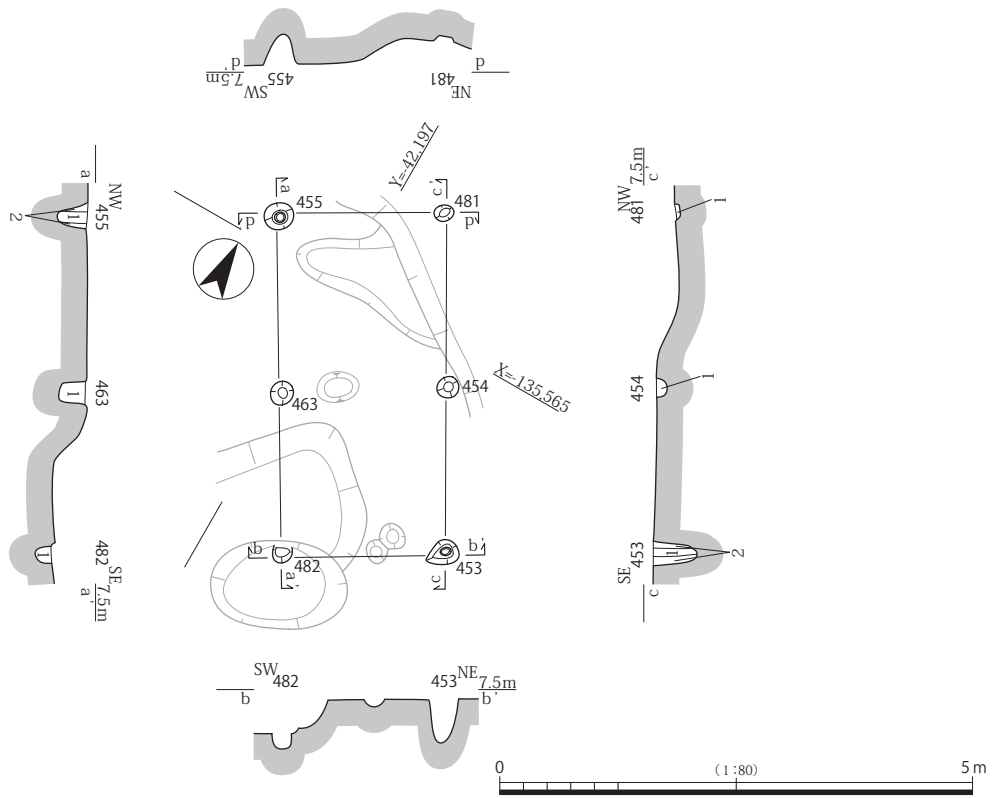


図 61 掘立柱建物 10 平・断面図

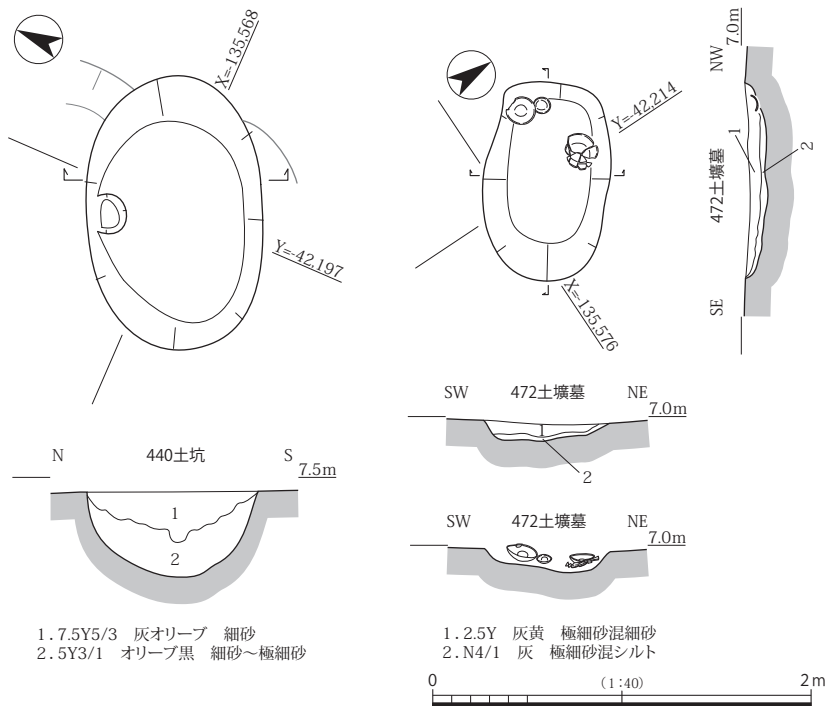


453
 1. 5Y3/2 オリーブ黒 シルト
 2. 7.5Y4/2 灰オリーブ 極細砂
 454
 1. 7.5Y4/2 灰オリーブ 極細砂

455
 1. 7.5Y3/2 オリーブ黒 極細砂
 2. 7.5Y4/2 灰オリーブ 極細砂
 463
 1. 7.5Y4/2 灰オリーブ 極細砂

481
 1. 7.5Y5/1 灰 細砂(粗砂混)
 482
 1. 7.5Y5/1 灰 細砂(粗砂混)

図 62 掘立柱建物 12 平・断面図



1. 7.5Y5/3 灰オリーブ 細砂
 2. 5Y3/1 オリーブ黒 細砂~極細砂

1. 2.5Y 灰黄 極細砂混細砂
 2. N4/1 灰 極細砂混シルト

図 63 440 土坑、472 土墳墓 平・断面図

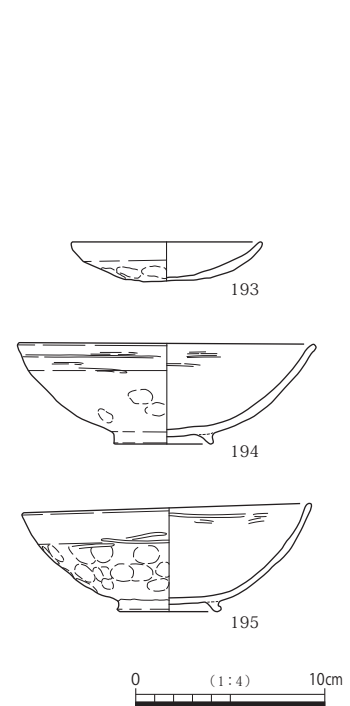


図 64 472 土墳墓 出土遺物

440 土坑 (図 58・63、図版 35) 調査区南東部に位置する。441 土坑の埋没後、さらに掘立柱建物 12 の廃絶後に掘削される。平面形は不整な楕円形を呈し、長径 1.4 m、短径 0.9 m、深さ 0.4 m を測る。埋土は 2 層で、上層は灰オリーブ細砂、下層はオリーブ黒細砂～極細砂であった。下層から須恵器、土師器の細片とともに、唐津窯皿や瀬戸窯皿が出土した。

472 土墳墓 (図 58・63・64、図版 35・44) X=-135,576・Y=-42,214 付近で検出した。掘立柱建物 9 の南西部に位置するが、出土遺物から掘立柱建物 9 廃絶後に造られたと考えられる。墓壇の主軸は北西-南東方向で、N-56°-W を指向する。平面形は隅丸長方形で、規模は長辺 1.0 m、短辺 0.6 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は 2 層であったが、木棺の痕跡は確認できなかったため土墳墓と判断した。遺物は頭位と考えられる西隅から土師器皿 1 点 (193) と瓦器椀 1 点 (194) が、墓壇の中央寄東辺から瓦器椀 1 点 (195) が出土した。193 は土師器皿である。完形品で直径 10.0 cm、器高 2.1 cm を測る。13 世紀に属すると考えられる。194・195 は瓦器椀である。194 は完形品で、13 世紀中頃の所産である。195 は口縁の一部を欠くもののほぼ完形で、13 世紀中頃の所産である。

412 溝 (図 58・65・66、図版 36) 谷部に沿って微高地上を取り囲むように「コ」字状に巡る溝である。規模は幅 1.0 m、深さ 0.2 m を測る。「コ」字状に囲われた範囲は 28 m × 13 m 以上で、東半部は調査区外に延びる。掘立柱建物 9・12 や 413・414 井戸の廃絶後に掘削される。埋土は単層で、須恵器、土師器、瓦器の細片が出土したが、図示できたのは 1 点であった。196 は瓦器椀である。底部を欠く。溝の上層から出土した。11 世紀後半の所産である。

包含層出土遺物 (図 67、図版 44) 集落域 2 の北東部は旧耕作土層直下で地山面を検出したが、それ以外は第 1・2 層の堆積が確認できた。出土した遺物は弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器類であったが、いずれも細片だったことから図示し得たものはいずれも下層からの捲き上げか、混入による遺物であった。

第 1 層 (図 67) 197 は須恵器甕もしくは壺の口縁部である。7 世紀前半の所産である。

第 2 層 (図 67、図版 44) 198 は弥生土器甕もしくは壺の底部である。磨滅が著しく調整は不明である。弥生時代後期に属すると考えられる。

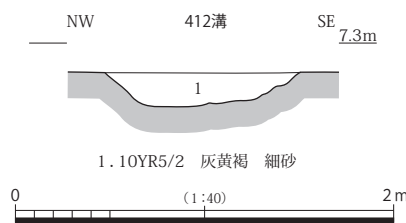


図 65 412 溝 断面図

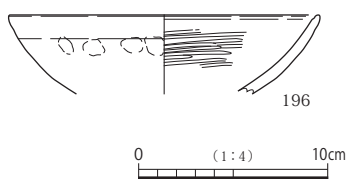
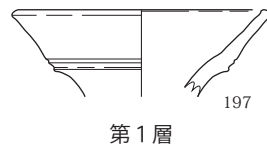
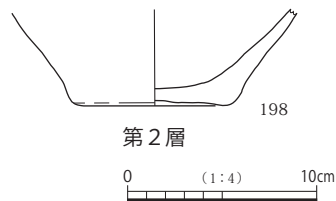


図 66 412 溝 出土遺物



第 1 層



第 2 層

図 67 集落域 2 (古代末～中世) 包含層 出土遺物

(3) 集落域3 (図 68～71、図版 36)

集落域3は谷の南側に展開する微高地にあたるが、古代の遺構が検出された微高地の東半部からは古代末から中世の遺構は検出されなかった。微高地の西半部においても掘立柱建物などの顕著な遺構は検出されなかったが、調査区の南西隅で池と考えられる遺構を検出した。調査区は外構部分に該当していたため6×10mの範囲を調査した結果、池の一部を検出した。

116池 (図 68～70、図版 36) 前述したように、狭い範囲の調査区で検出されたため、池の全貌は不明である。池は北東—南西方向に軸をもち、検出した範囲での規模は北東—南西幅4m以上、北西—南東幅7.5m、深さ0.7m以上であった。断面観察の結果、埋土は池の両岸部分は地山シルトを含むブロック土で埋められた痕跡が確認できたが、中央部分は粗砂～中砂層

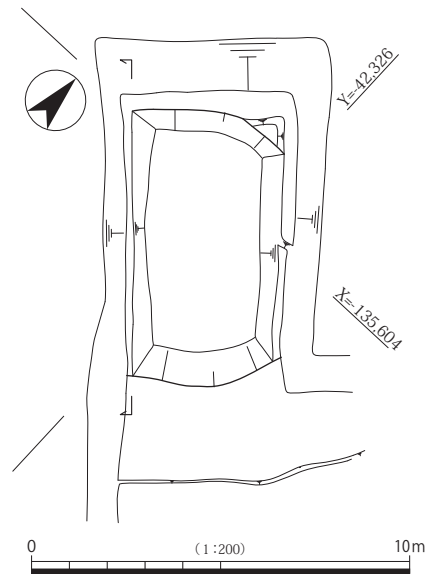


図 68 116池 平面図

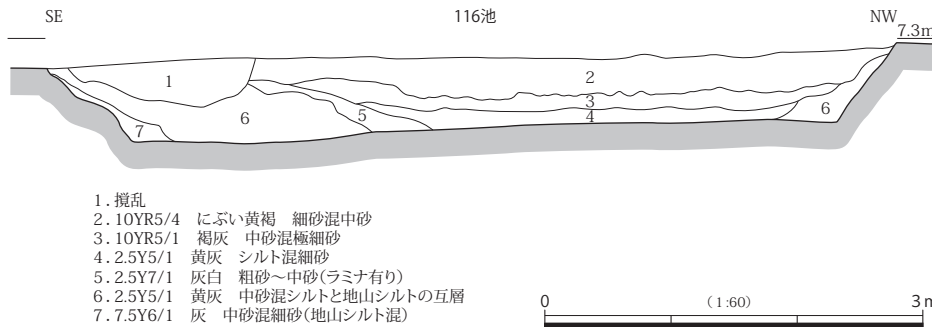


図 69 116池 断面図

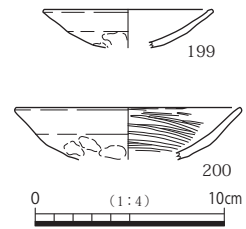


図 70 116池 出土遺物

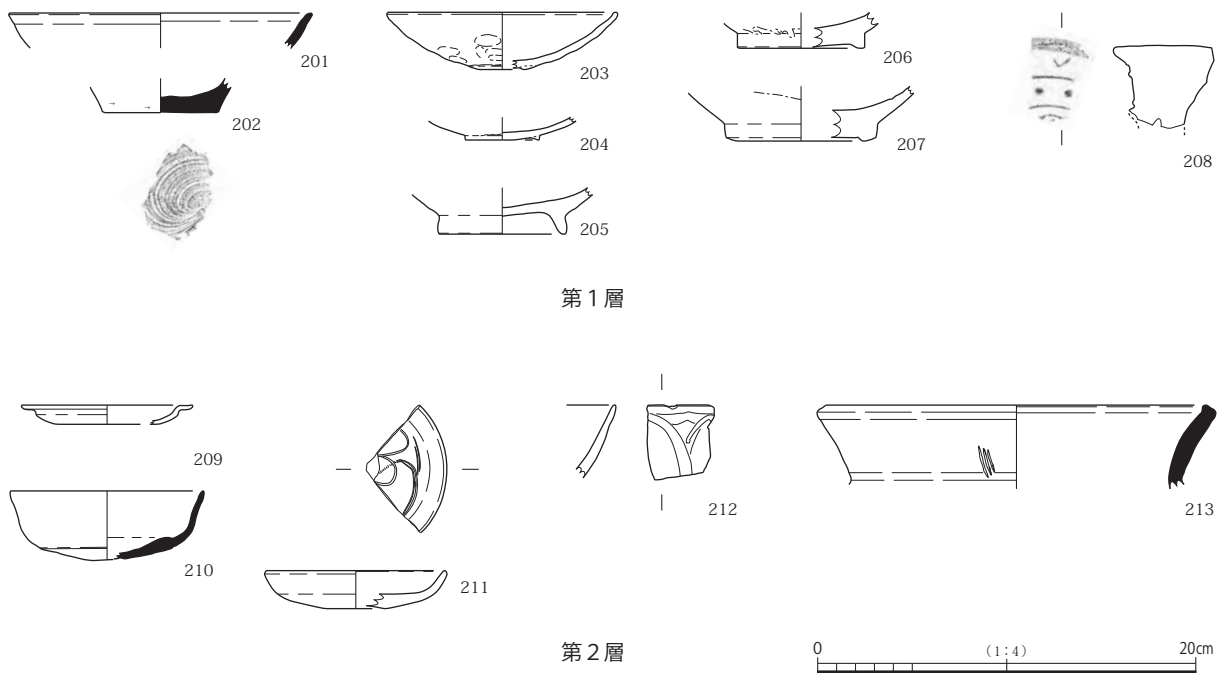


図 71 集落域3 (古代末～中世) 包含層 出土遺物

のラミナが確認できるなど自然堆積層であった。工事の影響範囲の関係上、標高 6.6 m までしか掘り下げられなかったため、池の底は確認できなかった。遺物は須恵器、土師器、瓦質土器、瓦器が出土したが、図示できたのは瓦器 2 点のみであった。199・200 は瓦器小皿で、13 世紀後半の所産と考えられる。**包含層出土遺物** (図 71) 谷の南側で検出した微高地西半部は、旧耕作土層直下で地山面を検出したため遺物の出土はなかったが、集落域 3 が存在する微高地東半部については第 1・2 層の包含層の堆積が認められ、須恵器、土師器、瓦器、灰釉陶器、青磁、白磁、瓦などの遺物が出土した。

第 1 層 (図 71) 201 は須恵器杯である。202 は須恵器壺底部である。底部外面には糸切痕が残る。203・204 は瓦器碗である。13 世紀後半の所産である。205 は灰釉陶器の碗底部である。9 世紀後半から 10 世紀前半に属すると考えられる。206・207 は白磁碗底部である。208 は難波宮 6303 型式の軒丸瓦である。七尾瓦窯で焼成されたと考えられ、8 世紀中頃の産である。

第 2 層 (図 71) 209 は土師器皿である。210 は須恵器杯 G である。211・212 は龍泉窯系の青磁小皿と碗である。12 世紀後半から 13 世紀前半に属する。213 は須恵器甕口縁部である。頸部外面にヘラ記号が残る。

第 2 節 5 区

1. 概要

5 区は 1～4 区の南西約 5 m に位置する、約 20 m × 6 m のトレンチである。当該区は、中世以降に耕作地として平坦化がなされたため、切土・盛土作業が行われており、北辺部から南東 7.5 m の地点で 0.4 m の段差を有して下がる。層序の堆積が認められたのは上段部のみで、下段部は旧耕作土層直下で地山面 (第 4 層下面) を検出した。

2. 基本層序 (図 72、図版 36)

上述したように、中世以降の耕地化により層序の堆積が認められたのは北半部のみであったが、古代以前の包含層である第 3・4 層についても、耕作時の攪拌もしくは削平によって失われたと考えられ、当該区では第 1・2 層の堆積のみが認められた。

第 1 層 中世以降の耕作土層で、2 層に細分できる。上層は灰黄中砂混シルト層で、下層はにぶい黄細砂混シルト層である。

第 2 層 古代末から中世の包含層で、灰粗砂・中砂混シルト層である。第 1 層の耕作による削平が顕著で、層厚は 0.1 m 以下であった。

3. 調査成果 (図 73、図版 37)

旧耕作土層を重機で除去した後、人力掘削を開始した。中世以降の耕作土層および古代末から中世の包含層を除去して、第 4 層下面を検出した。上・下段部ともに顕著な遺構は検出されなかったが、段に沿ってはしる落込み状の溝 (6 溝) を 1 条検出した。また、遺物は包含層中から須恵器・土師器・黒色土器の細片が少量出土した。

6 溝 (図 73・74) 規模は幅 2.8 m、深さ 0.3 m を測り、調査区西端付近で収束する。埋土は極粗砂・中砂混シルト層の単層であった。6 溝は近・現代の耕作時の削平により帰属面を特定することはでき

なかったが、唐津焼の碗底部が1点（214）出土したことから16世紀後半以降の遺構と考えられる。214は削り出し高台をもち、見込部には胎土目が残る。

第1層出土遺物（図75） 215は黒色土器A類の底部である。10世紀の所産と考えられる。

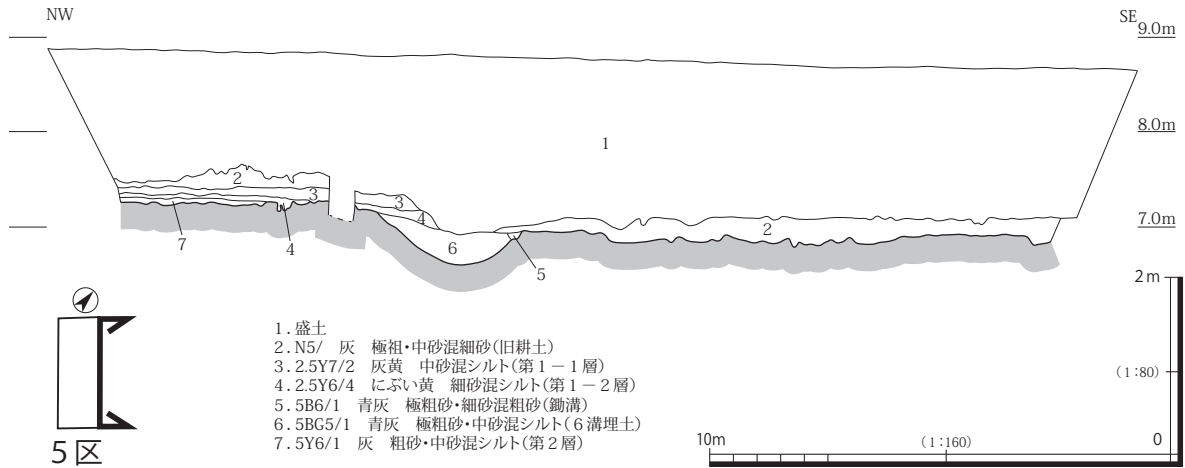


図72 5区東壁 断面図

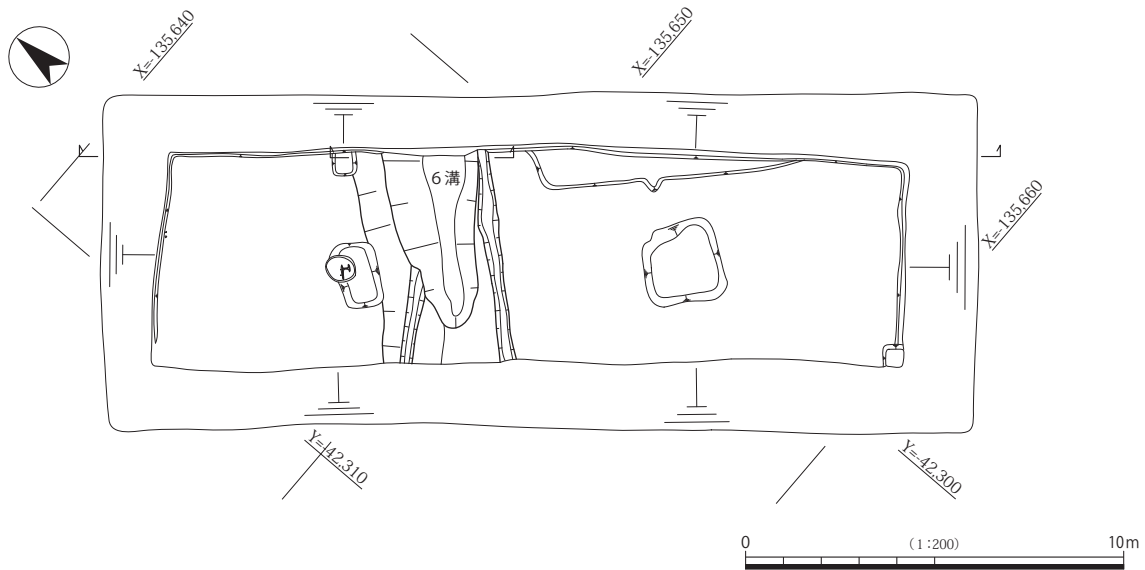


図73 5区 平面図

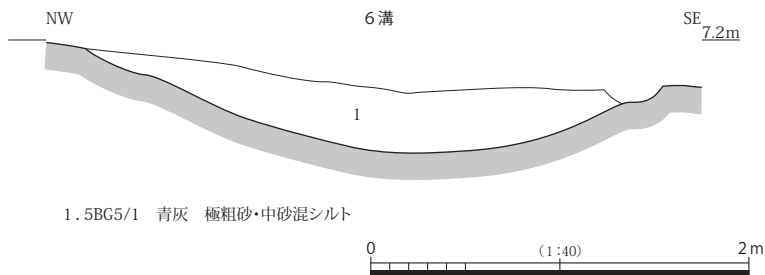


図74 6溝 断面図

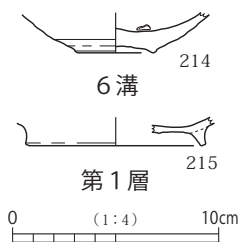


図75 5区 出土遺物

第3節 6区

1. 概要

6区は1～4区の南西約30mに位置する、約54m×20mのトレンチであるが、調査区の南東半部は攪乱による削平を受けていた。

第4層下面では、少なくとも古墳時代には存在する谷と、七尾瓦窯で焼成された瓦片が出土した土坑などを検出したが、総じて遺構は少なかった。

2. 基本層序 (図76、図版37)

第1-1層 浅黄細砂混シルトである。マンガン斑の沈着が著しい。

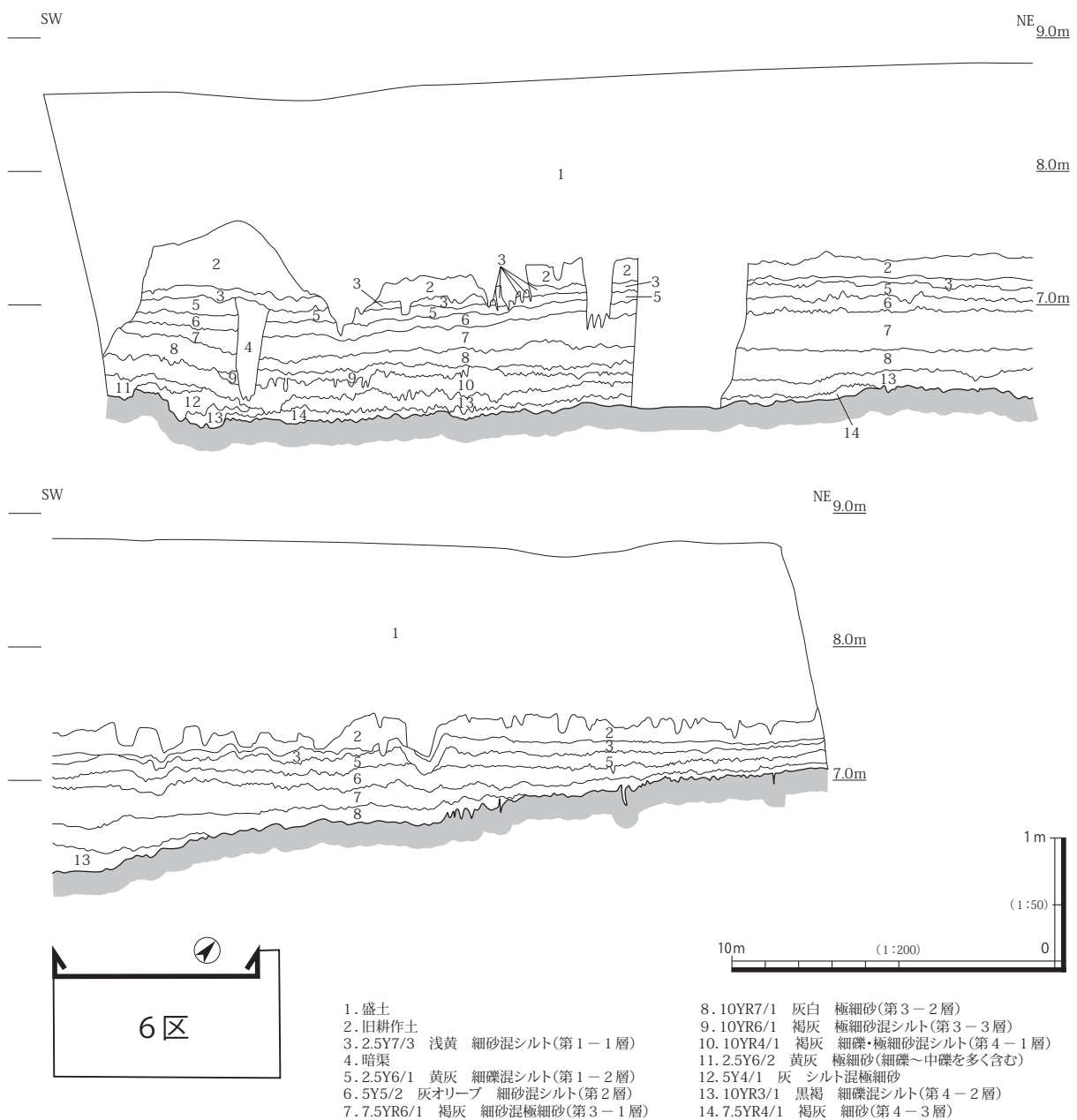
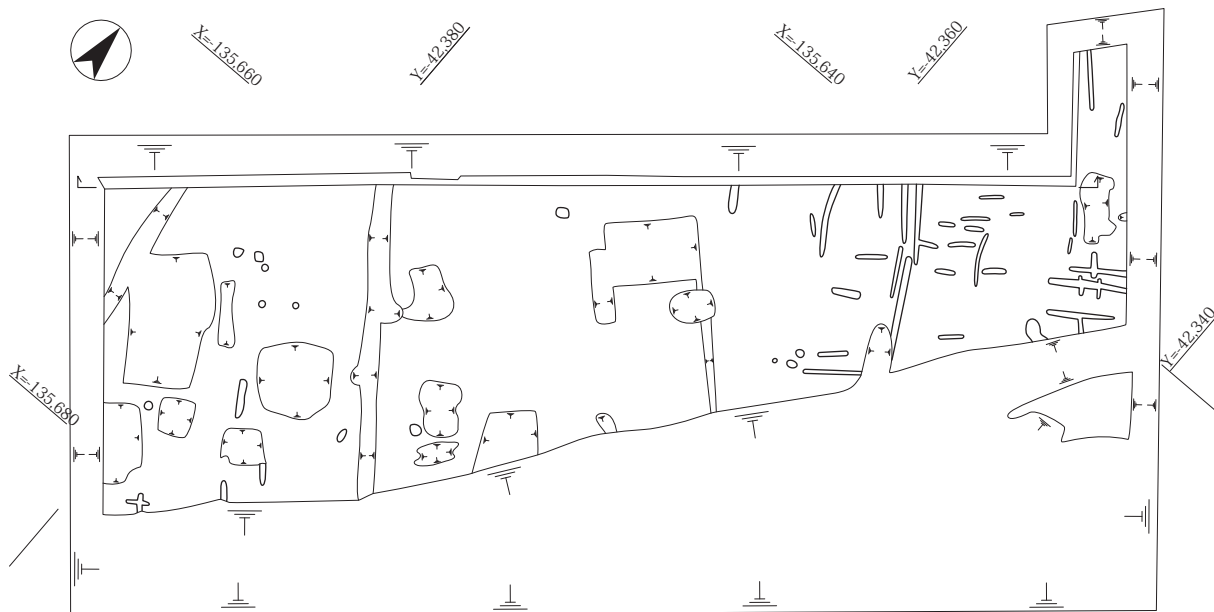
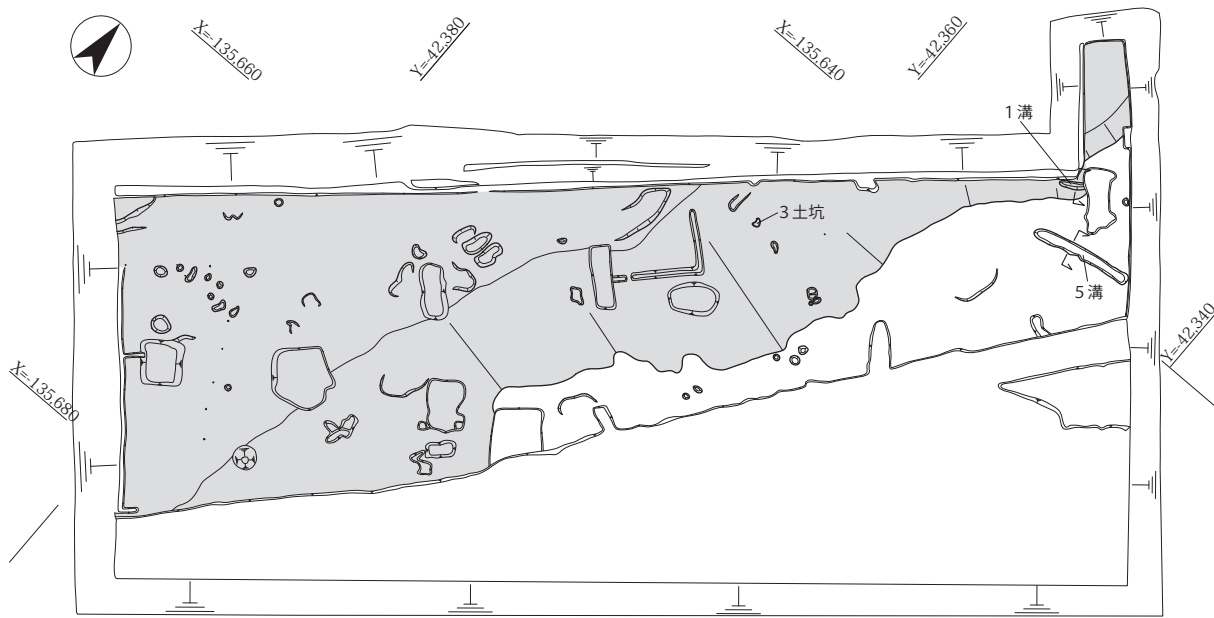


図76 6区北西壁 断面図

第1層下面



第2・4層下面



■ 谷

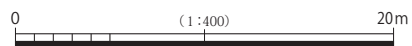


図77 6区 平面図

第1-2層 黄灰細礫シルトである。礫の混入度合いは西へいくにつれ密になる。第1-1・1-2層とも出土遺物の下限は16世紀後半である。また、両層とも耕作土層と考えられる。

第2層 灰オリーブ細砂混シルトで、鉄分の沈着が著しい。炭化物の小片もわずかではあるが混じる。出土遺物の下限は15世紀代である。第1層同様、耕作土層と考えられる。

第3-1層 褐灰細砂混極細砂である。層の下部には、直径3~4cmのシルトブロックが混じる箇所がある。

第3-2層 灰白極細砂である。調査区北東部では層中に細砂を含むが、谷部にあたる調査区北西部においては均質な極細砂で構成される。

第3-3層 褐灰極細砂混シルトで、層中に僅かに直径3~5cmの礫を含む。調査地北西部の谷部のみで確認できる地層である。下層である第4-1層の窪みの中に堆積する。

第4-1層 褐灰細礫・極細砂混シルトである。調査区北西隅では礫の割合が多くなる。調査区の西端から東へ約16mの箇所で層自体の厚みがなくなり消滅する。また、調査区北西隅で、黄灰極細砂（細礫~中礫を多く含む）と灰シルト混極細砂が高まり状に堆積するのが看取できたが、これは調査区よりも西側に展開すると考えられるシュートバーの裾部の可能性が高い。

第4-2層 黒褐細礫混シルトで、層中に直径3~5cmの礫を僅かに含む。第4-1層同様、調査区西端に近づくにつれ礫の割合が多くなる。

第4-3層 褐灰細砂である。谷地形における最下層の堆積層であるため、低地部分のみで確認できる。この第4-3層は、上層の第4-2層よりも黒色化していないことや、第5層（地山）に近似することなどから、第5層の最終堆積層である可能性がある。

3. 調査成果

第1層下面（図77、図版38） 第1-1・1-2層を除去した段階で溝群を検出した。溝はN-38°-Wを指向するものと、N-53°-Eを指向するものの二種類あり、両者が交差する箇所もある。上記の方位は嶋下郡南部の条里地割の方位とほぼ合致することから、条里地割に則った畝耕作に伴う溝と

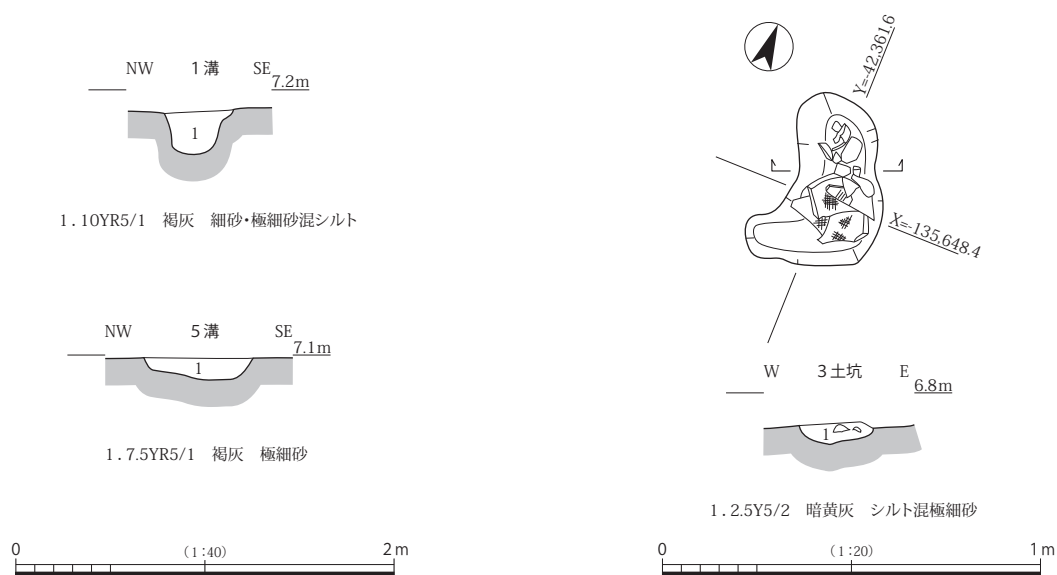


図78 1・5溝、3土坑 平・断面図

考えられる。溝は6区の東半分では密集した状態で検出されているが、東半分ではまばらに点在するのみである。溝の埋土は第1-2層である。ただし、今回の調査区よりも西に位置する墓地の移転に伴って実施された発掘調査では、上記の溝と同じ方位の溝が数条検出されているため、基本的に畝の耕作域は調査地周辺の全域に広がっていたと考えて相違ないようである。

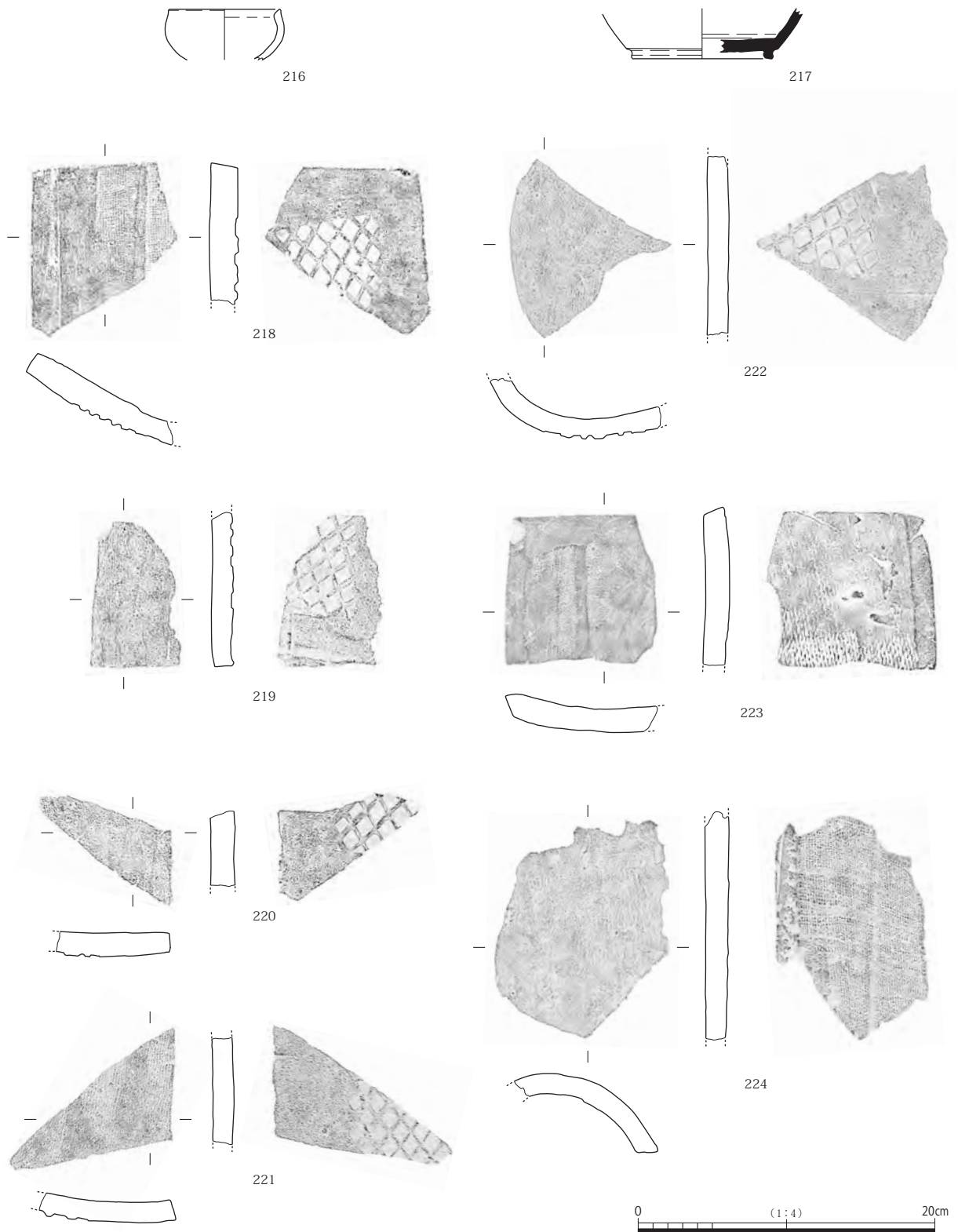


図 79 3土坑 出土遺物

第2層下面（図版 38） 第2層除去面では目立った遺構は検出されなかったかわりに、第3層以下が堆積する谷状の地形が埋没した状況を検出した。この地形については後述するが、第2層は谷状の地形が埋没し調査地周辺がほぼ平坦化した後に堆積したものと考えられる。したがって第2層を除去した段階で、無遺物層である第5層の露頭により形成される谷状地形の肩部分と、そこから落ち込む部分に堆積した第3層と第4層の拡がり方が明確に確認できた。遺構は調査区北東端部に位置する谷肩部で溝を1条検出した。

1溝（図 77・78、図版 40） 1溝は谷の肩部をN-57°-Eを指向してはしるが、溝の西端部は調査区内で収束し、東端部は攪乱によって失われる。規模は、幅0.3m、深さ0.2m、残存長1.3mを測る。断面形は矩形を呈し、埋土は褐灰細砂・極細砂混シルトの単層である。遺物の出土はなかった。

第4層下面（図 77、図版 39） 上述した谷状地形に堆積した第3層と第4層を除去した遺構面である。

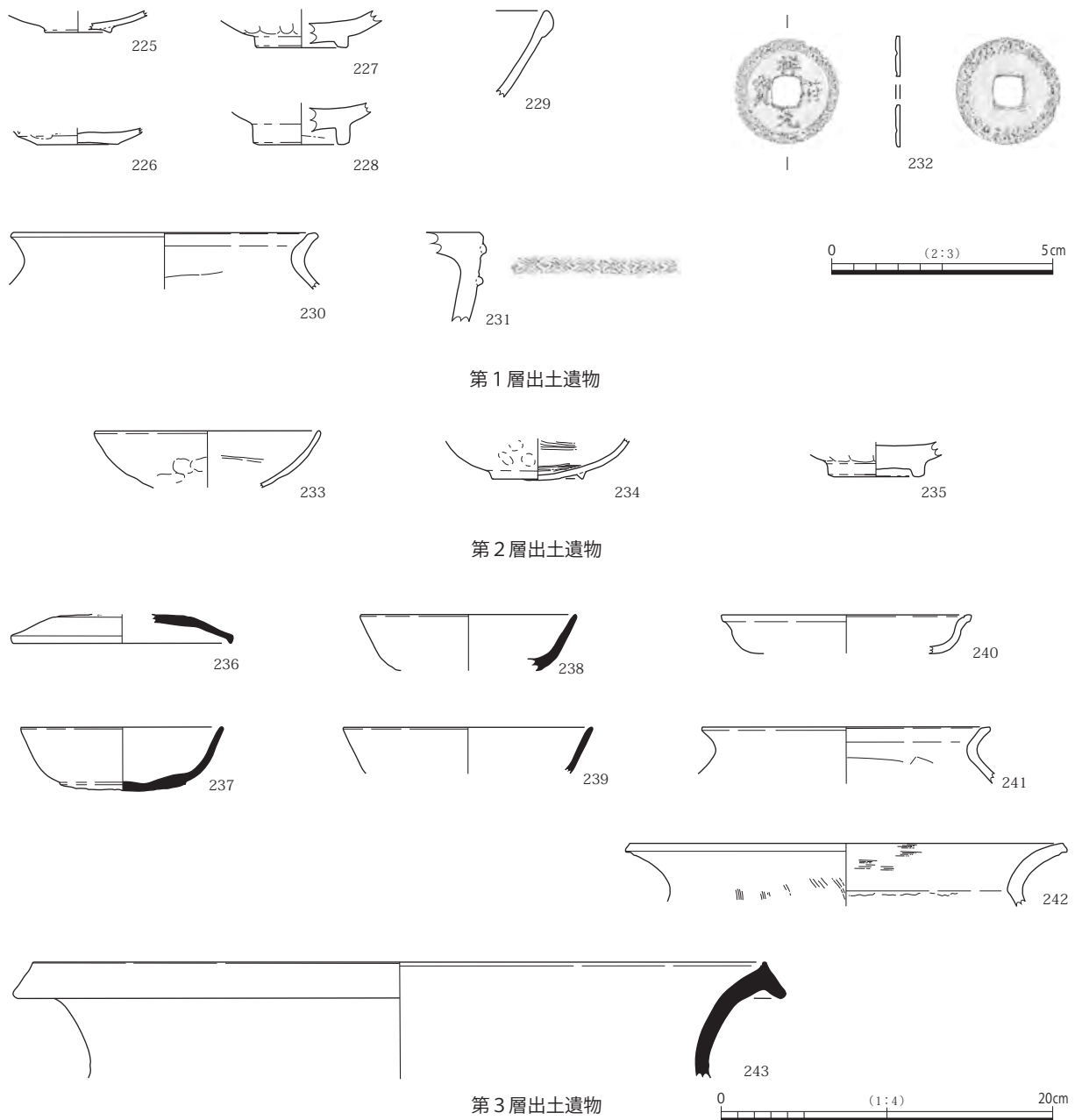


図 80 6区包含層 出土遺物

個々の遺構の説明に入る前にこの地形の成り立ちを概説する。無遺物層である第5層は、吹田操車場遺跡全域にまたがって堆積する基盤層で、これまでの調査成果から縄文時代以前に形成されたものと考えられる。この地層は、6区の西端および2区の南東端で下部から砂礫層が隆起している状況が窺えることから、何単位かに分かれる流水作用により形成されたものと考えられる。もちろん、各流水作用の規模（深さや拡がり）は異なるため、第5層は全域において同じ高さで確認できるものではない。6区で確認された谷状地形は、以上のような第5層形成過程内における堆積単位の規模の差に由来した高低差により形作られたものといえる。

谷の外側にあたる6区の東半では、第3層が埋土となる土坑1基と溝1条を検出した。

3土坑（図77～79、図版40・46） 谷状地形の中、調査区の中央やや東よりの地点で検出した不整形な土坑である。土坑内の埋土は暗黄灰色シルト混極細砂の単層で、中には瓦片と土器片が出土した。土坑の位置は谷の中とはいえ肩口に近く、さほど深度のある場所ではないため、意図的に瓦片と土器片を廃棄するために掘削されたものと考えられる。216は土師器椀、217は須恵器杯B底部である。218～224は瓦である。218～223は平瓦である。222は焼き歪みが著しい。218～222は須恵質の堅緻な焼成で、凸面に斜格子目のタタキが施されており、七尾瓦窯跡で焼成された瓦と考えられる。223は凸面に縄目タタキが、凹面には布目が残る。224は丸瓦で、凸面はヘラケズリ、凹面は布目が残る。出土した遺物はいずれも8世紀前半の所産と考えられ、七尾瓦窯の操業時期とも齟齬をきたさない。

5溝（図77・78、図版40） 谷の外側、調査区の東端で検出した溝である。土坑内の埋土は単層で、第3～1層にあたる。溝は調査区東端から始まり、谷状地形の手前で消える。溝の軸はN-85°-Eを指向する。溝の傾斜が谷状地形に向けて下降していることから、溝は谷状地形への排水を目的に掘削されたが、第2層形成時（中世）に上部が削平され、溝の最深部のみが残存したものと考えられる。遺物の出土はなかった。

谷（図77） 調査区西半部でN-24°-Eを指向し、北東から南西方向にはしる谷を検出した。検出したのは谷の東半部のみで、西半部は調査区外に展開する。調査区南西隅付近で谷の最深部を検出したことから、この谷の幅は約30mと推測される。第4層下面からの深さは1.1mを測る。

谷内の埋土は基本層序で述べた第3層と第4層にあたり、第3・4層とも3層に細分される。後述するが第3層からは8～9世紀の遺物が、第4層からは古墳時代の遺物が出土した。

第1層出土遺物（図80、図版46） 第1層からは土師器、瓦器、瓦質土器、青磁、白磁のほかに、須恵器片などが出土した。225は瓦器椀底部である。226～228は青磁碗である。226は同安窯産である。内面にカキ目が施されない簡素なもので、16世紀代のものと考えられる。228は龍泉窯産である。229は白磁碗である。230は土師器甕、231は瓦質の方形浅鉢である。IV類で14世紀末から15世紀初頭に属する。232は北宋銭の「祥符元寶」（1009年初鑄）である。

第2層出土遺物（図80、図版46） 第2層からは須恵器や土師器の細片の他に、瓦器、青磁などが出土した。233・234は瓦器椀である。235は青磁碗である。いずれも13世紀の所産と考えられる。

第3層出土遺物（図80、図版46） 第3層から須恵器や土師器などが出土した。236～239は須恵器の蓋杯である。236は杯B蓋、237～239は杯である。240は土師器皿Aで8世紀中頃に属すると考えられる。241・242は土師器甕である。243は須恵器甕で9世紀中頃の所産である。

第4層出土遺物 第4層からは、図示できなかったが、古墳時代のものを含む須恵器・土師器の細片が少量出土した。

第4章 まとめ

今回、90×230mの範囲内に大きく3箇所調査区を設け、8,948㎡において調査を行った。その結果、流路状の谷3本と、その谷に区切られた3箇所の微高地を検出した。微高地上にはそれぞれ集落域が展開し、弥生時代の遺構が検出されたほか、飛鳥から奈良時代の古代の遺構群、さらに平安から鎌倉時代の古代末から中世の遺構群を検出した。集落域はそれぞれ、調査地外に広がっていたことから、集落の本体は調査区外に展開すると推測され、今回は集落域の縁辺を検出するに留まった。さらに、後世に耕作地として利用するため、微高地の一部を削って平坦化が進められた結果、旧地形は大きな改変を余儀なくされた。また、耕作地と化した後も土砂の供給がほとんどない状態のまま耕作を繰り返すことによって、旧耕作土層直下において地山面が検出された箇所も散見できた。さらに、後世の削平によって失われてしまった遺構も多かったと考えられ、遺構が検出されなかった箇所も見受けられた。それらの改変を裏付けるように、中世以降の耕作土層中からも古墳時代や飛鳥時代の遺物をはじめ、古代の遺物が多く出土した。

今回の調査では、弥生時代から鎌倉時代の遺構や遺物が検出された。

まず、弥生時代の遺構は集落域2の東端で溝と落込みが検出された。落込みは微高地の縁辺から谷部に向かって開口しており、微高地上に刻まれた小さな開析谷が埋没したもので後期の壺が出土した。

古墳時代の明確な遺構は検出されなかったが、谷の埋土などから須恵器や土師器といった遺物が出土したことから、調査地周辺に遺構が広がる可能性が高い。

古代の遺構は3箇所の微高地上および谷部との境にあたる斜面部で検出された。検出された遺構は、掘立柱建物、ピット、井戸、木棺墓、土壙墓、土坑、溝、落込みなどであった。

集落域1は「Y」字状にはしる谷の西側を、北から延びてきた微高地上に位置する。後世の耕作地化に伴う改変と攪乱により、集落域の南半部は削平を受けていたが、掘立柱建物を5棟検出した。掘立柱建物は、ほぼ正方位に主軸を指向しており規則性が窺われる。井戸は5基検出されたが、すべて集落域の縁辺部に設置されていた。井戸は、素掘りの井戸のほか、曲物を井筒として利用していたものや、板材を組み合わせて井戸枠としたものなどが見受けられた。いずれも奈良時代の井戸であった。

集落域2は掘立柱建物1棟を検出するに留まったが、これは微高地が広がる調査区外に集落域の本体があるものと考えられる。

集落域3は、区画溝に区切られる形で掘立柱建物群が東西に二分される。東支群では3棟の掘立柱建物と3基の墓を検出した。掘立柱建物は3棟とも東西方向に主軸をもつ。掘立柱建物14は掘立柱建物15と先後関係があることや、掘立柱建物14の柱穴の掘方が他の掘立柱建物と異なる規模や形態をもつこと、さらに、周辺から飛鳥時代の遺物の出土が顕著であったことなどから、掘立柱建物14は飛鳥時代に属し、その他の建物は奈良時代に属する可能性がある。しかしながら、建物の主軸は他の建物と同じであることから、あまり時期差がないと考える方が妥当かもしれない。

また、この東支群の北西隅では2基の木棺墓と1基の土壙墓が検出された。3基の墓の墓壙はいずれも東西方向に主軸をもっており、これは掘立柱建物の主軸とも齟齬をきたさないことから、3基の墓は屋敷墓的な性格が考えられる。

一方、西支群は南北方向に主軸をもつ4棟の掘立柱建物が規格性をもって配置されていた。隣接する

5区では掘立柱建物など古代の集落に関わる遺構が検出されなかったことから、集落域の西へは拡がらず、南北方向に長く伸びる建物配置をしていたと推察される。さらに、6区においては谷の東に展開する微高地部に攪乱が広くおよんでいたことから、実態は不明であった。既往の調査成果から調査区の南東部には、中世以降の条里地割に沿った溝や池、さらに流路などが検出されたものの、掘立柱建物などの集落を示す遺構は検出されなかったことから、集落域は6区周辺にまで拡がらなかったものと考えられる。ただし、今回、谷の斜面部に掘り込まれた土坑から七尾瓦窯で焼成された瓦がまとまって出土したことから、古代に属する遺構が存在した可能性は否定できない。

谷は3条検出したが、1～3区で検出した2条の谷は、北から南へはしる谷と西から東へとはしる谷が合流して「Y」字状を呈し、南東方向に向かって調査区外へと伸びるものであった。この2条の谷は弥生時代から中世までの埋土が堆積していた。一方、残りの1条は6区の東半部を北東―南西方向にはしる。谷斜面では地山面において七尾瓦窯で焼成された瓦片が出土した土坑が検出されたことから、この谷は奈良時代以降に本格的な埋積作用が始まったものと考えられる。谷は古墳時代後期から中世までの遺物を包含する埋土が堆積していたが、最下層の土層は1～3区で検出した谷埋土に類似する土層の堆積が確認できた。これらのことから、今回検出された3条の谷は、細分される土層に多少の差異が認められたものの、同時に存在しており、同じような埋積過程を経て埋没したものと考えられる。

以上、古代における様相は、谷に規制された中で形成された微高地上を集落域として利用されるようになったが、検出された13棟の掘立柱建物は、すべて正方位を意識して建てられていた。また、建物の配置についても南北方向を意識した配置がとられていたことが看取できた。これは微高地の形状といった地形的な制約や、今回の調査では検出できなかったが道の存在に規制されたものと考えられる。

そして、13棟の掘立柱建物を検出した集落群の性格を考慮したところ、調査地周辺の地形は大きく北西から南東方向に向かって下がっており、今回の調査地から東約150mの地点の調査で、粘土採掘のためと考えられる土坑群と掘立柱建物1棟が検出されていることから、今回検出された掘立柱建物群もこの粘土採掘坑と無関係ではないであろうと推察できる。

次に、古代末から中世の様相について述べる。まず、古代末から中世の遺構は集落域1～3において認められ、掘立柱建物やピット、土坑、井戸、墓、池などの遺構を検出した。

集落域1ではピットや井戸を検出した。ピットは数十基検出されたが、建物を復原することはできなかった。しかし、調査区外にも微高地が拡がっており、ピットの分布も予想できることから、建物が建っていた可能性は残る。

集落域2においては掘立柱建物、墓、「コ」字状に巡る溝などを検出した。掘立柱建物は3棟検出したが、古代の建物と異なりいずれも主軸が北西―南東方向を指向し、かつ、柱穴の規模も小さいものであった。一方、墓は木棺墓と土壙墓を各1基検出したが、これらの墓も集落域3で検出した墓とは異なり、主軸が北西―南東方向に指向するものであった。この掘立柱建物3棟と土壙墓については、出土遺物から鎌倉時代に帰属することが明らかとなっており、木棺墓についてもこれらの遺構と同じ方向を指向することから、この時期に属する遺構であろうと推測され、屋敷墓的な性格をもつと考えられる。「コ」字状に巡る溝は掘立柱建物に先行する溝であるが、溝の方向や南東に展開すると推測される集落域に係る区画溝であろうと考えられる。

集落域3において、古代末から中世の遺構は北西部で検出した池のみであった。この池は調査区外に延びていたことや完掘できなかったことなどから、全容については明らかにならなかったが、主軸方向

は北西―南東方向を指向していた。また、瓦器椀などの遺物が出土しており、中世段階には存在したことが判明した。

以上、古代末から中世の遺構は、集落域2において掘立柱建物と墓が検出され、古代の遺構と同様屋敷墓を伴う集落であったことが窺えた。

今回の調査では、古代の集落および古代末から中世の集落が墓域を伴って存在することが明らかとなった。また、古代の集落に関しては正方位を意識して掘立柱建物や墓が築かれていたものが、古代末の段階で大きく方向を違えることが看取できた。この変化は、条里地割の施行や耕作地化の進行とも無関係ではないと考えられる。しかしながら、この地域における各時代の集落の様相が完全に明らかになったわけではなく、今後の周辺地域における調査の成果とも考えあわせていく必要がある。

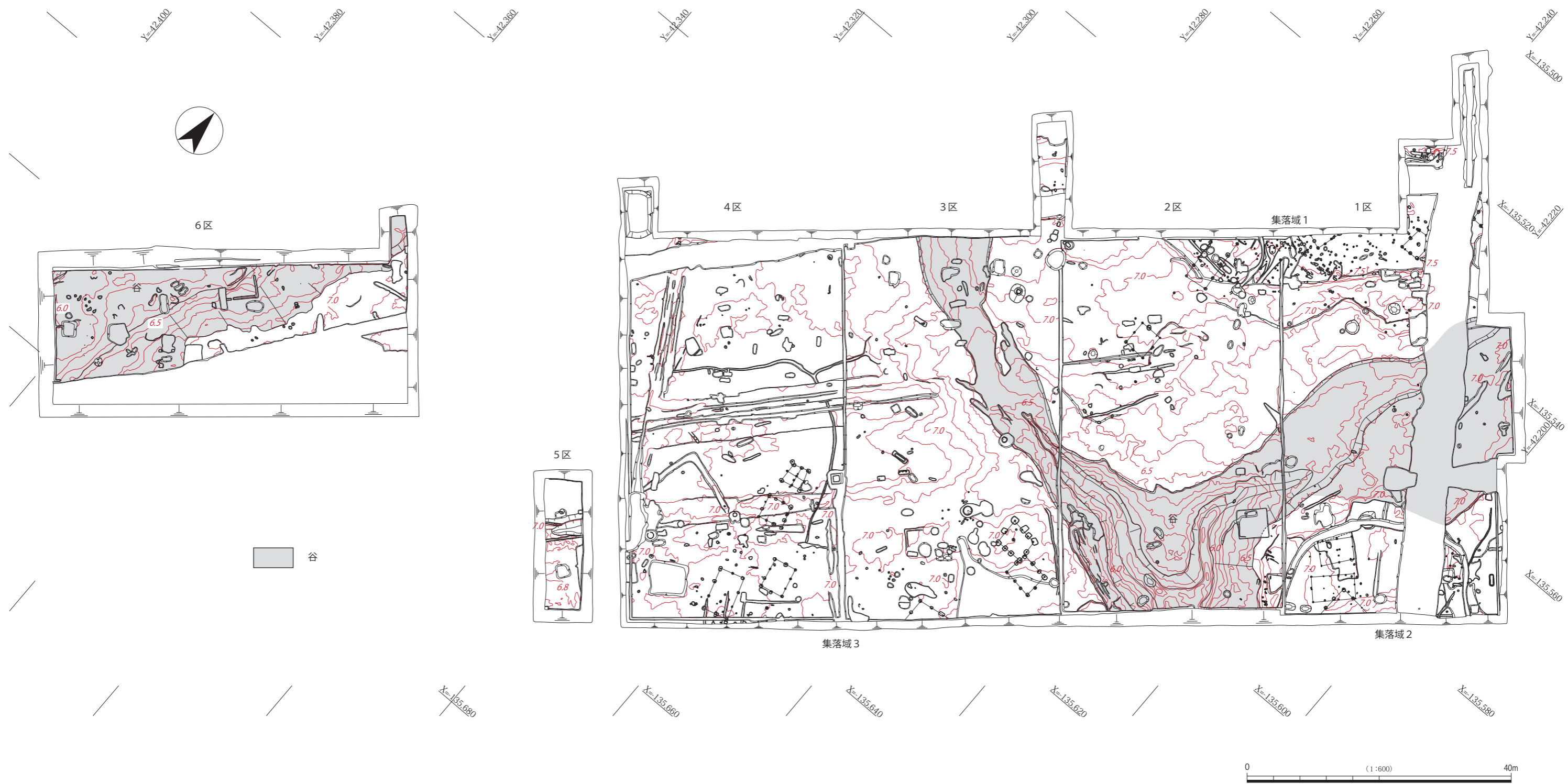


图 81 全体平面图

写真図版

1. 1区 北西壁断面東半部
(南から)



2. 1区 北西壁断面西半部
(南から)



3. 2区 北西壁断面 (南東から)



図版2 3区 北西壁断面・1区 北東壁断面



1. 3区 北西壁断面（東から）



2. 1区 北東壁断面中央部
（南から）



3. 1区 北東壁断面南半部
（西から）



1.2区 南西壁断面中央部
(北東から)



2.2区 南西壁断面南半部
(北東から)

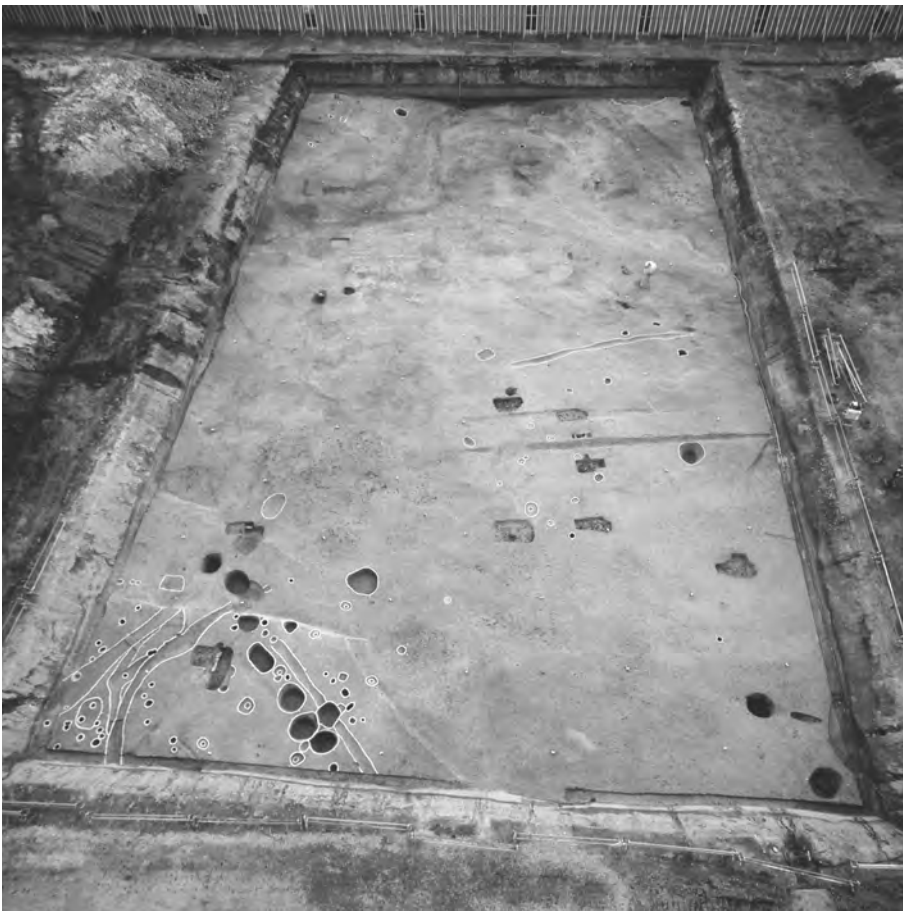


3.4区 南西壁断面(北から)

図版4 1・2区 第4層下面全景



1.1区 第4層下面 全景 (南東から)



2.2区 第4層下面 全景 (北西から)

図版5 3・4区 第4層下面全景



1.3区 第4層下面 全景(東から)



2.4区 第4層下面 全景(南東から)

図版6 古代 集落域1 (1)



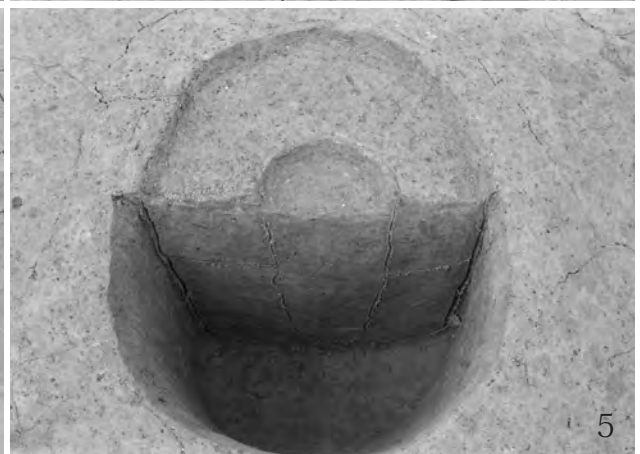
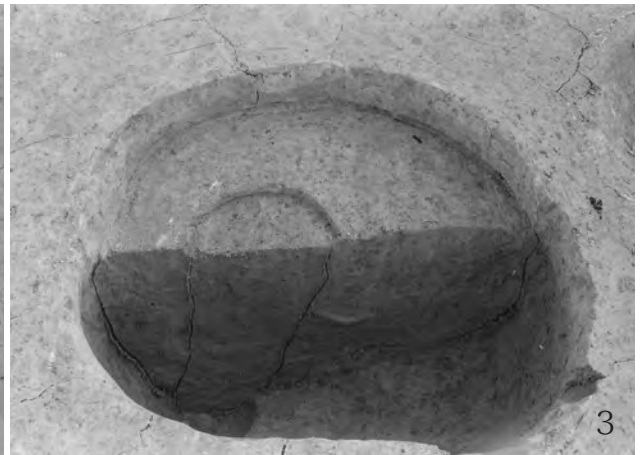
1.1区 第4層下面 集落域1 (南から)



2.2区 第4層下面 掘立柱建物1・2 (北から)



1. 2区 第4層下面 掘立柱建物1 (西から)



2. 2区 第4層下面 掘立柱建物1 106 柱穴断面 (西から) 3. 2区 第4層下面 掘立柱建物1 107 柱穴断面 (西から)
4. 2区 第4層下面 掘立柱建物1 110 柱穴断面 (東から) 5. 2区 第4層下面 掘立柱建物1 112 柱穴断面 (東から)

図版8 古代 集落域1 (3)



1. 2区 第4層下面 掘立柱建物2 (西から)



2. 2区 第4層下面 掘立柱建物2 94 柱穴断面 (東から) 3. 2区 第4層下面 掘立柱建物2 96 柱穴断面 (南から)
4. 2区 第4層下面 掘立柱建物2 100 柱穴断面 (西から) 5. 2区 第4層下面 掘立柱建物2 101 柱穴断面 (西から)



1.1区 第4層下面 掘立柱建物3 (東から)



2.1区 第4層下面 掘立柱建物8 (北から)

図版 10 古代 集落域 1 (5)



1.1区 第4層下面 掘立柱建物 13 (北から)



2.2区 第4層下面 75土坑 遺物出土状況 (南から)

1. 1区 第4層下面 356 井戸
断面 (南から)



2. 1区 第4層下面 358 井戸
断面 (南から)



3. 1区 第4層下面 358 井戸
完掘状況 (北から)



図版 12 古代 集落域 1 (7)



1.1区 第4層下面 357井戸
中層遺物出土状況 (南から)



2.1区 第4層下面 357井戸
下層遺物出土状況 (北から)



3.1区 第4層下面 357井戸
断面 (南から)

図版 13 古代 集落域 1 (8)・谷・集落域 3



1. 3区 第4層下面 集落域1・3と谷 (北から)



2. 3区北東端部 第4層下面 集落域1 (東から)

図版 14 古代 集落域 1 (9)



1. 3区 第4層下面 486 井戸
断面 (南から)



2. 3区 第4層下面 486 井戸
井戸枠・遺物出土状況
(南から)



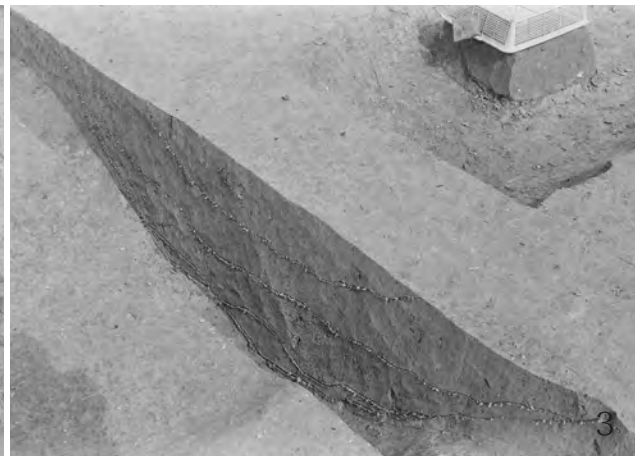
3. 3区 第4層下面 486 井戸
完掘状況 (南から)



1.1区 第4層下面 集落域2 全景(西から)



2



3



4

2.2区 第4層下面 90土坑 断面(北西から)

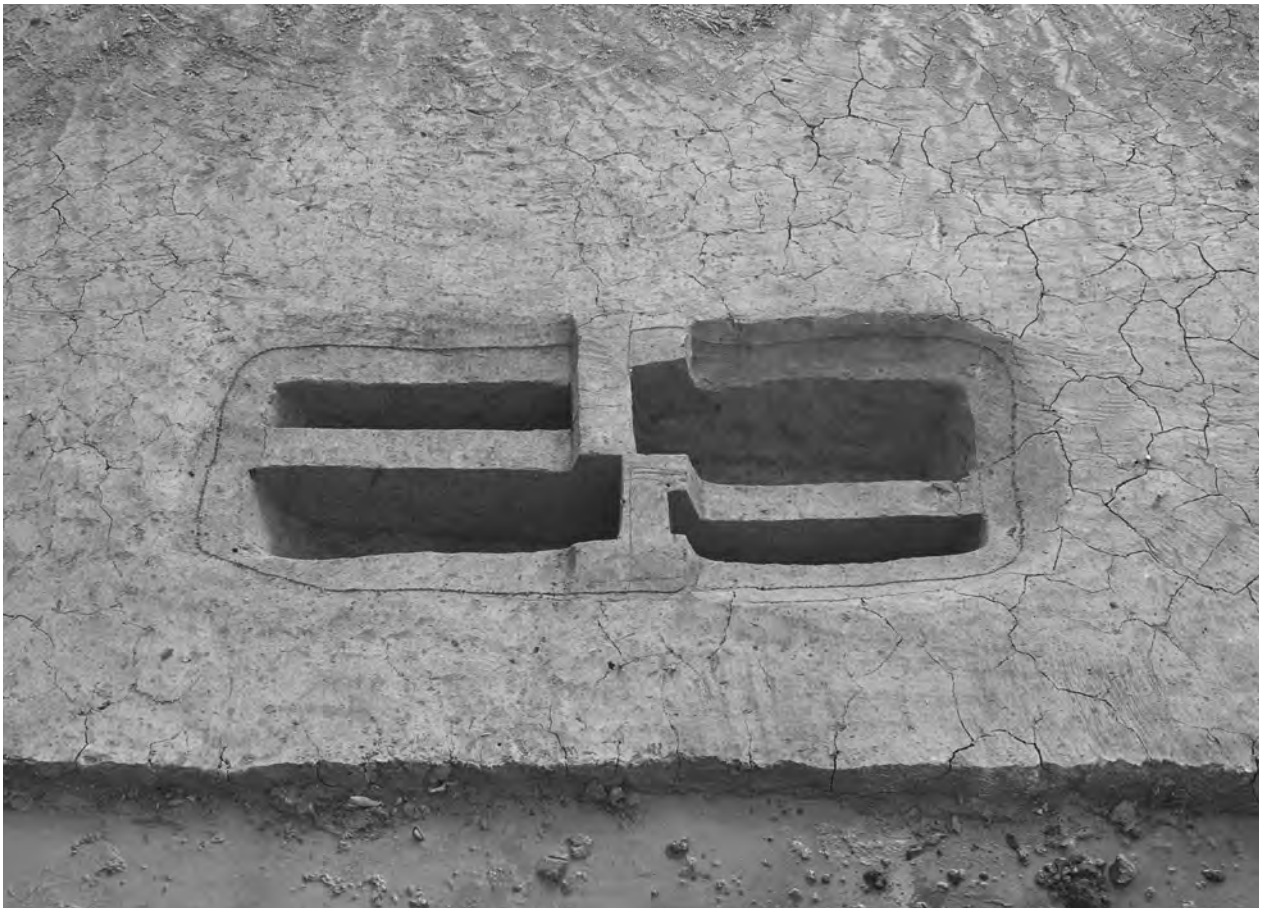
3.1区 第4層下面 413土坑・412溝 断面(南東から)

4.1区 第4層下面 441土坑 断面(南西から)

図版 16 古代 集落域 2 (2)



1. 1区 第4層下面 445 木棺墓 検出状況 (北東から)



2. 1区 第4層下面 445 木棺墓 棺内埋土除去状況 (北東から)



1. 1区 第4層下面 445 木棺墓 完掘状況 (北東から)



2. 1区 第4層下面 445 木棺墓 断面 (東から)

図版 18 古代 集落域 2 (4)



1. 1区 第4層下面 437 落込み 土器出土状況 (西から)



2. 1区 第4層下面 469 落込み・462 溝 断面 (南から)



3. 1区 第4層下面 469 落込み 土器出土状況 (南から)

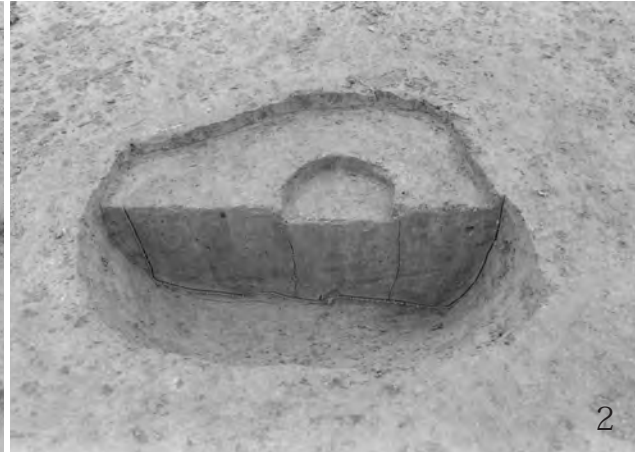
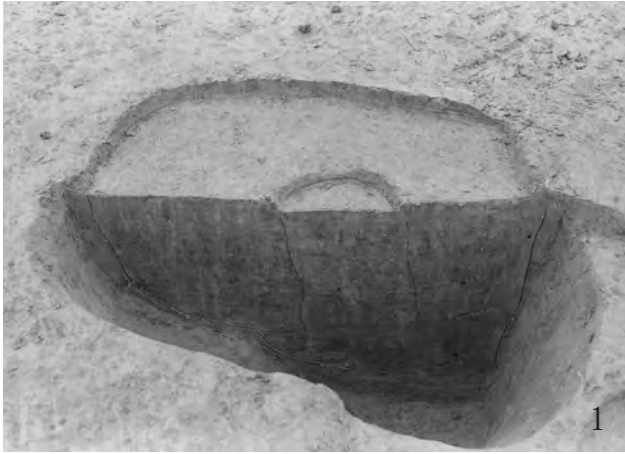


1.4区 第4層下面 集落域3西半部 全景(北から)

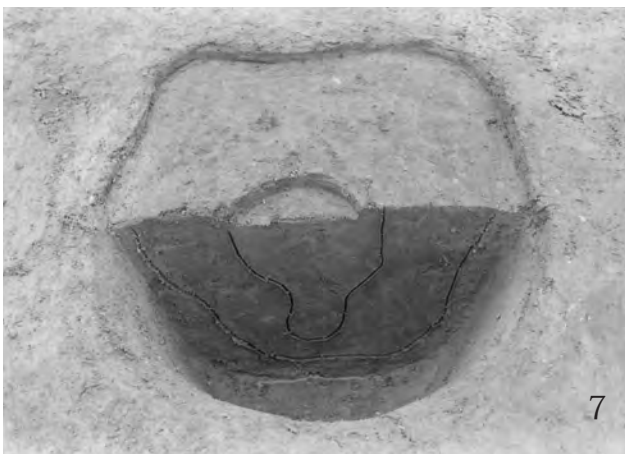


2.4区 第4層下面 集落域3西半部 掘立柱建物4~7(北東から)

図版 20 古代 集落域 3 (2)

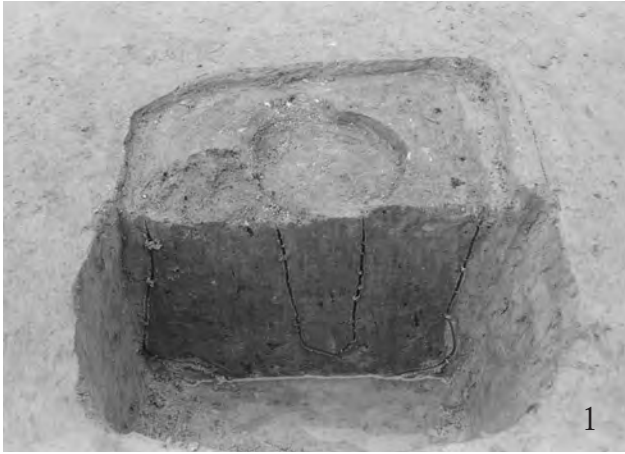


1. 4区 第4層下面 掘立柱建物 4 188 柱穴断面 (北から) 2. 4区 第4層下面 掘立柱建物 4 189 柱穴断面 (北から)
3. 4区 第4層下面 掘立柱建物 4 192 柱穴断面 (南から) 4. 4区 第4層下面 掘立柱建物 4 194 柱穴断面 (南から)



5. 4区 第4層下面 掘立柱建物 5 200 柱穴断面 (東から) 6. 4区 第4層下面 掘立柱建物 5 201 柱穴断面 (東から)
7. 4区 第4層下面 掘立柱建物 5 202 柱穴断面 (東から) 8. 4区 第4層下面 掘立柱建物 5 204 柱穴断面 (南から)

図版 21 古代 集落域 3 (3)



1



2



3



4

1. 4区 第4層下面 掘立柱建物6 172 柱穴断面 (南から) 2. 4区 第4層下面 掘立柱建物6 173 柱穴断面 (西から)
3. 4区 第4層下面 掘立柱建物6 176 柱穴断面 (西から) 4. 4区 第4層下面 掘立柱建物6 177 柱穴断面 (北から)



5



6



7



8

5. 4区 第4層下面 掘立柱建物7 178 柱穴断面 (東から) 6. 4区 第4層下面 掘立柱建物7 181 柱穴断面 (東から)
7. 4区 第4層下面 掘立柱建物7 183 柱穴断面 (西から) 8. 4区 第4層下面 掘立柱建物7 185 柱穴断面 (西から)

図版 22 古代 集落域 3 (4)



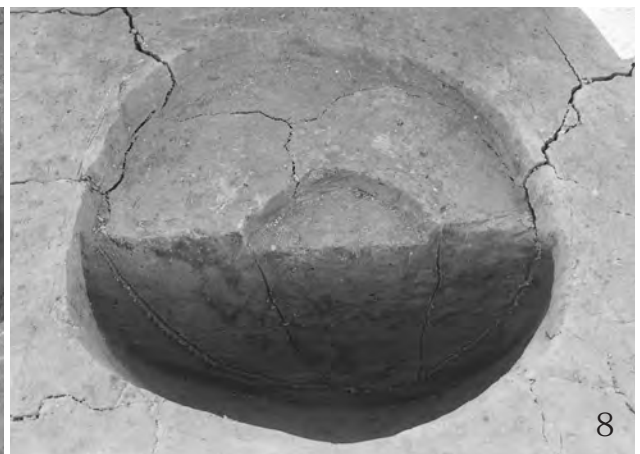
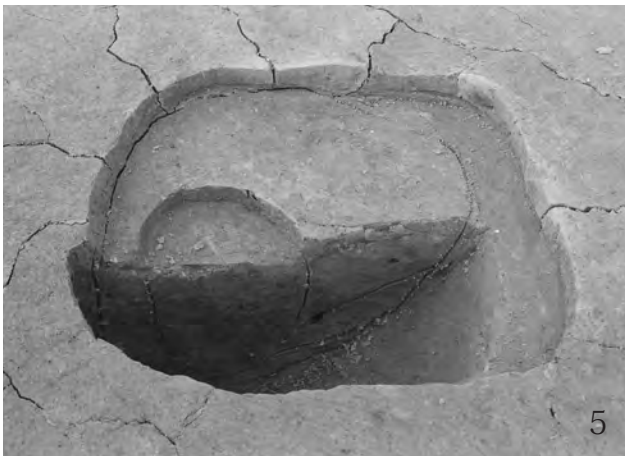
1. 3区 第4層下面 集落域3東半部 全景 (北から)



2. 3区 第4層下面 集落域3東半部 掘立柱建物 14・15・529 溝 (北から)



1. 3区 第4層下面 掘立柱建物 14 519 柱穴断面(南から) 2. 3区 第4層下面 掘立柱建物 14 521 柱穴断面(北から)
 3. 3区 第4層下面 掘立柱建物 14 522 柱穴断面(南から) 4. 3区 第4層下面 掘立柱建物 14 523 柱穴断面(南から)

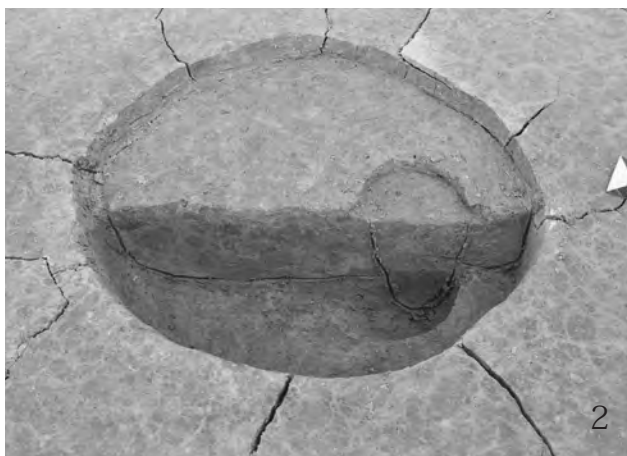


5. 3区 第4層下面 掘立柱建物 15 505 柱穴断面(南から) 6. 3区 第4層下面 掘立柱建物 15 509 柱穴断面(北から)
 7. 3区 第4層下面 掘立柱建物 15 512 柱穴断面(北から) 8. 3区 第4層下面 掘立柱建物 15 513 柱穴断面(東から)

図版 24 古代 集落域 3 (6)



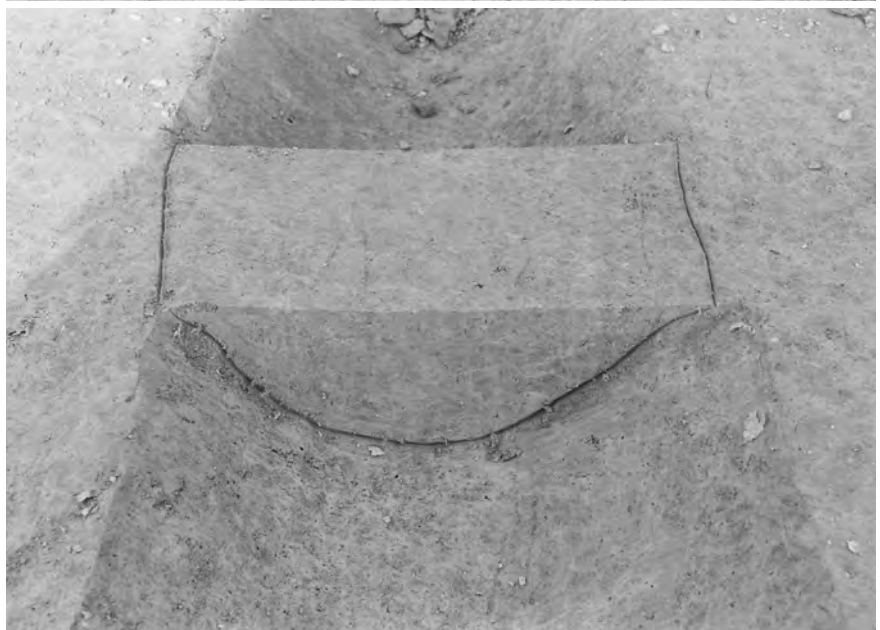
1. 3区 第4層下面 掘立柱建物 16(東から)



2. 3区 第4層下面 掘立柱建物 16 525 柱穴断面(西から) 3. 3区 第4層下面 掘立柱建物 16 526 柱穴断面(北から)
 4. 3区 第4層下面 掘立柱建物 16 527 柱穴断面(北から) 5. 3区 第4層下面 掘立柱建物 16 528 柱穴断面(北から)



1. 4区 第4層下面 152 土坑
遺物出土状況 (西から)



2. 4区 第4層下面 117 溝
断面 (南西から)



3. 4区 第4層下面 118 溝
断面 (南西から)

図版 26 古代 集落域 3 (8)



1.4区 第4層下面 124 溝
断面 (南西から)



2.4区 第4層下面 127 溝
断面 (南西から)



3.4区 第4層下面 151 溝
断面 (南東から)



1.3区 第4層下面 487木棺墓 完掘状況(東から)



2.3区 第4層下面 487木棺墓 断面(東から)

図版 28 古代 集落域 3 (10)



1. 3区 第4層下面 489 木棺墓 完掘状況 (西から)



2. 3区 第4層下面 489 木棺墓 断面 (東から)



1. 3区 第4層下面 490 木棺墓 完掘状況 (東から)



2. 3区 第4層下面 490 木棺墓 断面 (東から)

図版30 古代 谷



1.2区 第4層下面 谷 完掘状況 (西から)

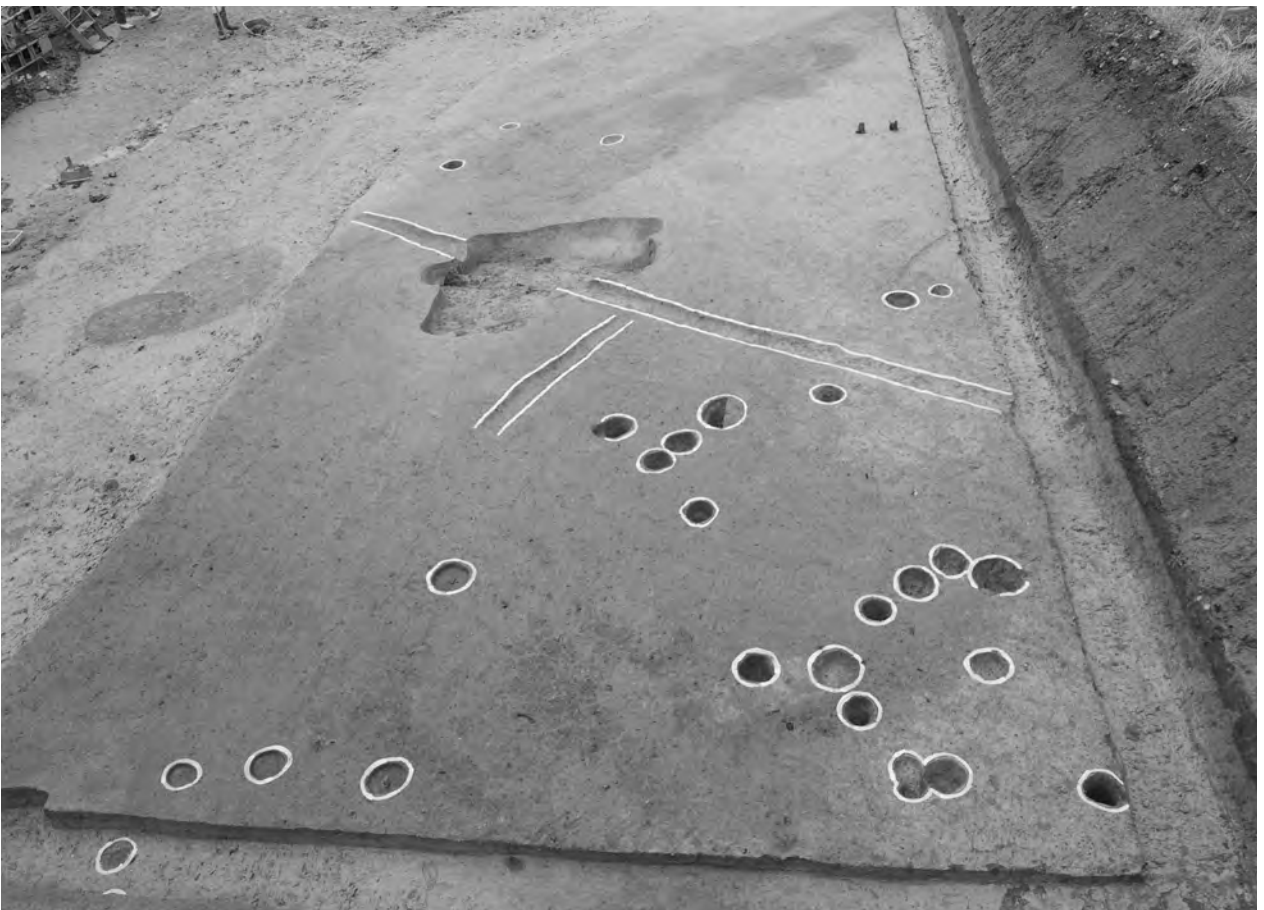


2.2区 第4層下面 谷 完掘状況 (南から)

図版 31 古代 谷断面・古代末～中世 集落域 1 (1)



1.2区 第4層下面 谷断面(西から)



2.2区 第2層下面 集落域1 ピット群(北東から)

図版 32 古代末～中世 集落域1 (2)



1. 1区 第2層下面 243ピット
断面(南から)



2. 2区 第2層下面 49土坑
断面(南から)



3. 2区 第2層下面 52土坑
断面(西から)

1. 2区 第2層下面 55 土坑
断面 (南西から)



2. 2区 第2層下面 65 土坑
断面 (南から)



3. 2区 第2層下面 70 土坑
断面 (南から)



図版 34 古代末～中世 集落域 2 (1)



1.1区 第2層下面 集落域2 掘立柱建物9・10 検出状況(南西から)



2.1区 第2層下面 掘立柱建物12(南東から)

1. 1区 第2層下面 472土壙墓
検出状況 (南東から)



2. 1区 第2層下面 472土壙墓
遺物出土状況 (南東から)



3. 1区 第4層下面 440土坑
断面 (東から)



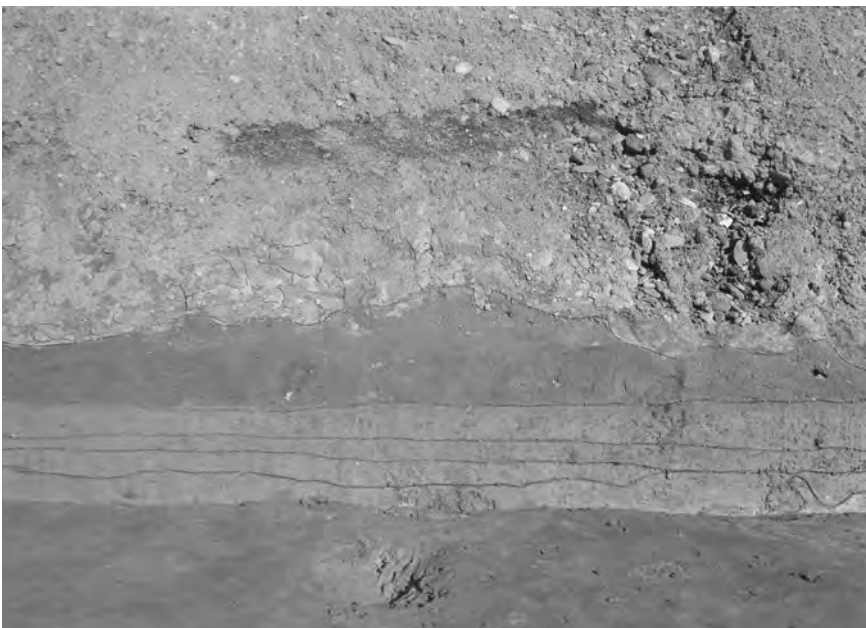
図版 36 古代末～中世 集落域 2 (3)・集落域 3・5区 北西壁断面



1.1区 第2層下面 412溝
遺物出土状況(南から)



2.4区 第2層下面 116池
断面(北東から)



3.5区 北東壁断面(南西から)

図版 37 5区 第4層下面 全景・6区 北西壁断面



1. 5区 第4層下面 全景
(南東から)



2. 6区 北西壁断面東半部
(南東から)



3. 6区 北西壁断面西半部
(南東から)

図版 38 6区 第1層下面・第2層下面 全景



1.6区 第1層下面 全景（北東から）



2.6区 第2層下面 全景（北東から）



1.6区 第4層下面 全景（東から）

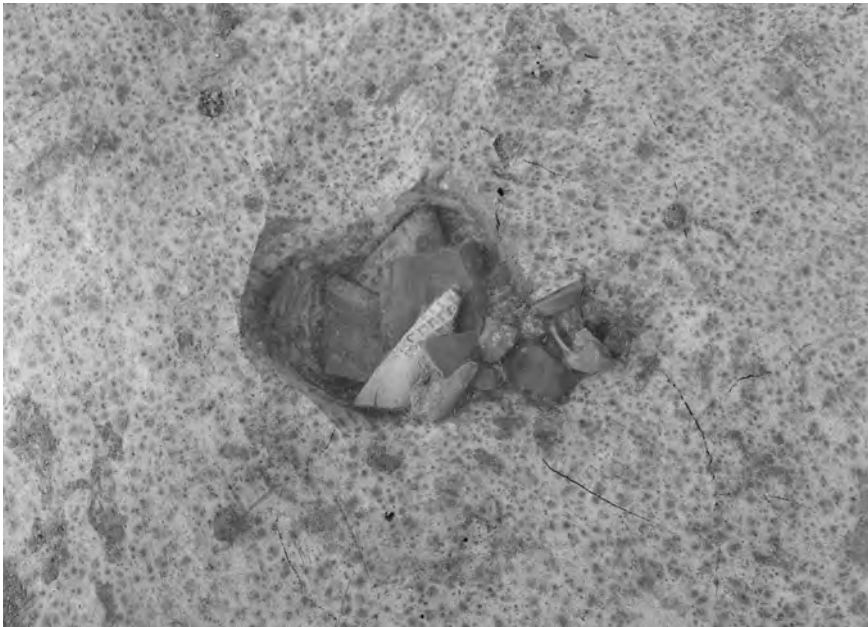


2.6区 第4層下面 全景（南から）

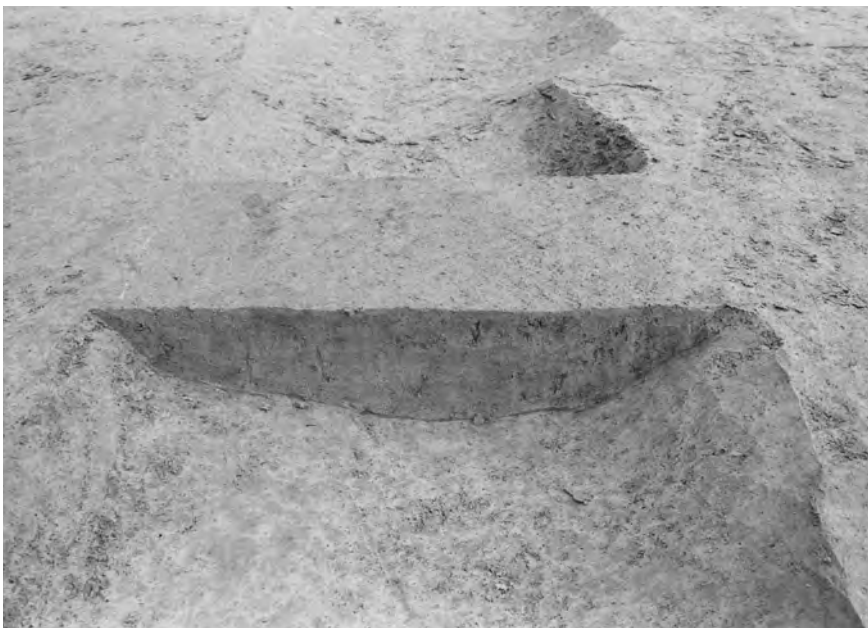
図版 40 6区 検出遺構



1. 6区 第2層下面 1 溝断面
(南西から)



2. 6区 第4層下面 3 土坑
瓦片出土状況 (南から)



3. 6区 第4層下面 5 溝断面
(南西から)



1



8



3



9



14



7



16



21

图版 42 出土遺物 (2)



26



61

62



27



30



71



32



52



74



75



105



112



93



140



109



141

图版 44 出土遺物 (4)



144



148



149



152



165



186



193



194

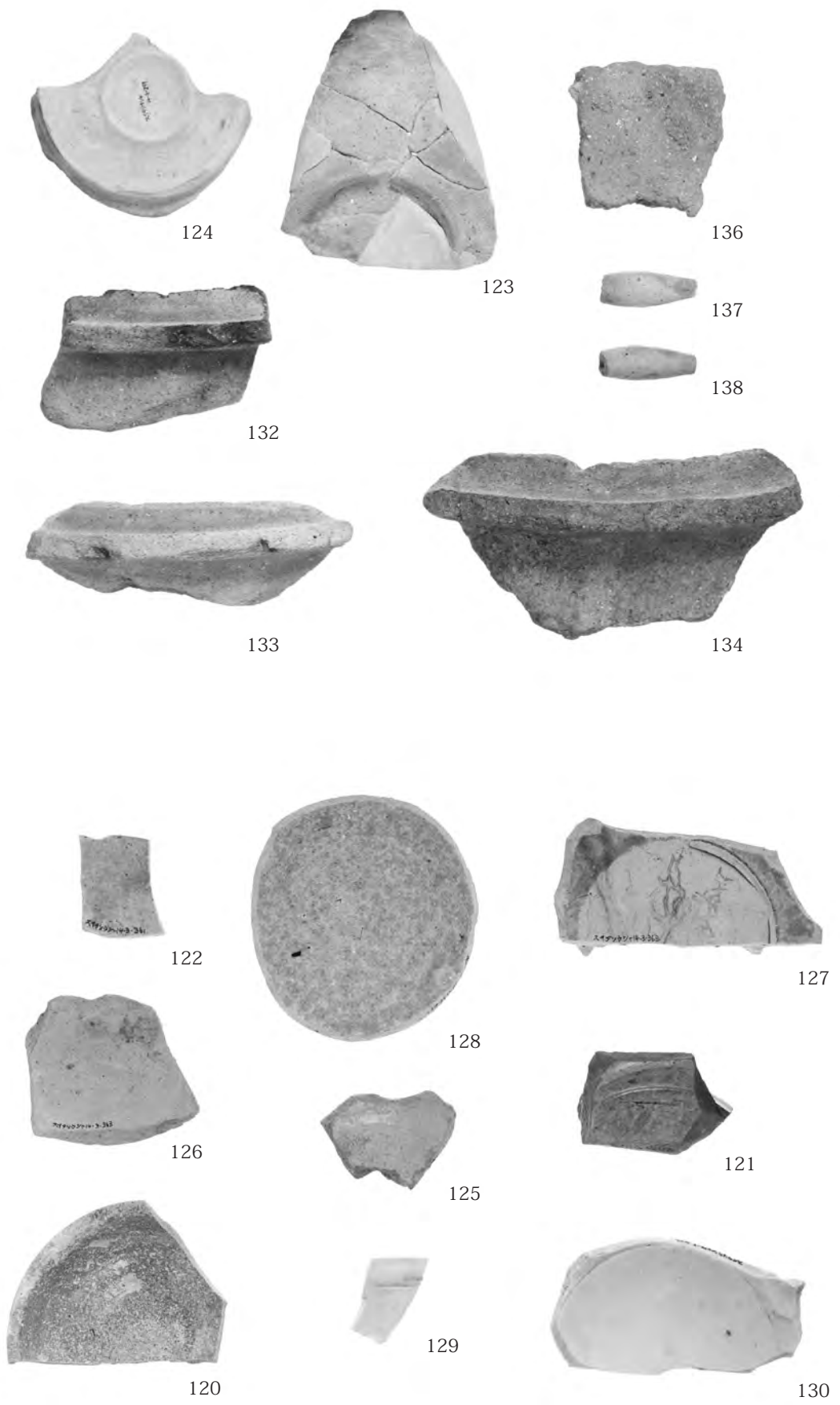


195

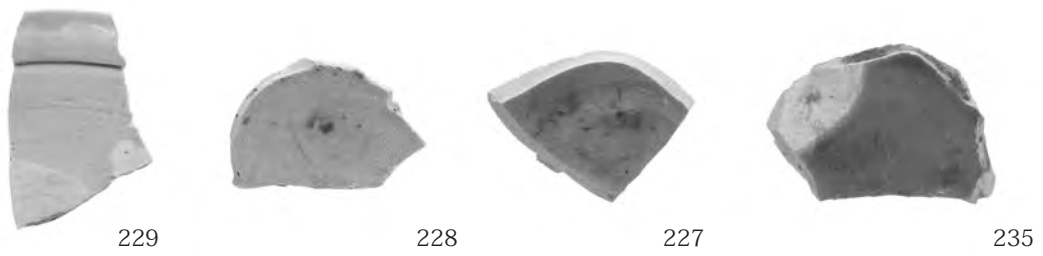
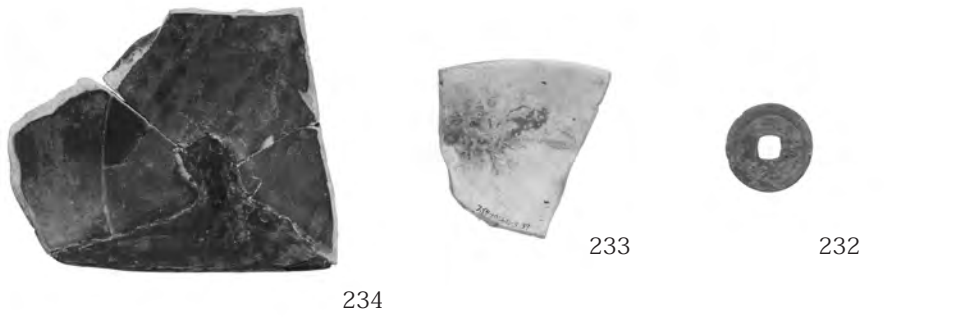
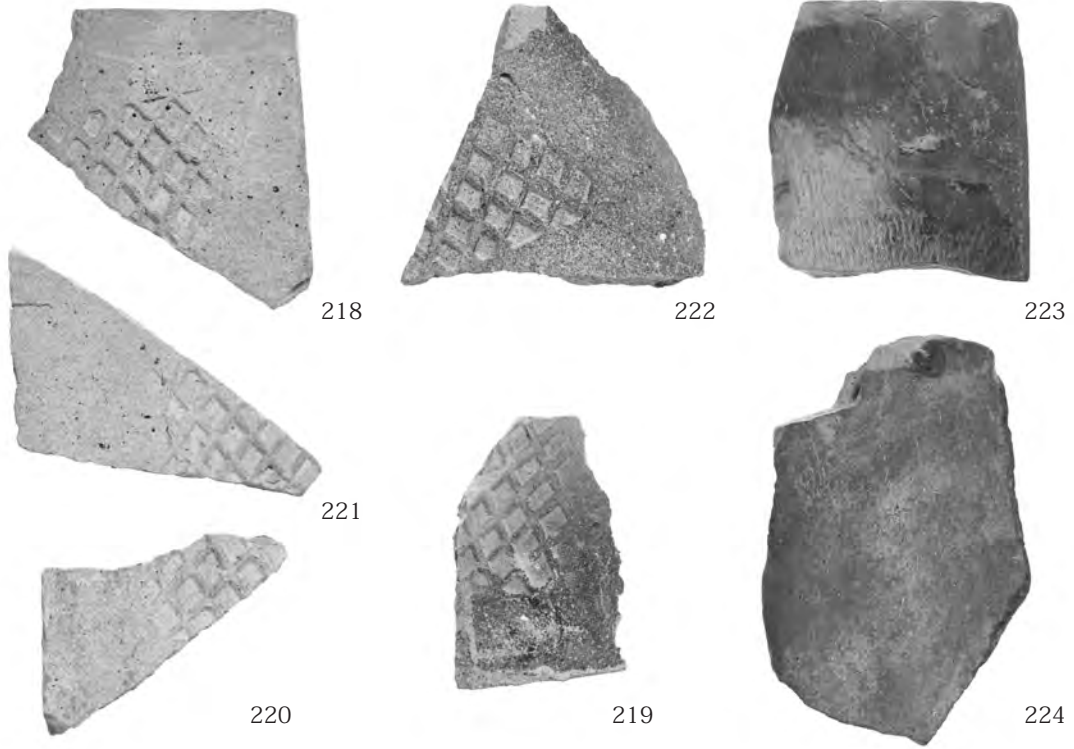


198

図版 45 出土遺物 (5)



图版 46 出土遺物 (6)



報 告 書 抄 録

ふりがな	すいたそうしゃじょういせき11							
書名	吹田操車場遺跡11							
副書名	吹田市新市民病院移転建替事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第262集							
編著者名	後藤信義(編)・奥村茂輝							
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072(299)8791							
発行年月日	2015年12月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
すいたそうしゃじょういせき 吹田操車場遺跡	おおさかふ すいたし 大阪府吹田市 しばたちょう ちない 芝田町地内	27205	73	34° 46' 37"	135° 32' 19"	2014.10.1 ～ 2015.4.30	8,948	吹田市新市民病院移転建替事業
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構		主な遺物		特記事項	
吹田操車場遺跡	集落 墓域 生産	弥生時代 古代～中世	掘立柱建物・ピット・ 土坑・井戸・木棺墓・ 土壙墓・溝・落込み・ 谷		弥生土器・須恵器・土師 器・黒色土器・灰釉陶器 ・緑釉陶器・青磁・白磁 ・瓦質土器・瓦器・瓦・ 釘・銭貨・石鏃・砥石・ 温石・碁石		弥生時代以降の谷 古代の集落 中世の集落・田畠	
要 約	<p>今回の調査では、弥生時代に形成された流路状の谷とその周囲に展開する3箇所の微高地上に古代および古代末から中世の集落域を検出した。まず、古代の集落域では区画溝で囲まれた中に正方位を主軸にもつ掘立柱建物群と、その周辺に西に頭位をもつ木棺墓や土壙墓が検出された。また、集落域の縁辺部では古代の遺物を伴う井戸が検出された。さらに、調査地の近隣に所在する七尾瓦窯で焼成された瓦片が出土した土坑も検出した。</p> <p>一方、古代末から中世の集落域においては、古代との建物とは方向を違えて掘立柱建物や木棺墓並びに土壙墓が検出された。</p> <p>谷部においても弥生土器をはじめ、古墳時代から中世にかけての遺物が出土したことから、調査地の周辺に弥生時代や古墳時代の遺構の存在が推察された。</p> <p>以上、微高地上において古代および古代末から中世の2時期の集落が、建物の方向を違える形で検出されたことは、土地利用に大きな変化があったことを窺わせる資料となった。</p>							

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第262集

吹田操車場遺跡 11

吹田市新市民病院移転建替事業に伴う
吹田操車場遺跡発掘調査報告書

発行年月日 / 2015年12月28日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター

〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号

